迷子な俺と家出をした私

白翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
迷子な俺と家出をした私

【Ｎコード】
Ｎ２１８６Ｐ

【作者名】
白翼

【あらすじ】
体が凍えるほど寒い１１月の夜。ある理由によりイライラしていた和夢は、駅ホームのベンチで俯いている澄音と出会う。
そして彼女が家出をしたことに気づくと、自分の愚痴を聞くバイトをしないかと話を持ちかけていく。
これは、夢を現実としてしか見れなかった男と、夢を現実として見ようとしなかった女の出会いと別れの物語である。

※この作品は執筆を終えたものを直しながらあげているので、更新が早いです。

二人が出会った夜

1

大切な友達との楽しい語らいも終わり、中野和夢（なかの かずむ）の気分は最悪であった。

「うう、それにしても夜は冷えるな」

今年は秋というものはどこかに行ってしまったのだろう。もう一枚中に服を着てくるべきだったと、白い息を吐きながら後悔していく。

充分にチャージしてあるＩＣカードをかざすと、駅のホームへと向かう。

「何とか最終には間に合ったみたいだな」

いや、それを理由にあの場から抜け出したのだ。これで間に合わなければお笑い草だ。

本当は居酒屋から、カラオケ屋に行ってオールでもしようかと誘われていた。だがどうにも乗り気になれなかった。

それは、居酒屋で話していた内容も含めてのことである。

「大学四年の忙しくなる前に旅行に行こうか。――チッ、人の気も知らないでよ」

そう愚痴を漏らすが、悪いのは何もあいつらだけではない。あのことに触れようとしない、自分も同罪である。

しかし今更考えても仕方がない。和夢はとにかく甘い飲み物が飲みたいと、自販機の前に立つ。
ピピッと電子音がなると、温かいそれを手に取る。

「くそっ、何やってるんだかな！」

いつもの癖で、微糖のコーヒーを買ってしまう。そう、いつもの癖で買ってしまうほど、自分はこの飲み物が好きだ。
だが今は求めていない。こんな状態では、あまり頭をスッキリさせたくはないから。
再びＩＣカードをかざすと、今度は間違いなくコーヒーではなくコーヒー『飲料』を手に取っていく。

「こっちの微糖は……まあ飲むのはいつでもいいか」

とりあえず座るところはないかと、ホームを歩きだす。すると、中心部の辺りに長いベンチを見つける。
だが目的の場所を前にして、和夢は足を止める。そしてベンチで体育座りおし俯いている女の子を観察していく。
ピンク色のダッフルコートに、白黒のチェックのミニスカート。顔は見えないが、服装からして間違いなく女性だろう。
参ったなと頭を掻く。あんないかにもわけありな人がいては、座るに座れない。

「本当に参ったな……」

しかし和夢は前に進んだ。自分でも突拍子のない行動だと思っているが、それでも足は止まらない。
普段なら、こんな好奇心を剥き出しにはしないだろう。だが今は違う。

この心の中にあるイライラを発散させてくれるのなら、いくらでも冒険心を出そうと思った。
広いベンチでありながらも、和夢は彼女の隣に座り込んでいく。
「次の電車で最終だが、それで帰るのか？」
視線を向けることなく声をかけていく。だが彼女は反応を示さない。
それとも援助交際か何かを待っているのか。とはさすがに言えなかった。
それは彼女の隣にあるドラムバックを見てピンと来ていたからだ。
「家出してきたのか？」
白い息を吐きながら語りかける。しかし先ほどと同じで、何の反応も返ってこない。
どうしたものかと頭を悩ませる。その瞬間、反対車線へ電車が通過するという案内が流れる。
自分たちの目の前を一気に走り抜ける急行電車は、風を起こし冷たい体に鞭を打っていく。
本当にもう一枚服を着るべきだった。震えながらそう思うと、隣の女の子も震えているのが見てわかった。
いくらコートを着ているといっても、下がミニスカートで温かいというほうが嘘である。
「あっ、そうだ。えーっと」
ポケットに手を入れると、先ほど買ったコーヒーとコーヒー飲料を手に取る。

「間違ってホットを二本買ったんだけど、飲むか？」
「……甘いやつなら飲む」

それはようやく聞けた彼女の声だ。だが貰う立場でありながら、飲み物を指定するのは些か無遠慮な気がする。
しかし遠慮なしに話しかけたのはこちらが先だ。右手に持ったコーヒー飲料を渡すと、彼女はようやく顔を上げる。

「……ありがとう」
「どういたしまして」

頭が冴えるのは嫌なんだけどな。心の中で愚痴ると、微糖のコーヒーの蓋を開ける。
女の子は随分とここにいたのだろう。かじかんだ手でなかなか蓋を開けることができず、それを数回繰り返すとようやく蓋を開けていく。
両手を温めるように缶を持つと、ゆっくりと口に運んでいく。

「……熱い」
「そりゃホットだからな。冷たいよりはましだろう」
「……確かにそうね」
「それじゃあ、一息ついたところでもう一度聞くが、家出でもしてきたのか？」
「そうよ。お父さんったら、部屋に入ってくるなり私の大切なものを問答無用で壊していったの。だから頭に来て家から出ていったのよ」
「そりゃまた、分かりやすい理由だな」
「……私のこと、子供だって馬鹿にしてるでしょう」
「馬鹿になんてしてないさ。それに俺だってまだ子供みたいなもんだ」

子供だからこそ、今ある信頼関係を壊すことができない。いや、そう考えるのは打算的な大人な対応なのだろうか。

どちらにしても、今の自分自身はあまり好きではない。

正直な気持ちを伝えると、彼女は「ふーん」と興味がないような返事をする。

「だったら高校二年生の私はもっと子供よ。でもね、子供には子供なりに貫き通したい夢があるの。でも、お父さんはそれを認めてくれなかった」

「……夢か。ああ、その言葉懐かしいな。本当に――――」

果たして自分が夢でなく、現実だけを見始めたのはいつからだっただろう。

いや、訴えかけるだけ無駄だ。それがわかっているからこそ、大切な仲間と今の関係を続けているのだから。

和夢はコーヒーを飲むたびに頭が冴えていくのを感じる。だからこそ、ハッキリと言葉にした。

「なあ、今日一日バイトしないか。今なら一泊一食付だ」

「……嫌らしいバイトならごめんよ」

「嫌らしいことなんて、するつもりはない。ただ一晩だけ俺の愚痴に、相槌だけ打ってくれればそれで構わない」

言った後に、そんな言葉を信じるわけないと思う。心の中に鬱憤は溜まっているが、どうかしていると馬鹿らしくなっていく。

だが馬鹿なのは、どうやら自分だけではなかったようだ。

「……いいわよ。それだけでいいなら付き合ってあげる」
「おい、そんな簡単に言っていいのか」
「だって愚痴を聞くだけでしょう。それでこんな寒空から抜け出せるなら、安いわよ」

彼女は人を疑うことを知らないのか。それとも自分と同じくショックなことのせいで、冒険心が出てしまったのか。
だがどちらでもよかった。彼女が同意してくれるなら、断るようなことはしない。
するとタイミングを見計らったかのように、最終電車がやってくる。

「それじゃあ俺の家に行くか。俺の名前は中野和夢って言うんだ。お前は？」
「私の名前は外海澄音（そとみすみね）よ」
「そうか。じゃあ一晩だけよろしく頼むな。こっちは言いたいことが山ほどあってな」
「別にかまわないわ。私は相槌打つだけなんだから」

ドアが開くと、澄音の手を握り乗車する。そして二駅先のアパートへと帰宅していくのだった。

第1章「壊された物と壊せない関係」　Ｐａｒｔ１

／1

私はいったい何をしてるんだ。

朝、知らない家のベッドで起き上がると、澄音は頭を抱える。

「確かに昨日はいろいろあった。お父さんに機材を全部壊されて、家出をしたはいいが行くところなんかなくて。途中に金髪の男に必要以上に追い回されて。それで行くところがなくて、正直どうしようかと思ってた。寒さで頭がぼーっとしてたことも認める」

だからといって一人暮らしの男の家に転がり込むのはどうであろうか。コートは脱いでいるが、衣服が乱れた様子はない。なので、結果としては大丈夫なのだろう。

「……はぁ、無防備にもほどがあるわよ」

「俺もそう思うぞ」

声のしたほうに目を向ける。扉が開いていくと黒のハイネックに、ジーパン姿の男性が目に映る。その男性、和夢は皿を二枚持っており、それをベッドの隣の小さな机に置いていく。

床には小さいながらも、カーペットが引かれている。和夢はそこに座ると、澄音を見つめる。

「ほら、早く座れよ。朝ご飯食べるんだろう」

そう指さすと、ガシャンという音とともにトースターからパンが飛び出す。

しかし落ち着いた和夢とは対照的に、澄音はむっとしていく。

「貴方、何のつもりよ！　堂々と高校生を部屋に連れ込んで、恥ずかしいと思わないの！」

「恥ずかしいとは思ってない。でも今だって正直犯罪すれすれだとは思ってる。まあ昨日の夜は互いに頭がおかしかったんだろう。だが家に帰ってきた後のことを考えると、そっちのほうが俺は恥ずかしいがな」

「は、恥ずかしいって。まさか私に何かしたんじゃないでしょうね」

両手で自分の体を包み込むと、じりじりと下がる。

どうにも昨晩のことはよく覚えていない。いや、この家に来たところまでは薄らと覚えている。しかしそれ以降の記憶が全くないのだ。

どうしてこうなったのか。澄音は辺りに目を向けると、大量の空き缶に目が行く。

「ああ、あれか。随分と飲んでたみたいだけど、二日酔いは大丈夫みたいだな」

「二日酔いって、お酒を勧めたってこと」

「確かに勧めたな。というか、正直飲まなくちゃ話せない内容だったからな。でも二杯目以降は自分から進んで飲んでたぞ」

「それでも止めるべきでしょう。私はまだ未成年なのよ」
「何をいまさら。……というか、もしかして昨日のこと何も覚えてないのか？」
「覚えてないって、何のこと言ってるのよ」

もしかして酔っている時に何かされてしまったのか。澄音は布団を掴むと、これ以上体を見られたくないと隠していく。

「そう構えるな。まあ覚えてないなら、逆によかった。随分と派手にぶちまけちまったからな」
「ぶちまけたって何をよ！」
「愚痴に決まってるだろう。それすらも忘れたのか？」

和夢の呆れたような表情を見ると、昨晩の記憶が微かに蘇る。
そうだ。確か電車に乗る前に、彼は一晩愚痴を聞いてもらいたいと言っていた。

「うっ、言われてみればそうだった気がする。そ、それでも普通女の子をいきなり家に入れたりする！？」
「それじゃあ会話の堂々巡りになるぞ。とりあえず済んだことは、どうにもならないだろう。ほら、せっかく朝ご飯を作ったんだから、早く食べろ。俺は先に食べるからな」

和夢はこちらから視線を外すと、パンに噛り付く。正直まだ和夢のことは信用しきれない。だがおいしそうな焦げ目のついたパンと、卵を溶いただけのスクランブルエッグは、昨日から何も食べてない澄音にはごちそうに見えていた。

欲求は頭から体に信号を送ると、彼女のお腹はくぅ～とかわいい音を鳴らす。

「うっ、あっ、これは……」
「お前がいつから飯を食ってないかは知らないがな。これはバイトの報酬なんだから、早く食ってくれ」

ちょいちょいとテーブルを指さされると、目の前の朝ご飯に食欲が刺激される。

「そ、それじゃあ食べるわよ。これがバイト代なら、貰う義務があるからね」
「だから最初からそう言ってるだろう。ほら、箸はこの割り箸を使ってくれ」

対面の位置に割り箸が置かれる。澄音はおずおずとベッドから体を出すと、カーペットの上にひかれた座布団に座っていく。

手の届く距離に食事がある。そうなると澄音の我慢はもう限界であった。
パチンと割り箸を割ると、ニ食ぶりである食事を口に運んで行く。
とにかくいろいろ考えるのは、ご飯を食べた後からだ。心の中で割り切ると、ものすごい勢いで食事を口に運ぶのだった。

一心不乱に食べたからだろう。先に食べ始めた和夢とほぼ同時に食事が終わる。

「コーヒーしかないけど飲むか」
「うん、甘めのやつでお願い」
「じゃあ砂糖をいくつか持ってくから、後は勝手にやってくれ」

彼はよっと立ちあがると、ドアを開け台所へ移動する。

そして一人になると、澄音は改めて部屋に目を向けていく。

「それにしても散らかってるわね。服は散乱してるし、空き缶も出しっぱなし。それに部屋中にくしゃくしゃになってる紙は何なのよ」

男の一人暮らしはこういうものなのだろうか。そう思いながら視線を移動させると、見慣れたバッグが見つかる。

「あっ！　私のバッグ！！」

今までずっと忘れていた、生命線のバッグに近づいていく。

勢いよくジッパーを開くと、そこにある服と財布を見てホッと、胸をなで下ろしていく。

「あー、よかった。これがなくなったら、この先何も出来なくなっちゃうところだった」

だが念には念をと、財布の中身をしっかり確かめる。そこにあるごく少量のお金を見ると、澄音はため息をついていく。

「おい、人を泥棒みたいに扱うのはよしてくれ。俺はお前の荷物には触れてないぞ」

「わかってるわよ。いいでしょう、私が私の財布を見てため息ついたって」

「まあ確かに構わないな。ほら、コーヒー作ってきたから、後は勝手に砂糖を入れてくれ」

ドンと『白砂糖』と書かれた袋が置かれていく。

「ちょっと、スティックタイプとは言わないけど、せめて容器に入

っててもいいんじゃない」
「別に俺自身、この状態に困ってはいなから問題ない」
「……はいはい、私が悪うございました。さすがにスプーンは貸してもらえるわよね」
「それくらいはな。ほら、使え」

銀色のスプーンが渡されると、砂糖の中に思いっきり突っ込んでいく。
そして大さじ二杯ほど入れると、勢いよくかき混ぜていった。

「さすがに入れすぎじゃないか」
「いいのよ、私は甘いほうが好きなんだから」

しかし多く入れた砂糖はなかなか溶けきらない。もうこれ以上は仕方ないと、口に運んでいく。

「あっつい！！」
「そりゃ出来たてだからな。というか、少しは落ち着け」
「知らない男の部屋にいて、そこまで落ち着いてなんていられないのよ！」

全く、この男の余裕がいちいち癪に障ってしょうがない。だがそれと同時に、見ず知らずの自分にここまでしてくれる和夢に、それなりに好感は抱いている。

正直昨日ホームにいても、どこに行っていいのか見当もつかなかった。そして駅員に呼び止められ、家出はたった半日で終わっていたかもしれない。

それでは自分の覚悟や悲しみを父親にわからせることができない。

せいぜい今頃一人娘が家出したことに慌てていればいいのだ。
夢を馬鹿にし、私の大切なものを壊した父親。家出をしてしばらくして付きまとってきた金髪の男。そして駅のホームでやたら親しげに話してくるオヤジども。
正直一日で男性不審になってしまうほど、昨日は大変だった。
しかしそのなかでも目の前の和夢は、優しく対応してくれるほうだと、男性に対する不信感が少し和らいでいく。
「もしかして和夢って今で言う草食系男子ってやつなの？」
「草食も肉食もないだろう。俺はお前にバイトを頼んだ。だからその報酬を払ってる。至極当たり前のことをしてるだけだ」
「えっと、報酬を貰ってなんだけど。私、昨晩のことほとんど覚えてないのよね」
「そのほうがありがたいさ。あんな恥さらしな愚痴、覚えられてるほうが困る」
「そんなに恥ずかしいこと言ったの？」
「俺にとってはな。――さて、そろそろいいか？」
和夢は飲み終わったコップをひょいっと持ち上げると、同じくこちらのコップも手に取っていく。
「えっ？　そろそろいいかってどういうこと？？」
「どういうこともなにも、俺とお前はもう何も関係ない。そろそろ出かけるから、家を出る準備をしてくれ」
「だ、だって報酬は？」
「報酬は一宿一飯だけだろう。約束通り朝ご飯は用意したんだ。家から出ていってくれ」

同情も哀れみもない、無機質な言葉。それが耳に届くと、先ほど回復の兆しを見せていた男性に対する不信感が、一層深みにはまっていく。

正直にいえばイライラは最高潮だ。だがそれでも、（あまり覚えてはいないが）約束は約束なのだろう。なので言葉や行動により直接怒りをぶつけたりはしない。
思いっきり床を踏みつけながら立ちあがると、敵意をむき出しにし、和夢を睨みつける。

「出てってよ！」
「いや、だから出てくのはお前のほう――――」
「昨日ずっと着てて、お酒臭い服じゃ外に出られないって言ってるの！　着替えたらすぐに出て行くから、私の言うとおりにしなさい！！」

ほら、ほら、ほらと和夢の背中を押していく。そして家の外に出すと、力の限りでドアを閉めていく。

「覗いたらただじゃおかないからね！！」

鍵までは閉めないが、ズンズンと部屋の中に戻ると、ドラムバックを開いていく。

「ふん、男なんて、男なんて、男なんて！！」

自分が家出をしたと知っているのだから、もう少し優しくしてくれてもいいじゃないか。
ああいう、自分のことしか考えられない器量の小さい男の家など

こっちから願い下げである。

「ムカつく、ムカつく、あーもー、ほんとムカつく！」

あの大人ぶった口調も、冷めた目も、落ち着き払った態度も、全てが気に入らない。

澄音は着替えを終えると、乱暴に洋服を閉まっていく。そしてドラムバッグを肩にかけ、先ほどと同じようにズンズンと玄関口に向かっていくのだった。

第1章「壊された物と壊せない関係」　ｐａｒｔ１（後書き）

さて、ここまで読んでいただきましたところで、今回の小説の少し説明を。

ここまでくればあれですけど、この小説は和夢の視点と澄音の視点が存在します。

和夢の場合は普通の数字つまり『１・２・３』と進みます。

そして澄音の場合は『／１・／２・／３』と進んでいきます。

視点変更が多いと読者様が混乱しやすいですが、そこは私のチャレンジ精神と言うことで！

それでは～　ノシ

第1章「壊された物と壊せない関係」　Ｐａｒｔ２

2

「それじゃあ、一晩ありがとうございました！　永遠にさようなら！！」

澄音はこちらを睨みつけながら、力強く扉を閉めていく。
どんどんと離れていく背中。しかし声をかけることなく、家の中に入っていった。

「全く、ドアがぶっ壊れるっていうんだよ。だが、不思議な体験ではあったな」

寒空の下、名前も知らない女の子と知り合い、そのまま一夜を過ごしていく。一夜の内容は、ただ愚痴を言っただけだ。
それでも人生において、一番の非日常的光景ではあった。

「でもそういうやっかいなことは現実には必要ない。そんな非日常は、ここの中だけにあればいいんだ。

床に散らばっている紙を拾うと、そこに書かれている文章に目を向けていく。

「俺には時間がないんだ。大学卒業まで約一年。それまでに何が何でも結果を出さなくちゃいけない。人の心配なんてしてる場合じゃないんだ」

持ちっぱなしだったコップを流し台に置く。そして床に散らばっている紙をひとまとめにすると、着替えを始めていった。

大学に行き、二時間目の授業が終わる。今日は少し早めに授業が終わり、十二時ちょうどには教室の外に出る。
この後はどうするか。そう思っていると、ポケットの携帯が震えているのがわかった。

「メールか。ん、国吉からか」

大切な友達の一人、最上国吉（もがみくによし）からのメールに眉をひそめる。

【本文：確かこの時間授業だったよな。冴子のやつもいるから、学食で昨日の話しの続きをしないか？】

時間的にはまだ授業中。気を利かしてメールにしてくれたのだろう。

「よかった。電話じゃなくて」

もし電話だったら、自分は彼の声を聞いた瞬間に不機嫌になっていたかもしれない。
昨日、あれだけ愚痴を聞いてもらったが、やはり全てを発散できはしないのだ。

「まあ断ると怪しまれるし。行くか」

今から行くとメールを送ると、和夢はそのまま学食に向かっていく。

他の授業は終わってないからか。人が少ない学食で、すぐに目的の二人を発見する。

「おーい、和夢。こっち、こっち！」

少し茶色がかった髪の毛と百八十センチ以上の背が特徴の国吉は、自己アピールするかのように盛大に腕を振る。

その隣にいる眼鏡をかけた女性。スカートは穿かない信条らしく、パンツルックの大場冴子は、眼鏡をクイッとあげると対照的に小さく手を振る。

「そんな叫ぶな、恥ずかしい」

「何だよ、和夢が迷子になったらかわいそうだって思ってやってるんだろうが」

「お前みたいな目印、そうそういないから間違えないって」

「だから背のことは言うなって。俺だって伸びたくてここまで伸びたわけじゃないんだぞ」

いつも通りのやり取り。それを見て、冴子は笑みをこぼす。

「本当に、知り合ってから三年経つのに、二人は変わらないわね」

「そりゃ、こんな子供みたいな頭の奴といれば、成長だってしないさ」

「だったら、私は昔からずっと成長してないことになるわね」

彼女がそういうのは、冴子と国吉が幼馴染だからである。見た目はの体育会系の国吉に、見るからに文系の冴子。この二人は、家が

隣同士らしく、幼稚園の頃からずっと一緒らしい。

そして自分も文系であり、授業でグループを作った際に彼女と意気投合。国吉を紹介され、今も大学では一番仲良くしている。

だがそんな二人に対し心の中のイライラは今だって取れることはない。だが一番仲良くしているために、笑顔を崩すことはなかった。

二人は机に置いてある食事を端にどかしていく。

「別に食べながらで構わないぞ」

「さすがに俺たちだけ食べてるのも悪いだろう」

「でも俺はこの後授業がないから、いつでも食べれる。二人はこの後授業だろう」

「まあそうだけどな。それでもさ――」

国吉が遠慮をしようとすると、それを冴子が止める。

「和夢がそう言ってるんだから、食べながらにしよう。食事が冷めるほうが和夢は気にするだろしね」

「そういうこと。冴子のほうが、俺の考えをわかってるみたいだな」

「単純な時間みても、付き合いは長いからね」

「言われてみればそうか。ということで、頼むぞ国吉」

「おう、そういうことなら遠慮はしないぜ」

端に退けた食器を再び手前に戻す。そして国吉はバッグの中に手を入れると、それを空いている和夢のスペースのほうに広げていく。

そこに置かれたのは、色とりどりの薄い旅行冊子。旅行代理店などでもらえる、無料のものである。

「昨日も居酒屋で見せたとおり、北は北海道。南は沖縄。その他フランス、イタリア、台湾、何でもございだぜ！」
「国吉のやつ、選択肢は広いほうがいいって、目についた冊子を全部持ってきたからね」
「だって俺たちの初めての旅行だぜ。来年は卒論やら就職活動やらで忙しくなるだろうし、行けるときにいいところに行っておこうぜ」
「というか、国吉。あんたまだ就活始めてなかったの。今年もまた就職難みたいだから、今から始めるのじゃ遅いくらいだって言うのに。全くお気楽なんだから、ねえ和夢」
「えっ、あっ、そうだな」

名前が呼ばれようやく我に返る。いったい何秒ほどボーっとしていただろうか。卒業前旅行の話や就職活動のことを話している二人の姿。それを見て、少しばかり落ち着きがなくなっていた。

不思議そうにこちらを見る二人。和夢は苦笑いをしていく。

「すまない、ちょっと昨日寝るのが遅くて。少し寝不足気味なんだ」
「まあどっちにしても帰ったのが終電間際だったしな。俺も次の授業は爆睡しそうだぜ」

国吉はふわぁ～とわざとらしく口を押させていく。冴子はそんな彼を肘で小突いていく。

「こら、次の授業は寝てると出席消される授業なんだから、しっかり起きてなさいよ」
「眠りそうになったら頼むな」
「あんたって、もう本当に昔から変わらないんだから」

そんなやり取りをしている二人の姿を見ると、やはり付き合いが長いのだと思い知らされる。
二人はずっと一緒だった。その仲にたまたま自分が入っただけである。
その光景を見て笑みがこぼれていく。でもその笑いが、どういった感情から出たかは、自分でもわからなかった。

「わっ、笑うなよ。ほら、冴子のせいで笑われたぜ」
「あんたがしっかりしてないからでしょう。あー、それよりも早く旅行の話をしましょう。やっぱり私としては遊園地を主軸に決めていきたいわね」

冴子はアトラクションが表紙の小冊子を何冊か取り出してく。

「やっぱり冴子は元気だな。同じ文系でも、俺はどうにもジェットコースターの胃が持ち上がる感覚についていけないんだ」
「大丈夫だって、昇る降るだけがジェットコースターじゃないからね。この遊園地なら回転系もウオーター系も何でもあるわよ」

そう言って冴子はこちらにパンフレットを勧めてくる。だがその上に重なるように、国吉は二つのパンフレットを置く。

「やっぱり旅行と言ったら遠出だぜ。遊園地は日帰りでもいけるけど、北海道や沖縄はそうは行かないからな。せっかく自由な休みなんだからさ、一週間ぐらいのプラン固めてガッチリ行こうぜ！」
「あんた、一週間ってそんなにお金持つの？」
「普通に考えたら足りない。でもレンタカーでも借りて、それで移動しながら寝泊まりってのも面白いかもしれないぞ」
「ちょっと、私が女だってこと忘れてない？」
「おっ、そういえば冴子は女だったか。あんまり胸がないから時々

わからなくなるぜ」
「あんたねー！」
冴子は下敷きになっていたパンフレットを引き抜く。そして国吉のパンフレットに重なるように置き、同時に彼の腕に掌底をくらわす。
「うおおおってええええ！」
痛がる国吉。だがそんな彼に見向きもせず、冴子は自分の選んだパンフレットを勧める。
「ねえ、和夢はどこがいいかしら。やっぱり三人の意見が合致するところがいいと思うのよね」
「かずむうううううう、男なら最果てを目指そうぜ！　て、いってえええええ！」
そこにあるのは今までと変わることがない。いや、知り合ってからずっと積み上げてきた三人の仲が存在する。
共に苦しい思いをし、共に楽しさを分かち合ってきた。だからこそこの絆はできたのだ。
「そうだなー。俺は温泉巡りなんてものいいと思うけどな」
だから心の傷は声には出さない。二人の笑顔を見れば見るほど、声に出したい気持ちはあった。
しかし同時に、二人の笑顔を見れば見るほど、それを壊したくないと何も口にできなくなる。
そんな気持ちのせめぎ合いを今日も続ける。

そして思うのだ。自分は本当にこの二人と仲がいいのだろうかと。
結局は堂々巡りなのだ。仲がいいからこそ。伝えられない想いと言うのは存在するのだから。

第1章「壊された物と壊せない関係」　ｐａｒｔ３

／2

ドラムバッグは重かった。だがそんな身体にかかる負担では、今の澄音は止まることはない。

「全く、本当に男は、男は」

アパートを出てから、澄音はそれしか口にしていない。その怒りは相当なものであり、自分がどこに向かっているかわからないほどだ。

それに気付くと、ピタリと足を止める。

「……はぁ、私はこれからどうしたらいいんだろう」

元より突発的な家出である。行くあてや、目指すべき場所などどこにもなかった。

「……友達も、いないしな」

口に出すと何だか惨めな気分になる。学校に友達と呼べる人はいなく、頼ることも出来ない。だからといって金銭的に余裕があるわけでもない。

ドラムバックからピンク色の財布を取り出すと、その中身を見てため息をつく。

「それにしても寒いな。こんな寒い中で私は何をしてるんだろう」
ヒューッと風が吹くと、その寒さに体が震えていく。このままでは寒さにやられてしまうと思うと、百円玉を取り出すと財布をバッグに戻す。
「何か食べようかな」
目の前にはハンバーガーチェーン店がある。今のこの時代、この百円があれば少なくとも食事をとることはできる。
だがそれは駄目だと百円を握りこんでいく。このまま家出生活を続けるのなら、少なくとも夜はどこかに入らなければならない。
まだ日が高いのにこの気温だ。夜はさらに寒くなるはずなので、とても野宿などできない。
百円をコートのポケットにしまうと、店から目を逸らす。
「あっ、まずいっ！」
視界に映る二人の女子高生。その姿を確認すると、澄音は急いで路地裏に走っていく。
「寒いねー。ちょっと何か食べて帰る？」
「いいかもね。ちょうど新商品のクーポン持ってるから、寄ってこうか」
そう言いながら、ハンバーガーチェーン店に入っていく二人組は、特にこちらには気づいていないようだ。
まさかクラスメイトとばったり会いそうになるとは思わなかった。あの二人が自分のことを認識しているかどうかはもちろん別である

が。

「いいな。友達と学校帰りに寄り道か。そんなこと一度もしたことなかったな」

自分は誰とも関われずにいたから。だからクラスはいつも通り、何一つ変わりなく廻っているのだろう。

もしかしたら家出をしたことくらいは、クラスに伝わってるかもしれない。しかしそうだとしたら余計に惨めだ。

「外海澄音が家出をしたらしい。誰か親しいやつは連絡貰ってないかとか担任が言っちゃって。それでクラスは静まり返っちゃうだろうな。うわ、言ってて涙出そうになってきた」

だがこんなところで悲観的になっていても状況は変わらない。とにかく人の目は避けようと、そのまま裏通りを進んでいくことにした。

「それにしてももう下校が始まってるって。今何時なんだろう」

一度ドラムバックを下ろし中に手を入れていく。

「ん、あれ？　おかしいな。ていうか、うそ……」

いくらバッグの中を見ても携帯が入っていない。だがそれはそうだと落ち着いていく。

「さすがに携帯をバッグに仕舞わないか。普通は服のなかよね」

そう言ってはみるが、ポケットの中に感触がないからバッグの中

を探していたのだ。一度落ち着いてコートをポンポンと叩いていく。
しかしコートにもスカートにも携帯の感触はなかった。

「えっ、それじゃあどこで落としたの。……あっ！」

その瞬間にあの小憎たらしい男の顔が浮かぶ。昨日、駅のホームに着くまでにはあったはずのそれがないということ。
つまり携帯はあの家にあるということだ。

「あの男、こともあろうに私の携帯を盗むなんて！」

収まりかけた怒りが再び込みあがる。全くあの男はどこまで自分を馬鹿にすれば気が済むのだろうか。

「でも、私の携帯を盗んで何かあるのかしら？」

怒りで沸騰しかけた頭が急激にクールダウンする。よく考えれば、一夜限りの関係の彼にメリットはあるとはあまり考えられない。
きっと単純に自分が置き忘れたのか。それとも朝急いで着替えている時に落としたかのどちらかであろう。

だがそうだとわかっていても、イライラは収まらない。何が悲しくて、またあの男と会わなければいけなのか。
男に対しての不信感がストップ高の澄音には、元来た道を戻るのがとにかく憂鬱でしょうがない。

「でもどうせ電話がかかってきても、お父さんくらいだろうし。別になくたって……」

戻るべきか、戻らざるべきか。裏通りでうろうろしていると、ド

ンと誰かにぶつかる。

「あっ、ご、ごめんなさい」

「いってーな。気をつけろ……おい、お前」

金髪の男は、こちら見るとニヤッと頬を緩める。

だが彼とは対照的に澄音の表情からは血の気が引いていた。

澄音は自分を男性不審にした昨日の出来事を思いだす。一つ目は、父親のこと。三つ目は、スケベ顔をした中年に言い寄られたこと。四つ目は小憎たらしい男に会ったことだ。

果たして二つ目は何であっただろうか。その答えは目の前にいた。

「おい、昨日はよくもぶったたいてくれたな！　あの後鼻血が止まらなくて大変だったんだからな！！」

鼻に貼られている大きめのバンソーコーが、嫌に痛々しい。だがあの時はああするしかなかったのだ。

「何よ、あなたが無理矢理手を引っ張るからでしょう」

「へっ、大荷物持ってしょぼくれてるから相手をしてやろうと思ったんだろうが！」

ドンと壁を殴りながら男はがなる。そして一歩、また一歩とこちらに近づいてくる。

「ち、近づかないでよ！」

キッと睨みつける。だがそれとは対照的に、足のすくみだしてしまう。

「近づかなくちゃ、やれることもやれねえだろう。おう、昨日は女だから手えぬいたけど、あれだけやってただで済むと思うなよ」
「いや、こ、来ないでよ！」

迫りくる恐怖に、澄音はドラムバックを投げ付ける。

「お、そう何度もうまくいくと思うなよ」

投げ付けられたバッグを受け止めると、そのまま地面に投げつける。

その瞬間に、澄音は走り出す。

「いや、いやっ！」
「待ちやがれっ！！」

逃げる澄音は裏通りの狭い道を進むと、そのまま広い道に出る。しかし逃げる方向が一つしかなかったとはいえ、それは失敗だった。

表通りとは違い、ほとんど人通りのない平坦な道。これではどこに逃げ込んでもバレてしまう。

一瞬、名も知らない民家の家に飛び込もうかとも思った。だがそこの人に迷惑をかけてしまうこと。そして警察でも呼ばれでもしたら、もちろん父親にもそのことが伝わる。

結局家出をして成したことが親に迷惑をかけることだけだった。そんな未来が頭に浮かぶと、どうしても逃げ込むことは出来なかった。

「おい、止まりやがれ！」

叫ぶ声は先ほどよりも近い。それでも振り返ることなく、懸命に走っていく。
澄音は公園を見つけると、すぐにそこに向かう。舗装された道ではなく、身をくらまそうと木々が生い茂る中をとにかく走る。

途中、枝で擦り傷ができたり、木に肩をぶつけたりしても気にしている余裕などない。
そして木々の中を抜けると、すぐ先に電話ボックスが目に入る。

「でもお財布はドラムバックの――――」

その瞬間。先ほどポケットに閉まった百円を思い出す。だがそれを使って誰に連絡をするのか？
親にも警察にも連絡できない。助けを求められる友達などもいない。
何より、友達がいようともその電話番号を暗記などしていない。

そう、自分が暗記してる携帯番号など一つしかないのだ。

百円玉を手に掴むと、電話ボックスに駆け込む。そして昨日、憎らしくはあったが唯一自分に優しくしてくれた人の顔を思い出していくのだった。

第1章「壊された物と壊せない関係」　ｐａｒｔ４

3

「はぁ、もうこんな時間か」

国吉と冴子が授業に向かい、それに合わせ和夢は帰宅をすることにした。

二人には、三時間目だけ待ってもらって、どこか寄って帰ろうと誘われていた。だが用事があるからと断り、今は一人でハンバーガーを食べている。

「何してるんだろうな。昼飯だって、飲み物だって買ったのに」

チャックを開けると、購買で買ったお弁当とコーヒー飲料の缶が見える。普通に考えれば、この弁当を学食で食べればよかったのだ。

しかしもしかしたら、国吉と冴子の授業が早く終わる可能性もある。それを考えると校内には残っていたくないと、さっさと出てきてしまったのだ。

「本当、いい加減俺も割り切ればいいんだけどな」

深くため息をつくと、包み紙をクシャリと潰す。そろそろ家に帰ろう、そう思うと豪快な笑い声に足を止める。

「あっはっはっは、今日の日本史の授業マジ受けたよね！」

「だっていきなり学生時代の話しし始めるんだもん。ほんとあの先生って面白ことばっかり話すよね」

「もうクラス中大笑いだったしね！」

店内に響き渡る声。その方向に目をやると、そこには二人の女子高生がいる。四人席にフルに使い、胡坐をかきながら会話をする二人。

今時の女子高生は豪快だなと思いつつ、自分も数年前は高校生だったのだと懐かしく思う。

しかしあまりじろじろ見ていては何を言われるかわからない。今度こそ出ていこうと立ちあがろうとする。

「そうだ、クラス中って言えば、今日誰か休んでなかったっけ？」

「いたいた。名前は忘れたけど、家出したって担任が言ってたしね」

家出をした。その言葉を聞いた瞬間に、一人の女の子の顔が浮かぶ。

なぜだろう。その話の続きが気になると、再び席についていく。

「でもあいつが誰かと話してるところって見たことないんだよね」

「なに？　虐められてるの？」

「いや、そんな感じもないんだよね。あっ、でも一年生の時は一時期虐めにあってたみたいだけど、それも一瞬だったみたい」

「虐めっ子に直接文句でも言ったのかな？」

「さあ？　わからないけど、とにかくすぐに虐めは終わったみたい」

「へぇー、でもなんで急にその話になったの。すぐに忘れちゃうくらい、印象薄かったんだけど」

本当に興味がないのか。ソファー側に座っている女子高生は、携帯をいじりながら声を上げる。

すると椅子側の女子高生は、なぜかこちらを指さしていく。

盗み聞きしているのがばれたのか。一瞬ドキリとしてしまうが、どうやら彼女が指さしたのは自分ではないようだ。

「あっちのほうに、裏通りあるじゃん。何かあそこに入ってく、そいつの姿を見た気がするんだよね」

「へぇー、てか家出した割にはそんな遠くにいってないんだね」

「まあそれだけなんだけどね。ちょっと気になったから言ってみただけ」

「どうするの？　担任にでも連絡する？」

「そういうめんどくさいのパス。別にいてもいなくても気にならないんだから、どうでもいいでしょう」

「ははっ、そりゃそうだね」

二人は「あっはっはっは」と笑い声をあげる。そして今までの会話などなかったかのように、最近のドラマについての話を始めた。

ドラマの話しに負ける同級生の家出騒動。だが彼女たちとは対照的に、和夢はその会話に関心を寄せてしまう。

「でもまあ、今更関係なことか」

家出をした理由の具体的内容は聞いていない。だが澄音だってそれなりの覚悟と決心があり家を出たはずだ。

それにクラスメイトがこの辺りにいるのならば、家もそこまで遠くはないのだろう。

今度こそ立ちあがると、ゴミを捨て外に出ていく。

「さて、他人の心配なんかしてないで、俺は俺で頑張らなくちゃな」

何と言っても、自分には卒業までにしなければいけないことがある。それを実現できなければ、あの二人と何も――――。

――チャーララ、チャララララララー。

突然、聞き覚えのない着信音が耳に入る。いや、聞き覚えがないと言うのは嘘だ。この曲は知っている。だがどうしてそれが着信音になっているのかがわからないのだ。

「あの曲って、携帯で取ったっけな？」

もしかしたら、昨日の居酒屋で国吉辺りがイタズラで設定したのだろうか。とりあえずポケットから携帯を取り出す。

「ん、あれ？　鳴ってないぞ??」

携帯は着信音を上げるどころか、全く反応を示していない。しかし依然として鳴り続ける着信音。その音を頼りにバッグを開くと、そこには見慣れないピンク色の携帯が入っている。

「この携帯は。あれ、どっかで見覚えがあるような」

引っかかりを覚えると、考え込む。すると、昨晩愚痴を聞いてもらってた時に、この携帯を見たような気がした。

なら、答えは一つ。澄音が置いていった携帯が、どういう経緯か鞄の中に潜り込んでしまったのだ。

サブディスプレイに表示された文字は【公衆電話】。きっと忘れたことに気づいて、自分からかけているのだろう。

「全く、本当に世話のかかるやつだな。――もしもし」
『お願い助けて！』
「えっ、な、何言ってるんだ？」
『今公園にいて、それで男に追われ――――』

ガシャン。突然強烈な音が耳に届く。

「おい、どうしたんだ。おいっ！」
『おら、逃げられると思うなよ！　開けやがれ！！』

ブツ。最後の男の叫び声が耳に入ると、電話が途切れている。

「――――ッ！」

いきなり電話してきたと思えば、何なんだこの展開は。
だが今の会話を聞いて放っておけるはずがない。和夢は帰宅ルートと逆に目を向けると、裏路地に向かい走っていく。

第1章「壊された物と壊せない関係」　Ｐａｒｔ５

／３

「おら、逃げられると思うなよ！　開けやがれ！！」

扉に手をかけられると、何とか中から抑えていく。だが力の差がありすぎる。これではそう長くは持たない。

「さっさとこっちにこいっていうんだ！」

ガラスを殴りつける金髪。それは振動となりボックスを揺らす。耳を覆いたくなるほどの衝撃音。それでもドアだけは守り続ける。しかし扉が蹴り飛ばされるとそれももう限界であった。

「はっ、面倒掛けさせやがって！」

「やっ、痛い！　離して！！」

髪の毛を掴まれると、電話ボックスの外へと無理矢理引っ張り出される。

「離してよ！　昨日のことなら謝るからお願い！！」

「だったら黙ってついてくればいいんだよ！」

どなり声が耳の中に響き渡ると同時に、左頬に痛みが走る。その瞬間、澄音の頭の中は真っ白になっていく。

「けっ、ギャーギャー騒ぐからだ。おら、早くいくぞ」
「……」
腕をひかれると、それ以上抵抗が出来なくなる。このままいけば酷い目にあるのは分かっている。
だが、それでも目先の暴力が怖かった。また何かを言えば殴られる。そう思うと、それ以上声が上がらなかった。
口の中が切れたのか。鉄の味が広がっていく。どうしてこんなことになったのだろうか。
自分は何も悪いことはしてないのに。それとも家出をしたこと事態がいけないことだったのだろうか。
例え自分の夢を壊されようとも。子供というものはいいなりでなければいけないのだろうか。だったら自分は――――。
「おい、そこの奴。いったい何をしてるんだ！」
塞ぎきっていたその時。聞き覚えのある声が耳に入る。その人とはたった一晩の付き合いだったけれど、なぜだか強く耳にこびり付いていた。
目の前には全力疾走をしてきたのか、息を切らした和夢の姿がある。そんな彼を見て、金髪は澄音を抱き寄せていく。
「あぁ？　俺が自分の女に何をしようが勝手だろうが。何か文句あるのか？」
「お前の女だって？　そいつは昨日俺と一晩を共にしてるが、そんなこと一言も言ってなかったぞ」
「はぁ？　ていうか、こんな冴えない奴といたんなら、どうして俺と付き合わなかったんだよ！」

乱暴に髪の毛を引っ張られると、痛みのあまり声が漏れる。
「痛い、やめて、離して」
「あー、腹立つな。なんたってこんなに馬鹿にされなきゃいけねえんだよ！　もういいや、面倒くせ」
男はポケットに手を突っ込むと、ナイフを取り出していくと、その刃が鈍い光を上げていく。
「おら、怪我したくなかったらさっさと行けよ。それがお前とこの女のためだぜ」
「や、やめて、この、離しなさい！」
和夢が来たことで、失いかけていた抵抗心が蘇る。
「いい加減、黙ってろ。怪我しなくちゃわからねえのか！」
構えられたナイフがスッと首筋に当てられていくと、その冷たい感触に体が動かなくなる。
「さっさと行けよ。たった一晩だけの女のために怪我なんてしたくねえだろう」
「……ああ、そうだな。確かにその通りだ」
もう諦めた。そう言わんばかりの表情になると、和夢は背を向けていく。
それはあまりにも酷い選択でありながらも、当然の行動なのかもしれない。
誰だって自分が一番大事なのだ。だからこそ、今日の朝彼は自分

を追い出していったのだから。

もう抵抗する気も起きない。体の力が一気に抜けていくと、立っていられなくなる。

「おっと、横になるのはもうちっと先だぜ」

腰に手を回されると、無理矢理状態を維持させられる。

だから、男は気付かなかった。だからこそ、澄音は気付いたのだ。

背を向けていたはずの和夢が、勢いよくこちらに振り返っていることに。

第1章「壊された物と壊せない関係」　ｐａｒｔ５（後書き）

ｐａｒｔ４の視点を表示するための数字が／３と表示してますが、３でした。ただいま修正しました。

混乱を招いてしまい申し訳ありませんでした。

第1章「壊された物と壊せない関係」　ｐａｒｔ６

4

ああ、怖い。超怖いよ。

だって相手はナイフを持ってるんだ。あれで刺されたら、痛いどころか死ぬ可能性だってある。

なら普通は逃げるよ。危険に関わるのなんてまっぴらごめんだ。

でも知り合ってしまったんだ。たった一晩だけど。あいつ自身は覚えてないけど。それでも澄音は自分の愚痴を全て受け止めてくれた。

ギブアンドテイクだが、それでもこちらのほうが受けた恩は多い。そう思うなら。彼女に恩を返す時は、今この瞬間なのだ。

ポケットに忍ばせて置いた缶を握ると、それを男に向かい投げ付けていく。

学生時代野球をやっていた何て設定はない。だがそれでも今はこれしかない。相手がナイフを下ろし、こちらに注意を向けてない今しかないのだ。

投げつけられる中身の入ったスチール缶。それは顔を上げた男の顔面にクリーンヒットしていく。

「ぐおおおおおおおおおおお！」

ちょうど絆創膏の貼ってある場所に当たり、激痛に声を上げる。

「おい、早くこい！」

「えっ、あっ――――」

呆けている澄音の手を掴むと、全力で走りだしていく。

金髪が追ってくるか、どうかなど確認している暇もない。がむしゃらに。全力で。脇目も振らず二人は息が上がろうと、止まることなく走り続ける。公園を抜け、路地裏を走り抜け、最後にはどこを走ってるかすらわからなくなった。

「がっ、はっ、はっ、はっ、はっ」

立て続けの全力疾走。肩で息を吸うというのは、きっとこういう状態を言うのだろう。

「だけどもう安心だ。あいつが追ってくる様子はないし、この表通りなら目立ったこともできないしな」

一駅分は走っただろう。自分以上疲れているのか、澄音は未だ会話ができそうにない。

「はぁ、はぁ、はぁ。……ひっく、はぁ、ひっく、ひく」

荒いだけの呼吸が、徐々にしゃくり上げられていく。そして互い

の呼吸が落ち着く頃には、彼女は涙声になっていた。

「うっ、うっ、怖かった。本当に、ひっく、怖かったよ」

体験した恐怖。そしてそれから解放されたことで、溜まっていた涙が一気に零れ落ちていく。

そのまま自分の胸元に顔を寄せると、澄音はそのまま泣き続けた。ギュッと服を握りしめる力は強く。それが強ければ強いほど、彼女の恐怖心が伝わってくるようで、何ともやるせない気持ちになっていく。

「大丈夫、とりあえずもうあいつはいないからさ。なっ、本当にもう大丈夫だから」

「うっ、うっ――――」

どんなにあやそうと、簡単には拭えるものでもない。

和夢は澄音の頭をポンポンと優しく、本当に優しく触っていく。そして彼女が落ち着くまでこのままでいようと、人の目など気にせずその場に立ち続けるのだった。

部屋に戻った和夢はしばらくゆっくりした後、コップの中に牛乳を注いでいた。

澄音は今シャワーを浴びている。さすがに一人暮らしの男の家だ。一度は断られたが、昨晩お風呂に入っていないこと。そして本当に全力で逃げていたのだろう。体中汚れてしまっていたので、シャワ

ーを借りることを承諾してくれた。

「さて、そろそろいいかな」

シャワーの音が止まるのが聞こえると、電子レンジのスイッチを押す。

そして二分ほど。コップ二つの牛乳が温まる頃に、澄音は浴室から出てくるのだった。

「おっ、出てきたか。て、渡した服はどうした？」

「……ううん、いいの」

ドラムバックは金髪から逃げている時に落としたらしく、代わりの着替えは自分物を貸したはずだ。

だが元から異常なほど細身の澄音だ。もしかしたら服のサイズが合わなかったのかもしれない。

しかし当の本人は汚れた服でも気にしていないようで、朝ご飯を食べた位置にペタンと座りこんでいく。

まあ本人がいいのなら、こちらが言ってもしょうがない。コップを二つ持つと、その片方を彼女に渡す。

「……ありがとう」

「別に牛乳一杯くらいで感謝する必要ないぞ」

「それだけじゃない。いや、これももちろんそうだけど。……さっきは助けてくれてありがとう。咄嗟のことで自分の携帯番号しか思い出せなかったから。それにしてもよくあそこに私がいるって分かったわね」

そう言われると、ハンバーガーショップでの女子高生の会話を思

い出す。一瞬、そのおかげだと言おうとしたが、彼女たちが澄音をどう話していたか思い出すと、言うのをやめる。

「たまたまだ。一番近い公園に行ったら、そこにお前がいただけだ」

「それでもありがとう。あと、巻き込んでごめんね」

澄音は弱々しくコップを持つと、昨日のように自身の手を温めながら牛乳を口の中に運ぶ。

どうも今の彼女は、気の強かった朝と比べて別人だ。だがあんなに恐ろしいめにあったのだ。それも仕方ない。もしくは今までの彼女はただ強がっていただけで、これが本当の――――。

そんなことを思いながら、自分も牛乳を飲む。膜ができていたそれにむせそうになる。しかしこの静寂が壊せずに、なんとか我慢していく。

そうやって何の会話も交わすことなく、刻々と時間は過ぎていく。するとコップを空にした澄音は、立ちあがっていく。

「本当にありがとうね。それじゃあ……」

そのまま歩きだす澄音。

「それじゃあって、どこに行くんだよ」

「さあ、私にもわからない」

「もう家に帰ったほうがいいんじゃないか。荷物だって全部なくしちまったんだろう」

「それでも家には帰れないの。今ここで帰っても、きっとお父さんは私の想いを認めてくれないから」

私の想い。それは彼女の言っていた、貫き通したい夢に関係する

のだろう。
　そして自分は、そんな彼女の夢に対する決意や学生生活の様子を知ってしまった。学校には友達がいない。家庭に不満を持っている。そして男にナイフまで向けられ、今は無一文だ。
　和夢は「がああああ！」と叫びながら頭を掻く。これだけ彼女のことを知ってしまい放っておけるほど、和夢は非道な人間ではないのだ。
　そして気がつけば、澄音の手を握りしめていた。
「……何のつもりよ。厄介事には関わりたくないんでしょう」
　確かにそうだ。自分でも何のつもりかわからないのだから、こっちが聞きたいくらいだ。
　それでも、何か理由がないだろうかと辺りに目を向ける。すると、朝にひとまとめにしておいた紙の束が目に映る。
「バイト。――そうだ。お前バイトをしないか」
「バイトって、嫌らしいことはお断りよ。それともまた愚痴でも聞いてほしいの。いいのよ、私のことなんて気にしなくても」
「そんなんじゃない。俺にはな、卒業までに絶対にやり遂げなくちゃいけないことがあるんだ。それに協力してくれるなら、しばらくこの家に居てもいい」
　このバイトは実際に欲しいと思っていたもの。だがそんな提案をすると、澄音は寂しげな表情を見せる。
「ねえ、どうして和夢は私に優しくしてくれるの。私に何かしてあなたにメリットがあるわけじゃないでしょう」

「それはもっともだ。だけどバイトが欲しいって言うのは本当だ。それに、あー、何て言うのか」

この気持ちが理屈ではないからこそ、言葉に出しにくい。それでもぐるぐると思考を回転させると、ポンと手を叩いていく。

「お前がかわいいからだ！　かわいい女の子が一人暮らしの主人公の家に転がり込む。実に物語の王道だと思わないか」

「……へっ？」

その言葉に澄音はキョトンとしてしまう。そして自分でも何を言っているのだろうかと、恥ずかしさのあまり顔が真っ赤になるのが分かる。

だがその時初めて、落ち込みっぱなしだった彼女の顔に笑顔が戻るのだった。

「あっ、あっはっはっは。本当に、何言ってるの。私がかわいいからって、それ、何の理由にもなってないじゃない」

「言うな。俺だって咄嗟に頭に浮かんだだけなんだから」

「それにしても、ふふ、もう少し言いようがあると思うけどね」

笑いすぎてあふれ出てきた涙を拭う。そしてまるで憑き物が落ちたかのように、澄音の表情に光が差し込む。

「でも私がかわいいって言っても、本当に嫌らしいバイトはしないからね」

「そこは問題ない。やってもらうのは、至極まっとうなことだ。まあ簡単ではあるけど、面倒かもしれないがな」

そう言ってベッドの上にある紙の束を、澄音の目の前に見せつけ

ていく。

「俺は今小説家を目指してるんだ。だからそれを読んでもらって感想が欲しい」

澄音は再びキョトンとしてしまう。そして今朝見た散乱した紙は、小説が書かれたものだったのかと、漠然とながら彼女は納得していくのだった。

第1章「壊された物と壊せない関係」　ｐａｒｔ６（後書き）

今日の更新はここまでということで、作者の白翼です。

今回の話は、また創作系かーとなりそうですが、前回のビギナーズクリエイトとは全く違う切り口になる予定です。

前回の更新ではとにかく小説をあげまくっているだけだったので、今回はあとがきを書かせていただきました。

それはなぜか。今日上げたばかりですけど、お気に入り登録や感想をさっそくしてもらい（書いてもらい）ものすごおおおおおおおおおく嬉しかったからです！！

そんな勢いが思わず風呂に入った後の自分を突き動かして、ここまで更新させましたｗ

それでは改めまして、皆さま本当にご愛読のほどありがとうございます！皆様の支援やクリック数を糧に頑張って更新していきたいと思います。

それでは何事もなければまた明日にでも。

ではは〜　ノシ

第2章「肉食系と草食系」　ｐａｒｔ１

／4

夕飯はカップうどんを食べた。和夢が赤いのと緑のとどちらがいいかというので、緑のというとなぜか彼は不思議そうな顔をしていた。

だが自分は緑のサクサクとしたかき揚げが好きなのだ。誰しもが赤いほうが好きだと思ったら、大間違いだ。

その志向もあり、お互いに食べたいほうを選ぶことが出来た。

「ごちそうさまでした」
「ごちそうさま。て、こいうの何だか久しぶりだな」
「どうして？　食事が終わったら普通言うでしょう」
「一人暮らしだと面倒で言わなくなるんだよな。食べる時も食べ終えても黙って終了。自分で用意するか、外食が多いからな」
「そっ、そういえば食事とか、そのお金のことなんだけど……」
「ドラムバックごと盗まれたのを知ってるのに、請求すると思うか。それに、澄音はあくまでバイトとしてこの家に住んでるんだ。金のことは心配するな」
「で、でも。一人暮らしじゃ、お金のほうのやり繰りも大変なんじゃないの」
「ああ、正直先月までは金がカツカツだった。でも必死になって集めた金も、もう使い道がなくなったからな。――というか、本当に

昨日のこと何も覚えてないんだな」
「えっ、あっ……うん。ごめん」

いくら思い出そうとしても、その時のことについては何一つ覚えてない。
和夢の様子を見れば、随分といろいろ愚痴をこぼしたようなのだが、自分は相当疲れていたのだろう。

「ねえ、もしよかったら昨日のこと教えてくれない」
「それは駄目だな。せっかく全部ぶちまけてスッキリしたんだ。また何かない限りは、あまり口にしたくないんだ」
「そ、そうよね」
「まっ、昨日は昨日。今日は今日だ。特に締め切りや規定はつけないけど、小説のほう頼んだぞ」

和夢は目の前の空容器をひょいと取り上げると、代わりに紙の束を渡していく。
ダブルクリップで止められたこれは一体何ページあるのだろうか。ふと気になった澄音は、ペラペラとページをめくっていく。

「あっ、ページ番号が振ってあるんだ。それで最後のページは……すごいわね、百二十ページもあるなんて」
「そうでもないさ。百ページぐらいは、一般的新人賞の文字数規定の中間より下くらいだからな。まあそうは言っても、改行の度合いや一行の文字数で随分と変わるけどな」
「へぇー、それだと何ページあるから読むのがどれくらいかかるかはわからないのね」
「それでもある程度の指針は出来るけどな」
「なるほど、なるほど」

再びページをペラペラとめくると、ざっとながら行間を見ていく。
どうやら和夢の小説は文字を詰めるタイプのようだ。

「でも本当に小説を読むだけでいいの？　もっといろいろ手伝うわよ」
「だから気にするなって。夕飯食べながら話しあったろ。一つ、夕飯のメニューに文句を言わない。二つ、家事は一日交替。三つ、何かあって家に帰れないときは必ず携帯で連絡する」
「四つ、和夢は何があっても私に手を出さないだっけ？」
「ああ、その通りだ。というか、それは何があっても破るわけにいかないからな。だからあまり心配ごとばかり言うな。こっちがいいって言ってるんだから、すぐに謝るのはなしだ」
「ええ、ごめんなさ、とと、わかった」

思わず謝りそうになった口に手を当てる。だが正直四つ目の約束はどうかと澄音は思っていた。
いや、何も手を出してほしいと言ってるわけではない。それでも絶対に自分になど手を出さないという和夢の宣言を聞いたときは、女性としてのプライドは些か傷つけられた。

きっとそういう草食系なところも含めて、中野和夢という人間なのだろう。

「ほら、これ食後のお茶な。ティーパック使ってるから、そっちのに色が付いたらこっちに貸してくれ」
「うん、ありがとう」
そしてこうやって人を優先し、優しい態度を取るのもまた中野和夢という人間なのだ。

それからお茶を三杯ほどおかわりする。その頃には一時間半ほど経っていた。
その間和夢はずっとパソコンに向かっており、自分はひたすら文章と睨めっこしている。

「あー、ここでこうなるのか。初めのほうの説明、なんかいらないと思ってたらそういうことかー」

悔しそうに頭を叩くと、和夢のタイプ音がピタリと止まる。

「読んでくれるのはありがたいんだが、別に声に出さなくてもいいんだぞ」
「それはそうだけど、作者が近くにいるとつい喋りたくなっちゃうじゃない。前半の屋上での伏線回収が、もうやられたーって感じで」
「……そうか」
「あっ、ごめんごめん。和夢が集中してるのに、うるさかったよね」

せっかくバイトをさせてもらってるのに、それで和夢の邪魔をしては申し訳ない。
澄音はしゅんとしてしまう。だが彼女とは違い、和夢は頬を掻くと柔らかい笑みを浮かべる。

「いや、どちらかと言えば読者の声が聞けて嬉しかった。でももう少し静かにな」

ドクン。心臓が力強く跳ね上がる。

「う、うん。うん、うん。も、もう少し静かにするわね」
「ああ、頼むよ」

そう釘刺すと、和夢は再び画面に目を落としていく。
そして視線が外れると同時に、澄音は左手を胸に当てていった。
今の笑顔は反則だ。普段はぼんやりとしているか、人を小馬鹿にしたような表情しかしていないからか、そのギャップもあり何だか変な気分になってしまう。

落ち着いていこうと、澄音は一度大きく深呼吸をしていく。そして胸に当てていた手で、小説の紙を握りこむ。

とにかく今自分がすることはこれを読むことだ。きっと読み始めればすぐに落ち着いてくるだろう。
澄音は活字の世界に目を向けると、先ほどの伏線回収シーンから読み始める。
だが二度目にそのシーンを読むと、先ほどの和夢の顔が浮かび上がってしまい、とりあえず先に進むことにするのだった。

第2章「肉食系と草食系」　ｐａｒｔ2

5

時刻は十一時少し前。
今日はこんなところかと、肩を動かしていくと、ゴリゴリと骨が鳴る。

「あっ、和夢のほうもひと段落ついた感じ？」
「そうだな。それなりには進んだ」
「じゃあさっそくだけど感想喋ってもいいかな？」
「ちょっと待ってくれ。今そっちに行くから」

パソコン机から降りると、カーペットの上に座る。和夢は澄音の対面に座ると、視線を合わしていく。

「それで、俺の小説はどうだった。正直な意見が欲しい」
「うーん、そうね。まず言えることは面白かったわよ。伏線もいろいろ張られてたし、最後のどんでん返しもまさかこうくるかって思ったしね」
「でも駄目なところもあるはずだろ。どちらかというと、そっちを言ってもらえたほうがありがたい」
「駄目なところか。これは最後まで読んだら意見として変わったけど、前半部分の三十ページくらいまでかな。あんまりイベントが続かないで、日常が多かったから正直に言うと少し読むのが辛かった

かな」
「……そうか」
やはりそうだったかと、納得していく。だが澄音は自分が落ち込んでいると勘違いしたのだろう。困ったようにそわそわしていく。
「で、でも私、小説のこと何もわからないし、最後までしっかり読んだらその日常にも意味があったっていうのはもちろんわかってるからね」
「ああ、そう言ってくれるってことは、澄音がしっかり小説を読んでくれたってことだ。感謝してる。あと何か気になったところはなかったか」
「うーん、あとは、えーっと」
「さっきも言ったが正直な意見が欲しいんだ。その顔はまだ何かあるんだろう」
和夢はグイッと顔を寄せると、澄音は少し困ったような顔する。だが和夢の真剣な目を見ると、澄音は視線を外しながら喋り出す。
「そ、そんな近づかないで。ちゃんと話すから」
「あっ、すまない」
元の位置に戻ると、澄音はこほんと咳き込んでいく。
「そうね、正直にいうと文章がちょっと固いような気がする。人物の行動が全部書かれてるから、テンポよく読めないのよね。でも後半になるとバトルものになるから、緊迫感があっていいんだけどね」
「そうかそうか。やっぱりというか、文章が固く感じられたか」
「文章に関してはそれくらいかしら。あと内容的話をすると、あっ、その前に一つ聞きたいことがあるんだけど」

「おう、言ってみてくれ」
「えっと、和夢ってもしかしてオタクだったりする」
とくに遠回しなこともなく、真っ直ぐな意見が向けられる。
「まあオタクと言えばオタクだな。ずっと小説書いてるわけだし、切っ掛けはゲーム作品のノベライズからだったしな。でもそれが何か関係があるのか？」
「あっ、えっと、少し聞き方が変だったかな。もちろん話として、そのことは関係ないんだけど。これを一般的な小説ととっていいのか、ライトノベル方面にとっていいかで少し感想も変わると思ってね」
「そういうことか。俺が書いてるのは大体がライトノベルの賞狙いだ。そっち方面で考えてくれて構わない」
「なるほどねー。うーん、そうなるとやっぱりさっき話したように、話の展開がゆっくりなことと、地の文がちょっと多い気がするのよね。正直初めの数ページなんか字がびっしりだったから、最初はうわって思っちゃったしね」
「初期に設定を固めすぎたか。……そうなると、こっちはどうだろうな」
和夢はカーペットから立ち上がると、再びパソコン机に戻っていく。そして二段目の引き出しから紙の束を取り出すと、それを机に置いていく。
「これは？」
「これもまた俺が書いた小説だ。もちろんこの時間から読んでもらおうとは思ってないけど、次はこの作品を頼む」
「うん、わかった。じゃあちょっと借りるわね」

澄音が手に取った紙の束は先ほどとほぼ同じくらいの厚さをしている。今度は何ページあるのだろうかとめくってみると、そこに書かれている文章に目をひかれる。

「あれ、この文章って？」

「言うよりも読んでもらったほうが早いだろうな。ちょっと初めの一ページだけ読んでみてくれ」

「う、うん、わかった」

そうして澄音はその文章に目を向ける。だが読みながらも彼女は戸惑っているだろう。

それは書いている本人だからこそわかること。その文章は、先ほどの小説とは全く真逆なのだ。

初めの一ページだけといいながら、四ページほど読み終えると紙の束を机に置く。

「えっ、これって本当に和夢が書いたの？　だって、えっ？」

「全然違うだろう。内容から書き方まで、さっきまで読んでた小説と」

「確かにそうね。さっきまでの小説は主人公がハードボイルドだったり、地の文が多かったりしてた。でもこっちは全く逆で主人公がただの学生で、しかもほとんど会話文ばっかりだった。本当に両方とも和夢が書いたの？」

「残念ながらそうなんだ。これが俺の悩みの種でもある」

困ったように手を上げると、澄音は「どうして？」と頭をひねる。

「だって書き分けができることはいいことじゃないの？　正直ここまで違うとは思っていなかったけど」

「いや、今の俺は書き分けが出来てるんじゃなくて、単純に文体が

固まってないだけなんだ。ファンタジーが書きたいのか、ＳＦが書きたいのか、それとも学園モノが書きたいのか。それも一人称にするべきか、三人称にするべきかも定まってない」
「定まってないって。何か書きたいものがあるから小説家になりたいんじゃないの？」

澄音の不思議そうな顔を見ると、ああそうかと頭を掻く。

「どうにも一度愚痴を話したからか、前提をすっ飛ばしがちなるな」
「昨日の愚痴って、それって今の話にも関係してるってことなの？」
「私的にはそうだな。だけど文章に作者のメンタル面は関係ない。結局は賞に選ばれるか、選ばれないかだけだからな」
「で、でもそれって変じゃない。和夢はお金もうけのために、文章を書いてるの？」
「そんなわけないだろう。むしろ金なんて関係なく、書き続けたいって思ってる。いや、思ってたかな」
「言ってることがさっぱりわからない。和夢は小説を書くのが好きで、小説家を目指してるのよね？」
「いや、文章を書くのは好きだ。だけど小説自体はそこまで思い入れがあるわけじゃない」

それだけ言うと、和夢はパンパンと手を叩く。

「とりあえずこの会話はここで終わりだ。文章についてとか、内容については今渡したやつを読んでから改めて聞くことにする」
「う、うーん。わかった……」

昨晩のことを全て忘れている澄音は、消化不良のような顔をする。だが今は愚痴のことは話したくなかったので、強制的にこの話は終わりにした。

それから交代でお風呂に入ると、時刻はもう十二時まで差し迫っていた。

「それじゃあ寝るか」

「あっ、うん。えっと、あの……」

澄音は顔を赤らめながら、もじもじと指の先を合わせていく。

「どうした？　何か言いたいことでもあるのか」

「えっと、その……二人でどうやって寝るの？」

彼女はチラリと部屋に一つしかないベッドに目を向ける。その視線から察すると、和夢は毛布を一枚手に取っていく。

「俺が床で寝るから、澄音がベッドを使ってくれ」

「で、でもここは和夢の部屋なのにそれじゃあ悪いよ」

「何も初めてじゃないから大丈夫だ。昨日だってお前絶対にベッドで寝るんだって聞かなかったじゃないか」

「私そんなこと言ってたの……」

「ああ、そのせいで今日は少し体が硬かったけどな。ほら、気にしてないで早く寝るぞ」

「で、でもそれじゃあ和夢が風邪ひいちゃうよ。今晩は昨日よりも五℃くらい冷えるって言ってたし」

「あのな。年下の女の子を床で寝かせて熟睡できるほど、俺は根性が太くないんだ。わかったら、さっさとベッドを使ってくれ」

明日の授業は一時間目からなので、そろそろ本気で眠りにつきたかった。机を脇に退けると、背丈よりも短いカーペットの上に横になる。

さすがに床に直の部分は冷たい。それでもそのうち慣れるだろう。

「そんなの駄目！　絶対におかしい！！」

そんな自分を寝かせないと、澄音は毛布を奪っていく。

「やっぱりここは和夢の部屋なんだから、和夢がベッドで寝るべきよ」

「それじゃあ堂々巡りだ。さっきも言ったように、客人に床で寝てもらうなんて、俺には出来ないんだ」

「だ、だった。――――だったら、一緒にベッドを使えばいいじゃない！！」

ビシッと指さされながら放たれる言葉。そんな堂々とした澄音を見ると、和夢は目を白黒させていく。

第2章「肉食系と草食系」　ｐａｒｔ3

／5

一体私は何を言ってるんだあぁぁぁぁぁぁぁっ！

とんでもない発言をしてしまった瞬間に、頭の中は大パニックになっていく。

だがここで取り乱してはいけない。少しでも慌てた様子を見せれば和夢のことだ。すぐに無理するなよと、床で寝始めるはずだ。

草食系で、異常なほど人に気を使うのが中野和夢と言う人間だということは、もう知っている。

持っている毛布を一度床に置くと、彼の手を掴んでいく。落ち着け自分。取りみだした様子は見せないで、あくまで冷静な態度で対応するのよ。

「ほら、早く一緒に寝よう！」

和夢のことを無理矢理ベッドの端に追いやっていくと、その上に毛布をかけていく。

て、これじゃあただの肉食系女子じゃないよおぉぉぉぉぉぉっ！

恥ずかしさのあまり、壁に頭をぶつけたくなる。だが今更もう引き返せるはずもない。

「ほら、電気消すわよ。はい、消した。それじゃあお休み！！」

「お、おい。さすがにこれは――――」
「もう私は寝ます。それに四つ目の約束で私には手を出さないんでしょう。だから問題なし。ああ、眠い。すぐにでも眠りそう。あー、もう寝てるから話しかけないでね」

わざとらしく寝息を立てると、聞く耳持たないと行動で表していく。

「……さすがにこんなことになるとは思ってなかったな」

観念したような声が聞こえると、布団が少し動いた気がする。チラリと後ろを見ると、そこには和夢の背中があった。
それだけ確認すると、落ちそうになる体を少し真ん中に寄せる。そして彼の背中に、自分の背中を合わせていった。

和夢の体温が伝わってくる。すると自分の体温が急上昇していくのを感じた。
は、恥ずかしくておかしくなりそう。
今まで恋人どころか、男友達だってあまり出来たことのない自分が、出会って二日目の男の人と、それも年上と一緒のベッドの中にいる。

駄目だ、駄目だ。意識すればするほど目が冴えていく。
早く寝てこの緊張から解放されたいのに、それは当分叶いそうにもなかった。

「――――スゥ、スゥ」
「えっ、和夢？」
「……」

まさかの返事がない。こんなに緊張している自分とは違い、彼はさっさと眠りについてしまったのだ。
一人で勝手に盛り上がって、緊張しているのが段々と恥ずかしくなっていく。
それに和夢は絶対に手を出してくるはずがないのだ。それはさっき言ったように、二人の間で約束をしているから。

それを守りきるのが、中野和夢の紳士なところなのだ。
彼が眠ったおかげで、取り乱していた感情が落ち着いていく。そして和夢の作品を読むために、今日はしっかり寝ておこうと思った。

「それじゃあお休み、和夢」
返事などもちろん返ってこない。だけどしっかりとお休みの挨拶をすると、スッと目を閉じていくのだった。

6

それから三十分。隣には規則正しい寝息を立てている女の子がいる。
だが自分は疲れているにも関わらず、目が冴えきっていた。

「こんな状態で、寝られるわけないだろうが」

ぼそりと小さな声をあげる。ずっと高鳴りっぱなしだった心臓はいくらか落ち着いた。

だが欲求のほうはそうもいかなかった。

そもそも澄音は自分を信用し過ぎなのだ。何をどう考えたら、出会って二日の人間と一緒に寝れると言うのだ。

しかも肉体関係でなく、本当に一緒に寝るだけなのだ。このほうが逆にレアな体験ではないだろうか。

だがベッドの端にいる自分には、澄音を起こさないように起き上がる方法はない。

それに布団もなしに耐えられほど、今年の十一月は生ぬるいものではない。結局現状維持をするしかないのだ。

こちらに背中を向けた澄音は穏やかなものである。この寝顔を見てるだけで済ませとは、拷問もいいところだ。

だからといって手を出す気はもちろんない。ないからこそ思う。明日の一時間目は眠れる授業だったかと思い出していく。

それでも出来るだけ疲労が取れることを祈り、とりあえず目は閉じていくのだった。

第3章「離れた距離と枠の中の人間」　Part1

7

「おい」
「……」
「おいってば、起きろよ」
「……ふあぁ、もう一時間目が終わったのか」

寝ているとあっという間だなと思いながら、もう一度欠伸をする。
一時間目、同じ授業だった国吉は教科書を鞄に仕舞いながらも、滅多に見ることのない和夢の表情を見る。

「それにしても珍しいな。俺が授業中に爆睡してるのはよくあるけど、和夢が授業中寝るってなかなか見ないぞ」
「まあ、正直かなりの寝不足でな。多分次の授業も寝ると思う」
それでも次の教室には移動しなければいけないので、出しただけのノートを鞄に仕舞う。

こうして睡眠不足になっているのはもちろん澄音の存在があったからだ。緊張に緊張を重ねると、全く眠気が来ることなく結局深夜三時まで眠りにつくことができなかった。
それに一時間目の授業の前に、澄音のバッグの行方も探す予定だったので、余計にだ。

しかし朝一で行ったにも関わらず、ドラムバッグは影も形もなかった。もちろん警察にも荷物が届けられてないかと行ってみたが、そういった大きな落し物はなかったらしい。

「澄音のやつ落ち込むだろうな」
「ん、何か言ったか？」
「いや、何でもない。次の授業ももし何かあったら起こしてくれ」
「了解、りょうかいっと」

国吉は軽く敬礼をすると、次の教室へと歩き始める。その後に和夢も続くと、パチンと携帯を開く。
帰っていきなりいうよりも、先に連絡しておくべかな。携帯に本文を打ち込んでいくと、今朝出かける前に聞いた澄音のアドレスにメールを送っていく。

「今のメール誰に送ったんだ？」

国吉はにやにやと楽しそうな笑顔を向けてくると、すぐに携帯を閉じていく。

「別に、大した相手じゃないさ」
「いーや、すぐに携帯を閉まった様子を見ると、女絡みと見た。女に間違いない！」
「どうして急に携帯を閉まったら、女関係になるんだよ」
「そうやって言い訳してるのが余計におかしいぜ。何だよ、最近付き合い悪いと思ったら、そんなことになってたのか」
「勝手にそう思ってろ。どうせメールの相手はニ分の一で男か女に送られるんだからな」

それに最近付き合いが悪いことに澄音は関係ない。関係あるとし

たら、それは――――。
一瞬、本音が出そうになるのをなんとか我慢する。するとポケットの中で携帯が震えていく。
「おっと、返信が来るのが早いな」
「女か！」
「だからしつこいな。……いや、女からだ」
「うおおおおおお、やっぱりいつの間にか彼女作りやがった！」
この裏切り者と国吉は首を掴んでいく。だがそうじゃないと、メールの本文を見せる。
「よく見てみろ。送ってきたのは冴子の奴だ。一括送信みたいだから、お前のところにも来てるんじゃないか」
「へっ？　ちょっと待ってくれ」
そう言って、国吉はポケットに手を入れる。すると出てきた携帯は振動しながらチカチカと光っていた。
「おっ、ほんとだ。なになに、昼休みにまた話をしたいから集まれないかな。だってよ。もちろん大丈夫だよな」
「いや、今日はパスする」
「えっ、何でだよ。やっぱり本当の本当に女が出来たんじゃないだろうな！」
「いい加減離れろ。さっきまでの俺を見てればわかるだろう。今日はどうしよもなく眠いんだよ」
「えー、いいじゃないかよ昼飯の時間ぐらい。それに眠いなら、俺たちの授業が終わるまで寝てたっていいんだぜ」
「それこそ終わるのが四時過ぎになるから、遠慮しておく。冴子にもそう伝えておいてくれ」

それだけいうと、和夢はわざとらしく欠伸をしていく。だが国吉は不服そうな顔をする。

「なあ、ここ最近和夢って付き合い悪くなったよな」

「だから女はいないって言ってるだろう」

本当にしつこいなと思う。しかし声はいつになく真剣なものである。

「まあ女が出来たって言うなら、俺としても納得いく。だけど最近俺たちのこと避けてないか？」

「そんなことないだろう。一昨日だって飲みに行ったし、昨日の昼だって一緒に食べたじゃないか」

「そりゃそうだけどよ。その何て言うか、距離が離れたと言うか、何と言うか」

「変なこと気にするなよ。また俺が眠くなくて頭が回る時に、旅行の話はしようぜ。ほら早くいかないと次の授業遅れるぞ」

前にいた国吉を追い抜くと、早足で次の教室に向かう。その間、和夢は心の中でチッと舌打ちをしていく。

普段はとぼけているけど、こういう時の勘が鋭い。まあ、そうやって気を使えるのが国吉のいいところなんだけどな。

だがその長所も今となっては自身の心をかき乱すだけだ。だが大学生活もあと一年と少し。それも四年生になれば会う機会だって極端に減るのだ。

だからこそ改めて和夢は決心する。三年が終わる間まで、出来るだけ昔通りの自分を演じようと。

第3章「離れた距離と枠の中の人間」　Part2

／6

「……やっぱり最後はハッピーエンドよね」

昨日渡された小説を読み終えると、横になっていく。やはり昨日ぱらっと読んだように、会話文が主だったのでそこまで時間はかからなかった。

「時間は……まあそれでも十一時近くにはなったんだ。でも読めば読むほど傾向が違う小説よね」

先ほどまで読んでいた小説も、昨日読んだ小説も読み終えた後の爽快感はとてもよかった。だがそこにいたる道筋があまりにも違っていたのだ。

片方は地の文が多めの、主人公が過去に多大なトラウマを持ち、なお且つバトルするもの。

もう片方は会話文が主の、主人公が一般人。それで二人のヒロインに囲まれながらラブコメを通して、仲良くなる話しだ。

確かに和夢特有の、文章のくせというものは見えてきた。しかし今となっても、いや、二つの作品を読んだからこそ、浮かぶ疑問は多かった。

「和夢、今日は早く帰ってくるって言ってたけど、まだもう少しかかるかな。そしたらその間に感想でも書いてまとめておこうかな」

何と言っても和夢の小説を読むのは、あくまでバイトなのだ。読み終えて「面白かったよ」というだけでは、さすがに顔向けができない。

朝に渡された紙とシャーペンを握ると、そのまま感想を書きこんでいく。

そんな形で感想を書いていくが、さすがに十二時を超えるとやることがなくなっていく。

「うーん、和夢まだ帰ってこないのかな。て、帰ってこないか。ニ時間目の授業が終わるのが十二時十分って言ってたし」

やることがない。それがわかってしまうと、何となく手持無沙汰になってしまう。

「何か落ち着いたら眠くなってきたな」

しかし渡された小説はしっかりと感想を書いたし、正直和夢が帰ってくるまで寝ていても問題ないはずだ。

だがバイトとして住まわせてもらっているのに、家主が帰ってくるときに寝ているのはどうであろうか。だからといってやっぱりやることはない。

どうしようかと澄音は悶々としていく。

「……あっ、そうだ。確か読んでほしい小説ってたくさんあるって言ってたから、それを読んでればいいか」

やれることは、やれる時にやっておく。そして少しでも和夢の役に立とうと、立ち上がっていく。

「たしかこの小説を取りだしたのって、二段目の引き出しからよね。じゃあそこにまだ他のが入ってるんじゃないかな」

ガラッと引き出しを開けると、一冊の紙の束を見つける。だがそれは昨日読んだ小説であった。

「ここじゃないと、あとは三段目かな？」

自らに確認するように声を上げると、そのまま三段目の引き出しを開けていく。

そこにはやけに分厚い紙の束が入っていた。

「あったあった。でも、さすがにこれは分厚過ぎないかな」

今までの小説がウオーミングアップであったかと思うほどに、分厚い束。クリップも特注のものなのか、見るから無骨なデザインである。

だがここまで大きいのなら、早く読むに越したことはない。澄音は紙の束を掴んでいくと、バラバラにならないように机の上に運ぶ。

「これだけの大きさなら、もう時間が余るなんてことなさそうね。でもこれって、今までの小説三個じゃきかないくらい大きいわね」

改めてその量に圧倒されるが、パシンと頬を叩き気合いを入れ、クリップを外していく。

だが一枚目の白紙をめくった後に描かれているそれを見て、澄音はキョトンとしてしまう。

「何だろう、この絵は？　それも結構上手だし」

紙に書かれている『メインヒロイン1』という文字。そして描かれているのは、ワンピースを着た少女の絵である。

「小説のキャラクターの設定資料かしら？　でもあれだけの文字数をかけて、絵もうまいなんてちょっと不公平な気がする」

パラパラと紙をめくると、何人ものキャラクターの白黒の絵があり、そこには事細かに設定なども書かれている。

そして数人のキャラクター紹介が終わると、次のページの大きな文字に思わず手が止まる。

「俺たちの最高のゲーム制作？　ゲームって、あのゲームよね。でもどうしてゲームなのかしら」

和夢はゲームを作っているなど一度も話していない。だが実際にゲームの企画書とシナリオであろう厚い紙の束は存在している。

チンプンカンプンだと頭を捻る。すると先ほどのでかでかと文字が書かれたページに、見慣れた名前を見る。

「あっ、和夢の名前が書いてる。その下には――――」

「おい、何してるんだ」

「キャッ！」

前触れもなく放たれた声に飛び上がりそうになる。ハッと後ろに

振り返ると、そこには和夢の姿があった。

「も、もう和夢脅かさないでよ。それにしても帰ってくるのが早かったわね」

それじゃあお昼はどうしようか。と言葉を続けるつもりだった。しかし和夢の険しい顔に、声を詰まらせてしまう。

「もう一度聞くぞ。いったい何をしてるのかって言ってるんだ！」

「わ、私はただ他の小説を読もうと思っただけで……」

「それは小説なんかじゃないんだよ！　あの時に言ったよな、俺はそれのせいでずっと苦しんできたって！！」

叫びながら澄音の腕を握りしめる。

「い、痛い！　ご、ごめん。でもいつ注意されたか全然覚えてなくて――――」

本当に悪気はなかった。ずっと優しかった和夢を怒らせるようなことをしてしまったことに、澄音は見るからに落ち込んでいく。

だがそんな彼女を見ると、和夢はハッと負い目を感じたように目を伏せていった。

「す、すまなかった。そうだよな、あの夜のことは何も覚えてないんだったな」

すぐに手を離すと、本当にすまなかったと頭を下げていく。

「う、ううん。私が和夢を怒らせるようなことをしたんだから、悪いのは私よ」

「いや、全部俺が悪いんだ。勘違いしたことも、それがそこにあることだって。それにいきなり暴力に訴えかけるなんて……」

「たしかにさっきの和夢はちょっと怖かったけど。大丈夫だから、私は和夢が優しいって知ってるから。だからね、頭上げてよ」
「……すまない」
どちらが悪いことをしたかわからないほど、落ち込む和夢。だがそんな彼を見ていると、澄音の中にある決心が浮かぶ。
「ねえ、和夢。もし私に悪いことをしたと思ったんなら。その、二日前に私に愚痴ったことを教えて――」
『ピンポーン』
何てタイミングが悪いのだろうか。澄音の言葉をかき消すように、インターフォンが部屋の中に鳴り響く。
『おーい、和夢。旅行の計画立てるぞー』
『突然押し掛けてごめんね。国吉の馬鹿が授業休んでも行くってきかなくて』
扉越しに聞こえる男女の声。きっと和夢の友達なのだろう。
「……何で。どうしてよりにもよっていま来るんだよ」
小さく、本当に小さな声で呟かれる言葉。和夢は顔面が蒼白になると、扉のほうを向く。
「ちょっと待ってくれ。すぐに開けるから！」
それだけ言うと、すぐにこちらに向き直る。

「わ、私はどうしたほうがいいかな。お、押し入れの中にでも隠れたほうがいいのかな」

このまま二人に入られてしまったら、要らぬ誤解を与えてしまう。どうしたものかと澄音はあたふたしてしまうが、和夢の目はこちらには向いていなかった。

彼は机に置かれた厚い紙の束を手に掴むと、それを三段目の引き出しに閉まっていく。

そして自分がいることなど問題ないというように、すぐに玄関を開けていくのだった。

「おっ、やっと開けてくれたか。それじゃあ久しぶりのお宅拝見って、えええぇぇぇぇぇ！」

「うわ、私達もしかしてお邪魔しちゃったかな」

奥にいる自分の姿を見て、それぞれ驚愕の声をあげていく。

そんな二人を前にして、和夢は心底安心したような顔をしていくのだった。

第3章「離れた距離と枠の中の人間」　Ｐａｒｔ２（後書き）

まだ章の途中ですが今日のところはここで終了です！

結構眠いのと、明日が結構朝早そうですので、また隙が出来た時に更新したいと思います。

それでは～　ノシ

8

「つまりはそういうことだ」
「はぁ、つまり要約すると、ここにいる外海ちゃんの行くあてがなく家に泊まらせてるってことか」
「ああ、そうだ」
「なるほどな。て、そんなわけあるかあぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

バンバンと床を叩くと、国吉は頭を抱える。

「そんな嘘つくぐらいなら、ハッキリと彼女だって紹介してくれよ。どこの現実世界に初対面の人間を止めるやつがいるっていうんだ。それもただの善意で」
「ほうっておけなかったんだ。仕方ないだろう」
「そりゃそうかもしれないけどよ。……なあ冴子はどう思うよ？」

ベッドの上に座っている冴子は、顎に手を添えると考えるようなしぐさをする。

「まあ和夢な何だかんだ優しい男だし、ありえないことはないと思うかな。それにしても随分と珍しいなと思ったけどね」
「俺の行動の何が珍しいって言うんだ？」
「いや、和夢って厄介事にはあまり首を突っ込まないほうだと思ってたのよ。それがね……」
「……まあそういう日もあるってことだよ」
「俺は未だに納得できてないけどなー」

だが納得できないのはある意味当たり前のことかもしれない。
何せ自分が話したことは、澄音と二度目に出会ったところからなのだから。
あくまで彼女とは公園で不良に襲われているところを助け、そのまま家に泊っているということになっている。

本当のことなど言えるはずがない。それを説明すると言うことは、一番聞かれてはいけない人物に、二日前の夜のことを知られてしまう可能性があるからだ。

「……」

澄音のほうも特に口を挟むことはなく、説明に相槌だけを打ち続けてくれた。
きっと自分の説明のしかたに何かを感じ取ってくれたのだろう。
いや、先ほどの慌ただしい行動を見せた後なので、単純に声が出なかっただけかもしれない。

「とりあえず俺と澄音のことはもうどうでもいいだろう。で、二人は何をしに来たんだ」
「おお、そうだった。あまりのショックに完全に忘れてた。もちろん話って言うのは、これだよ、これ」

国吉は鞄の中から数冊のパンフレットを見せる。やはり旅行の計画のようだ。
しかし『これ』だと言われて反応できない人物が一人だけいる。それでも思うところがあったのか、澄音はベッドから下りて立ち上がる。

「えっと、もしお邪魔でしたらしばらく外にいってますので」

使い慣れない敬語で話すと、彼女はそのまま歩きだす。

「待て、澄音！」

逃げる彼女の服を全力で握りしめる。その咄嗟の行動と、思わず声を荒げてしまった姿を見て、三人は押し黙ってしまう。

だが逃げ場のない自分の部屋でこの二人とは一緒になりたくなかった。もし三人になってしまえば、自分は心の奥にある気持ちを抑えられないかもしれない。
だからこそ、この場から澄音に離れてもらうわけにはいかなかった。心の中で一度呼吸を落ち着けていく。

「昨日不良に追われたばかりで、次の日に一人で外出する馬鹿がどこにいる。少なくとも何日かは一人で行動するな」

「う、うん。ごめん……」

気を利かせたつもりが、大声で怒られるとは思わなかったのだろう。澄音は落ち込んだ顔をする。
そんな空気をどうにかしようと、国吉はパンと手を叩く。

「そうだ。さすがにこの部屋で四人じゃ狭いし、どっか喫茶店でも行くか。和夢と外海ちゃんはもうお昼食べたのか」
「いや、まだ食べてないな」
そう答えると、澄音もコクコクと頷いていく。
「それじゃあ食べに行こうぜ。この辺の店のことなら、俺たちもよく知ってるしな」
国吉はそう言って立ち上がると、それにならい冴子もベッドから立ち上がる。
「そういうことね。和夢もそれでいいわよね」
「本当は眠りたかったんだけどな。それじゃあ区切りのいいところまでな」
「そういえば帰ったら寝るって言ってたもんな。まあ寝るのなんて夜にも出来るんだから、早くいこうぜ！」
ゴーゴーと先頭を着る国吉。それに続いて、冴子も外に向かっていく。だがそのなかで澄音だけは困ったような顔をしている。
「ねえ和夢、本当に私も行っていいのかな？　もし邪魔だったらお昼は一人でも――――」
「……いいんだ」
先ほどまで握っていた服を離していく。
「外に出る準備が出来たら出てきてくれ。……頼む」
「う、うん」

澄音のほうもさすがに自分のゆるゆるの服で出てくるわけにはいかないだろう。そして澄音の服が渇いているかは正直わからない。

だがどんな格好であろうとついてきて欲しい。それが和夢の正直な気持であった。

／7

何とか服も渇いているということもあり、それから澄音たちは歩いて数分のファミレスへと向かっていった。
メニューを広げると、どうやら澄音を除く三人は食べるものが決まっていたらしく、途端に慌ててしまう。

だが別のメニューにあるランチセットと言う文字を見ると、それを注文することにした。
注文を終えると、対面に座っている和夢と国吉が立ち上がる。

「冴子はメロンソーダだな」
「ええ、それでお願いね」
「澄音は何か飲むものは決まってるか？　もし決まってたら一緒に持ってくるからさ」
「えっ、えっと、ちょっと待って」

まずどこにドリンクバーがあるのかと、辺りを見渡す。すると場所は発見するが、人がたくさんいるために何があるかまではわからなかった。

「そ、それじゃあオレンジジュースをお願い」
「りょうかい。それじゃあ取ってくるな」

二人はそのままドリンクバーに向かう。どうやら飲み物は男性陣が取りに行くのが、三人の習慣のようだ。
しかしついさっき初めてあった人と二人きりというのは、何となく居心地が悪いものである。
どうしたらいいのかと澄音が困っていると、冴子は彼女のほうに振り向く。

「ごめんなさいね。国吉の奴がいろいろ決めちゃって。それに私もその案に乗っちゃったしね。改めて自己紹介するけど、私は大場冴子。よろしくね」
「は、はい。私は外海澄音です。こちらこそよろしくお願いします」

深々と頭を下げると、その瞬間頭の中で何かが引っかかる。この人の名前は今、そして先ほど部屋の中で説明を聞いた時に耳にしただけなのに、なぜか頭の中に残っている。
大場冴子という漢字を頭の中に浮かべる。すると、自分はその名を目にしたことを思い出す。

それは――――。

「ねぇ、外海さん。ちょっと聞いてもいいかしら」

冴子はチラリとドリンクバーのほうを見ると、再びこちらを見る。澄音もつられてそちらを見ると、ドリンクバーのほうは大渋滞のようだ。

「ええ、大丈夫ですけど。何か話せるようなことが私にあるでしょ

うか」
「もしかしたらね。……会って間もなくて悪いんだけど、このタイミングを逃したら、二人っきりっていうのもないかもしれないから」
もう一度、念入りに冴子はドリンクバーの辺りを見ていく。すると緊張をほぐすように深呼吸をしていく。
「和夢は。……貴方が彼の部屋で暮らし始めて、和夢は私達のことを何か言ってなかったかしら」
「言ってなかったって。どういった話でしょうか」
「どういった話でもいいの。ただ何か私達のことを、その、会話に出したかなって……」
少し歯切れが悪く、それでいて曖昧な質問である。
「二人のことは今日初めて聞きましたから特に話は聞いてないですね。それに二人の名前を聞いたのも今日が初めてですし」
「そう、それならいいんだけど……」
冴子は安堵とも落胆とも取れないため息をついていく。だがこれでいいのだと澄音は思う。
あくまで和夢自身から二人のことは何も聞いてはいない。だが二人のことは、出会う直前に名前だけは知っていたのだ。
といっても、それを思い出したのはほんの数十秒前のこと。だが思い出してみれば、大場冴子も最上国吉もあの紙に書かれていた名前であった。
「あ、あの――――」
「ん、何かしら？」

この人ならあの紙の束のことを知っているかもしれない。そう思い声に出そうとしたが、あの時の和夢の剣幕を思い出すと、言葉に出すことは出来なかった。

だがどちらにしても時間切れだ。二人がジュースを持ってこちらに歩いてくる姿を見ると、澄音はそのまま言葉を続ける。

「えっと、大学生活ってどういう感じですかね。何だか急に大人な世界な気がして、想像も出来なくて」

「言うほど、すごいところでもないわよ。確かに教室は広いし、いろんなサークルもあるけど、結局は学生の延長だからね。皆まったりしてるかな」

「女の子トークをしてるかと思ったら、大学のことか。任せろよ、大学の楽しみ方なら俺が教えてあげるぜ」

国吉は冴子に飲み物を渡すと、初対面である澄音に親しげに話しかけていく。

それに遅れて和夢が席に座ると、頼んだ通りオレンジジュースをこちらに置いてくれた。

「あんまりがっつくな国吉。とは思うが、せっかくだからいろいろと話しても面白いかもな」

「おっ、和夢がこういうことに乗り気なのは珍しいな。それじゃあ食事が来るまで高校生と大学生の自由度の違いについて教授するとしますかな」

得意げに話しだす国吉。そんな彼にどういった態度を取っていいのかと、おろおろとする澄音。

「……」

そんな二人の姿を見て、安堵の息を漏らす和夢。

「……」

そしてそんな和夢を見て、今度は落胆の表情をする冴子。

一見したら和気あいあいとしたこの空気は食事が届くまで。そして旅行の話にシフトするまで続いていくのであった。

今日は買い物をしなくちゃいけないから、そろそろ帰るな。

食事をして一時間半ほど経っただろうか。和夢はそう言って席から立っていく。

買い物の予定なんてあったっけ？　と口にしそうになるが、威嚇するような和夢の目にそれは出来なかった。

しかし本当に帰ってよかったのだろうか。ファミレスではほとんど自分と最上さんとが会話をしていただけで、旅行の話と言うのは後半二十分ぐらいしかしていなかった。

だが初対面の自分が何かを言えることはなく、別れの挨拶をすると逃げるような彼の後を追っていった。

きっと周りからは和やかなムードに見えていたはずだ。だが和夢にはどうしよもなく居心地の悪い空間だったのだろう。ファミレスから出た時の、疲れたような顔は未だに頭から離れない。

「ねえ和夢。どこに買いものに行くの？」
「えっ、買い物か。あー、そうだな。買い物しなくちゃな」
心ここにあらず。ため息とともに、魂まで抜けたようである。
しかし買い物をするという申し出は正直ありがたかった。それは今着ている服にも関係している。
「えっとね。もしよかったら、その、買ってほしいものがあるんだけど……」
「何だ。あんまり高いものは買ってやれないぞ」
「えっと、そんなに高いものじゃなくていいんだけど。その、えっとね……」
「ハッキリしないな。何でも買ってやるとは言えないが、それなりに蓄えはあるから大丈夫だぞ」
自分の会話がハッキリしないからか、それともそれ以外に彼をイライラすることがあったのか、口調は少しきつめである。
澄音は辺りをキョロキョロと見ると、大通りに人が多いことを確認する。さすがに天下の往来でそのまま口には出来なかった。
「その、ちょ、ちょっと耳をこっちに持ってきて」
「そんなに高いものなのか？」
「だからそういうことじゃなくて。もう、とにかく早く耳貸して！」
和夢の左肩を両手で押さえつけると、下に落としていくと、そのまま口を耳元に持っていく。
「――――を買ってほしいの」
「聞こえないぞ？」

「だから下着を買って欲しいって言ってるのよ！」
「……はぁっ！？」

一度思考が停止した後に、大声を上げる。すると、辺りの人間はジロジロとこちらに視線を送る。

「か、和夢。声が大きい」
「だって、いきなりそんなこと言われ……スーハァー、ん、んんっ！」

周りに取り繕うように咳き込んでいく。和夢の頬を赤く染める姿は、先ほどの呆然とした顔からは想像できないものである。
しかし恥ずかしいのは何も和夢だけではない。むしろ男の人にお願いしている自分のほうが何倍も恥ずかしかった。

お互いに顔を真っ赤にすると、とりあえず一度落ち着こうと道の端に逸れていく。
まず口を開いたのは、和夢のほうだ。

「い、いきなり脅かすなよ。さすがに心臓に悪いぞ」
「しょ、しょうがないじゃない。本当は家に帰ってきたらすぐに話そうと思ってたんだけど、そのまま喫茶店に行っちゃったし。午前中にバッグが見つからなかったって、メールくれたじゃない。で、少し考えたの。服のほうは家にいるときは和夢の服を借りればいい。それに偶に外に出ても、今みたいに自分の服を着ればいいってね。で、でも、下着だけは一セットしかないし、いくら家の中でもつけないままっていうのは、どうにも……」
「そんなの当たり前だろう！　というか、昨日からずっと同じのつけたのか」
「そ、それは、その。ま、まあそのことはどうでもいいじゃない。

とりあえずもう一セットはないと、さすがに不便で……」
「それはもちろん必要経費だ。ていうか、それくらい言ってくれれば帰りにでも」
「帰りにでも？」

ピタリと止まった言葉に、わざとらしく追い打ちをかけていく。
澄音はにやにやと微笑んでいくと、和夢の顔は再び真っ赤になっていく。

「と、とにかく、服を買うんならスーパーよりも先に服屋のほうに行くか」
「別にどっちが先でもいいよ？」
「食料のほうがかさばるからな。少しインスタント食品も買い足さないといけないし、他にも買うものはあるしな。よし、それじゃあちゃっちゃと行くぞ！」

早足で進むところを見ると、どうやら自分が恥ずかしがっている顔を見られたくないようだ。

「でもよかった。ちょっとは気が紛れたみたいで」

澄音はニヤニヤとしていた顔を、にっこりさせていく。しかし悪戯を思いついたように、ニンマリとした顔をすると、逃がしてなるものかと和夢の後を追っていくのだった。

第3章「離れた距離と枠の中の人間」　Part5

9

全国的有名なファッションセンターは、広い店内の割に差別化があるのか七割は女性もので埋め尽くされている（残り三割のうち布団関係が一割）。

これなら澄音の欲しいものも見つかるだろうと安心すると、彼女は迷いなく一目散に目的の場所に向かう。

しかもなぜか自分の手を引っ張りながらだ。

「お、おい、何で俺が」

「だっていくらの下着買っていいか私にはわからないもの。やっぱり和夢についてきてもらわないと」

ああ、それはそうかと頭の中で納得する。

「て、そんなわけないだろう。いくつか候補選んで、その値段を言ってくれればそれで」

「ねえ、青色とピンク色とどっちがいいかな」

澄音は人差し指で交互にブラジャーを指さしていくと、あまりの恥ずかしさに目を逸らしていく。

「お、おい何考えてるんだよ。そんなの選べるわけないだろうが」
「えー、それじゃあ値段の基準がつけられないじゃない。ほら、早くこっちも見てみてよ」
「お、お前、俺の反応見て楽しみたいだけだろう」
「それはどうかな～」

澄音はからかうような声を出すと、自分の左腕に右腕を絡めてくる。さすがに勘弁してくれと、澄音のほうに目を向ける。

「あれ、やっぱり見る気になったの？」

視線の先には、いつの間に手に取ったのか二つのブラジャーが手に持たれている。

「ほ、ほんとやめろよ」

「何だ。和夢のことずっと草食系だと思ってたけど、やっぱり男の人なんだね～」

その声は誘惑すると言うよりは、こちらを小馬鹿にするような態度だ。

考えろ。考えろ自分。このまま反撃の意図口を掴まなければ、永遠に魔の空間からは抜け出せないんだぞ。

これでもかと言うほど、頭をフル回転させていく。そしてもう一度澄音のほうに振り向くと、羞恥心と戦いながらブラジャーを指さしていく。

「お前は俺が選んだ奴でいいのか！」

「えー、だって買ってもらう立場だしね」
「よ、よ、よく考えてみろよ。俺が選んだ下着を買うってことは、家に居ても常にお前の服の中身がわかるってことなんだぞ。想像してみろ、俺の目の前で服を着てないのと同じじゃないか！」

自分で言った状況を想像してしまうと、恥ずかしさのあまり顔が赤くなる。

「やっ、やだ、何考えてるのよ！」

しかしそれ以上に澄音の顔は真っ赤になっていく。そして絡めていた手を離すと、上目づかいにこちらを見つめる。

「和夢の馬鹿、エッチ！　そんなの恥ずかしくて耐えられるわけないじゃないのよ！！」
「それがわかってもらえれば、ちょ、押すな」
「もう見ないでよ。ほら、選び終わったらその時に呼ぶから！」

グイグイと背中を押されると、澄音はすぐに下着売り場の奥に行ってしまう。しかしナイス頭脳プレイ。見事にあの場所から脱出することができた。

「まぁー、いやねー」
「まったく最近の若い人は」

一人ぼっちになったと同時に、奥様方のひそひそ声が周りから聞こえてくる。
さすがは安価で服を購入できるファッションセンター。そして七割型が女性向けということはある。

「俺は何も悪くない」と心の中で叫び声をあげると、視線に耐えきれず紳士服売り場に走っていくのだった。

「うふふふふ」
「おーい、そんなにはしゃぐな。こっちは荷物持ってるんだからな」
「別にはしゃいだりしてないわよ。それにこっちだって荷物は持ってるんだからね」

ウキウキした様子で、ビニール袋を見せる澄音。彼女が持っているのは、下着一セットが入ったものに、スーパーで安売りを買いだめしたレトルト食品。そしてもう一つは。

「あー、早く明日にならないかなー」
「いや、その服は外出用に買ったんだが」
「いいじゃない、一回着たからって悪くなるわけじゃないんだから」

彼女は袋の中を覗き込むと、鼻歌を口ずさんでいく。
澄音が先ほどから見ているのは、ファッションセンターで一緒に買った洋服である。さすがに服が一着と言うのは大変だろうし、いつずれ落ちてくるズボンをはきっぱなしと言うのも心臓に悪い。

だがそれにもまして、こんなにも澄音が喜んでくれるのは、こちらとしても買ったかいがあったというものだ。

「あっ、そうだ和夢」

少し距離が開いたところで、澄音はこちらに振り返る。

「この洋服、本当にありがとう。私一生の宝物にするね」

えへへへとはにかむ澄音。そんな彼女の笑顔に、数時間前まで荒んでいた心が、段々と癒えていくのが分かる。

だが、それでも胸の中のもやもやを振り払うことは出来ない。それを思うと今日は澄音がいてくれて本当によかった。

「和夢、また何か悩んでるの？」

いつの間にか隣に来た彼女は、心配そうにこちらを見つめる。そんな自分に優しくしてくれる澄音を見ていると、自然と口にしてしまった。

「……ああ、俺はずっと悩み続けるのかもしれないな」

澄音と初めて出会った時の夜。あの時自分は、心の中に溜めていた愚痴を全て吐き出したつもりでいた。

だからこそ、もうこれ以上誰かに、大切な友達の悪口は言わないと決めたつもりだった。

他人の悪口など聞かされても、聞いているほうは気持ちのいいものではない。それはわかっている。わかっているのだけど。

「……和夢、別にいいんだよ」

「な、何がだ」

「そうやって誤魔化さなくてもいいってこと。和夢と一緒に暮らし始めたのは、たった数日だけど。それでも少しは和夢のことはわかってるつもりだよ。今日だってずっと辛そうだった。だから話してくれてもいいんだよ」

ギュッと握られていく手。まるで澄音が激励してくれるようだった。

その瞬間に、理解した。澄音の存在は、もう自分の枠の中にいる人間なのだと。

中野和夢という人間は、他人から言われるように草食系で、人に冷たく当たる。そして自ら危険には近づこうとしない。

しかしそれは枠の外の人間の話だ。和夢は、一度枠の中に招き入れた人間に依存する性質がある。そしてその人を大切にすることを、何よりも優先していく。

だからこそ友達は少なかった。だからこそ親友を作ることができた。だからこそ、その枠を壊したくないからこそ、自分の気持ちをあの二人に打ち明けることができなかったのだ。

ずっとこの思いを声に出来なかった。その言葉を受け止めてくれる枠の中の人間が、誰もいなかったから、それができなかったのだ。

でも今は違う。ここにいる澄音は、自分のことを理解し、そして誤魔化さなくてもいいと言ってくれているのだ。

なら我慢する必要なんてなかった。澄音はもう、自分にとって枠の中の人間なのだから。

握られた手を、和夢はギュッと握り返す。それは迷子になった子供が、親からはぐれないようにしているようでもあった。

「……本当に話してもいいのか」
「うん。それに一度は話してくれたんでしょう。なら、もう一度話したっていいじゃない」
「……」
「心配しなくても大丈夫よ。和夢のことは信頼してるし、信用もしてる。私の優先順位は、和夢のことが一番なんだから」

本当に自然に、自分の欲しい言葉を口にしてくれる。そんなことを言われたら、もう止まらなくなってしまうのに。

「ありがとうな澄音」
「それはこっちのセリフ。正直私も何を言われたか気になってたしね」
「それでもありがとうな」
「……うん、どういたしまして」

握っていた手を一度離すと、その指を澄音の指に絡ませ握りこんでいく。そして今だけは心のもやもやは忘れようと、真っ直ぐに澄音のことだけを見続けていくのだった。

第3章「離れた距離と枠の中の人間」　Ｐａｒｔ５（後書き）

これにて第三章は終了です！
次章はいよいよ和夢の悩みについて語られていきます。

そしてそこから派生して……

そんな形で今日の更新はここまでです！

それではまたー　ノシ

第４章「彼女の今と彼の過去」　ｐａｒｔ１

／８

家に帰り夕飯を食べ、そして二人ともお風呂に入ると机の前に座る。

先にお風呂を済ませている和夢は、すでに定位置に座っており、机には二本の缶が置かれている。

「別にお酒はいいわよ。昨日みたいになっちゃいけないし」

「まあそういうな。あんまり素面のテンションじゃ話したくないことなんだ。それに今日買ってきたのは、昨日飲んだのと違ってアルコール度数三パーセント。ほとんどジュースと変わらないはずだ」

アルコール度数の問題ではなく、高校生がお酒を飲むと言うのはどうなのだろう。と思うが、和夢はあくまでお酒の勢いということで話したいのだろう。

舐めるように飲めば大丈夫だろうと、ピンク色の缶を手に取っていく。

プシュッと蓋を開けると、とりあえず二人とも口をつけていく。自分は本当に一口だけ。だが和夢はなかなか口を離さず、やく半分ほど飲み干していった。

「ふぅ、これでようやく話せそうだ。と言っても、何から話したらいいやら」
「迷ってるなら私から質問していいかな」
「ああ、そっちのほうがやりやすいな」
「それじゃあ、どうして和夢は最上さんと大場さんと話している時に、居心地が悪そうだったの？」
「……その質問は、いきなり根底の問題になっていくな。まあ正直にいえば、あの二人とは本当に仲がいいからかな」

ん？　と澄音は頭を捻る。

「どうして仲がいいと居心地が悪くなるの。普通は居心地がいいものじゃないの」
「いや、そうでもないな。仲がいいからこそ、その輪を壊したくないからこそ、言えないことってのはたくさんあるんだ」

和夢は煽るようにお酒を飲むと、もう中身が空っぽになる。そして床に置いてあったもう一本を開けていく。

「本当は、心の底から言ってやりたいと思う。それでも駄目なんだ。だからこそ、変な気を使ってしまうんだ」

困ったように頭を掻く和夢。彼はしばらく考えると、自信のないような声を出す。

「俺にはさ、夢があったんだよ」
「夢？　それって今やってる小説で賞を取ること？」
「いや、それは現在進行形の夢だ。……俺が本当に夢見ていたものは、もう昔のものなんだ」

再び缶に口をつけると、それを机の上に置く。そして彼はパソコン机の三段目の引き出しを開けると、分厚い紙の束を取り出していく。

それはお昼頃に、澄音が間違って取ってしまったあの紙束である。だがそれを見た瞬間に、やはりそうなのかと変に納得してしまう。

「そのゲーム企画の参加者って。やっぱり今日会った二人のことだったのね」

「ああ、そうだ。澄音がどこまでこの企画書を読んでたか知らなかったが、これなら説明が省けるな」

無骨なクリップを外すと、何枚かの紙をめくる。そして今朝見た『俺たちの最高のゲーム企画』というページを開いていく。

そこに書かれているものは、シナリオ『中野和夢』　イラスト『大場冴子』　スクリプト『最上国吉』という名前である。

和夢はその三人の名前を順に指さしていった。

「ここに書かれている通りなんだ。俺たち三人は大学一年生の頃に、所謂オタク系のサークルに入ってた。だけど、半年も経たないうちにかな。毎日テレビゲームやボードゲームをして楽しく過ごすよりも、せっかく同じ趣味の人間が集まってるんだから、何かやってみようってことになったんだ」

「それが、ゲームを作ること……」

「当時はさ、いざゲームを作ろうと思っても知らないことが多かったし、三人とも手探りで制作をして、それは大変だった。小説みたいに話を書くと、立ち絵で表情が変わる意味がないし、イラストも一人で塗りまでやるから重労働だ。それにスクリプト、分かりやす

くいうとプログラムをやるのももちろん初めてでな。訳が分からないって随分と荒れた時期もあったっけな」

本当に懐かしいと、柔らかい笑みを浮かべ話を続ける。

「初めて作ったゲームも、今見たらそりゃ恥ずかしくなるくらいの出来でな。立ち絵はないし、文章は誤字や脱字がある。それにプログラムと言っても、絵や音楽を出すだけで手いっぱいでな。イベント会場にいっても、ほとんど売れなかったけど。それでも本当に楽しくゲームを作ってたんだ」

「でもゲーム制作をしてたなんて。和夢は今小説を書いてるわけだし、二人ともそんな話し一言も……」

「言うわけないじゃないか。あいつらにそんなこと口にできるわけがない。そして俺だってもうとやかく口を出す気がないんだ」

和夢の表情に影が差し込む。彼は紙の束を握ると、その厚さをこちらに見せる。

「このシナリオさ。いったいどのくらい字数があると思う？」

「えっ、えっと、普通の小説が十万字前後だったから、三十万くらいかな」

「残念、その倍の六十万字。いや、実際にはもっと文字数はあるかな」

紙から手を離すと、和夢はお酒に口をつけていく。だがさらっと言われた言葉に、澄音は驚きを隠せなかった。

「ろ、六十万ってすごいじゃない！」

「そうでもないさ。長編ゲームなら、百万字以上ってゲームは同人でもたくさんあるからな」

「別に他人のことはどうでもいいのよ。私はそういった同人ゲーム事情はわからないけど、いやわからないからこそ、これだけ書けるのはすごいと思うよ」

自分でも喋りながら興奮しているのが分かる。しかし和夢の表情は落ち着いているどころか、落ち込んでいるようにも見えた。

「これだけ書けるのはすごいか。……ああ、俺も当時はそう思ってたな。いや、今でもそう思ってるか。六十万なんて、言葉でいえばそれだけだけど、実際にはすごく頑張ったんだよな。それこそ遊ぶ間も惜しんで、授業中にもコツコツとずっと頑張ってた。この作品は俺の全てだったのかもしれないな」

「知れないって、今はもう違うってこと？」

「そうだな。今俺が目指してるのはシナリオライターじゃなくて、小説家だからな。えっと、そうだな。少し話しはずれるけど、このゲームは知ってるか」

和夢は一段目の引き出しからCDケースを二つ、DVDケースを一つ取り出すと机に並べる。

澄音はそのパッケージを見ると、パンと手を叩いていく。

「知ってる、知ってる。やったことないから内容は知らないけど、それでもこの三つは名前は聞いたことある」

「そりゃそうだよな。この三つは全部同人ゲームで大成功した人たちの作品だからな。で、昔の俺たちもそうなりたいって思ったんだ」

「そうなりたいって？」

「この同人ゲームと同じだ。大学卒業までに最高の同人ゲームを作って、それで有名になって三人でこれからもゲームを作っていこうって、本気で思ってたんだ。同人で成功するなんて、万に一つあるかないかだって言うのに、それでも俺たちは本気になって頑張って

いたんだ。でも……いつの日かそんなことを思ってるのは、自分だけだったって思い知らされたんだ」

和夢は紙の束を手に取ると、最後のページを取り出していく。

「このゲームってさ、三部構成の作品なんだ。同じ村でそれぞれの主人公やヒロインが、他の章のヒロインや主人公と知らず知らず絡んでいる。そして全てを終えると、全部の謎が解けるって言うさ。俺のやりたいことを全部ぶち込んだんだ。だから最後のページまで来たときは、本当に嬉しかった。始まりは果てのないことだったけれど、諦めずにしっかり完結させることが出来たんだって。書き終わった瞬間は、涙すら出てきたよ」

大切に、本当に大切にそのページを握りしめると、再び一番後ろに戻していく。

「でもこれはあくまで始まりだったんだ。俺がシナリオを書き終わらないことには、他の二人が動き出せない。だからようやく俺たちの最高のゲームを作り出す第一歩を踏めたと思ったんだ。それから冴子はキャラクターの案をいくつか出してくれた。国吉も第一章までのスクリプトを組んでくれた。でもいつの頃からだったかな、その話をしてはいけないと暗黙の了解できてしまったんだ」

「暗黙の了解って、何でよ。だって二人とも一生懸命作ってたんでしょう」

「でもそれは初めだけだったんだ。今まで作ってきたゲームとは明らかに量の違う作品に、二人の気力は半分も持たなかった。初めはゲームの進み具合はどうしたとか、締め切りがあったほうがいいとか、いくつか案は出したんだ。だけど二人はまた今度とか、締め切りがあるとプレッシャーになって作業に集中できないとか、真剣に話し合おうとしなかったんだ。だからこそ、俺は二人を信じてジッ

と待つことにした。二人は自分の人生のなかで、一番の友達であり仲間だと信じていたから。でも二人はいい友達であったけど、結果として仲間にはなりきらなかったんだ。俺が黙り始めてからゲームの話しは一切しなくなった。そして気がつけば旅行の話しばっかりになってた」

そこまで落ち着いていた声が、一気に荒くなっていく。

「そんなのあるか！　皆で頑張ろうって言ったから、だから俺は一生懸命シナリオを書いた。それにしっかりとしたゲームパッケージにするようにバイト代もほとんど使わないで貯め続けた。でも結局それの使い道は旅行に変わろうとしている。俺は旅行に行くために金を貯めたんじゃない。皆でゲームを作るために、それだけのために、それだけのために頑張ってきたのに……」

当時を思い出したのか、和夢は震えている手を握りこんでいく。そして二人にぶつけることの出来ない怒りを、机の上に叩きつけていった。

「でも、そしたらもう一度言ってみたらいいんじゃない。もしかしたらまたゲーム制作をしてくれるかも」

「言えるわけないだろう。もうすぐ俺たちは四年生だ。これから卒業論文もあれば就職活動だってある。誰かのために使う時間なんて、もうとっく前になくなったんだよ。……それに俺は怖いんだ」

「怖い？」

「今更ゲームのことを口にして、それで俺たち三人の仲が壊れてしまうのがなによりも怖いんだ。確かにゲームは完成できなかった。でも、親友同士だってことに変わりはないんだ。だから俺はゲームの話をすることなく、友達であることを優先し始めた。だってそうだろう。初めから諦めてるなら、確かにそれは俺の逃げだ。だけど、

何度も、何度も、仲が壊れることを恐れながらも、俺は口にし続けたんだ。それでも駄目だった。辛いんだよ、大切な友達を非難し続けるのが。でも何度心の中で区切りをつけても、どうしてゲームのことを考えると、あいつらのことが憎くてしょうがなかった！」

和夢は企画書を握りしめると下唇を噛む。

「さっきも言ったけど、この作品には俺の全てを注ぎ込んだ。技術も、シナリオを書くことが好きだって想いも全てだ！　だからこそこれが完成すればどんな形でも全てを終わらせられると思ってた。当時の俺はうまくいくことしか考えてなかったが、例え売れなくても全てを出し切ったから仕方ないと思えたはずだったんだ。でも結果としてこの作品はゲームという形にはならなかった。不完全燃焼もいいところだ。俺の数年間はやり場のないものになってしまった」

「だ、だったら、それを小説に直せないの。そうしたら一人の力でも出すことができるじゃない」

「無理なんだよ。このシナリオはゲームにすることを前提に書いたもの。小説では出来なくて、ゲームで出来ることを最大限に生かしたシナリオなんだ。これを小説に直すってことは、本来の持ち味を七割も活かせないことになる」

「ご、ごめんなさい。そうよね、それくらい思いつかないわけないわよね……」

「こっちこそ声を荒げてすまない。でも先に謝っておく。今日は感情を抑えて話すことは多分出来ない」

「それでいいよ。だって、話して欲しいっていったのは私のほうだし。それにそれだけ怒ってるってことは、和夢の想いが強かったって言う証拠だしね」

「……ありがとうな」

和夢はほんの少しクールダウンすると、喋り続けた喉をアルコー

ルで潤していく。
そして落ち着いた声で再び語りだす。
「どうせゲームが完成しないのなら、それならもう二人にゲーム制作の話を振る必要はない。完成もしない、大切な友達の仲も壊れたじゃ、本当に何も残らなくなるからな」
「和夢は。本当に二人のことを大切に思ってるんだね」
「ああ、だからこそ言えないことがたくさんあるんだけどな」
そこでいったん話を区切ると、和夢は四段目の引き出しから紙の束を二つ取り出していく。
「これも含めて計四作。ゲーム制作を諦めてから書いた小説の数だ。もう俺にはこれしかないんだ。二人のように創作の道を諦めようと思ったが、俺は文章に触れ過ぎた。確かにゲーム企画は潰れ、このシナリオは作品にはならなかった。でも、頑張ってこのシナリオを書いたって言う記憶は、どうやったって消すことはできない。だからこの作品の存在が無駄じゃなかったっていうことの証明のために、俺は物書きになろうと思ったんだ。もし俺がプロの物書きになれば、あの時懸命に頑張っていたおかげだっていう証明が出来ると思ったから」
「じゃあ、この前小説はあまり好きじゃないって言ったのは、ゲームのほうが好きだったってことなの」
「その通りだな。音楽や絵があるゲームと違って、小説と言うのはどうして表現の幅が狭くなってしまう。もちろん絵がないからこそ想像力の幅は大きくなるけど、完成の喜びを分かち合うことだけはどうやったって出来ないんだ。でも逆にそれがよかった。もう仲間と、作品が出来ないとかいったいざこざはしたくないから。だから全てが一人の責任である、小説と言う形を俺は選んだんだ」

一呼吸つくと和夢は失笑する。

「小説は好きじゃないけど、小説家を目指すか。ほんと、本気でその道を目指している人が聞いたら、怒られそうな言い分だな。でもこれが今の俺なんだ。そうやって生きていこうと決めたのが、中野和夢と言う人間の人生なんだ。だからこそ俺には時間がないんだ」

「そうか。和夢に残された時間は、大学を卒業するまで。それまでに何らかの形を示さなくちゃいけないってことか。それが、和夢の言う卒業までにしなくちゃいけないってことなのね」

「何一つ間違ってない、全く持ってその通りだ」

和夢は缶を手に取ると、その中身をしばらく飲んでいく。その間に、澄音はいろいろなことを考え、まとめていた。

彼の夢の話し。現実の話し。仲間を思いやること。思いやるからこそ打ち明けることのできないこと。そして……。

澄音は机に置かれたゲーム企画書をジッと見つけていく。そして本当に少しだけお酒を口に入れると、トントンと胸のあたりを叩いていった。

「でもね。こういうのは和夢にとって失礼だと思うけど。それでも私は和夢のことが羨ましいと思うな」

「羨ましい？　今までの俺の話しは聞いてたよな」

「うん、それでも私は羨ましいと思った。多分、ない物ねだりなんだろうけどね」

「……」

和夢の表情は段々と険しくなっていく。でも和夢は自身のことを全て話してくれたから。そしてそんな和夢と話し合うには、自分の

気持ちを正直に話すしかないと思った。
その結果、怒鳴られてもかまわない。一度気持ちを落ち着かせると、和夢の目を真っ直ぐに見詰めていく。

第４章「彼女の今と彼の過去」　ｐａｒｔ２

１０

自分のことが羨ましい。確かに澄音はそう言った。
だがいったいどうしてだ。澄音だからこそ、全てを話すことができた。なのに、彼女はそれを認めてはくれなかった。

手に取るように気持ちがささくれ立つのがわかる。きっと今自分は相当嫌な顔をしているのだろう。だけど、そんな自分を前にしても、澄音は目を逸らすことはなかった。

「私ね、学校に友達がいないんだ。別に虐められてるってわけじゃないんだけど、どうして人の輪に入ることができなくてね」
「……そうなのか」

そう返事をするが、それは前にハンバーガーショップでの会話で聞いていた。
しかしわざわざそれを伝えることもないだろうと、何も言わずにいる。

「だからね。皆で何かをしたことあるっていうのが、本当に羨ましいの。いつも一人だった私には、心の中をイライラさせる友達すら

いないから。それに、どんなきっかけだったとしても、本気で夢を追って。それで小説家になろうっていう、和夢のことも羨ましいと思う」
「どうしてだ。俺が小説家になろうと思ったのは、あくまで怒りや恨みの感情からきてるものだ。そんな、後ろ向きな理由で小説家を目指すなんて、とてもいいとは思えないがな」
「その考えは少し間違ってると思うよ。確かに今は恨みや怒りばっかり考えちゃうかもしれないけど、それでも和夢は文章を書くことが好きなんだよ。それは保証できるよ」
「何でだよ。たった三日間俺と一緒にいただけで、何がわかるっていうんだよ！」

感情のままに叫んでしまうが、後悔はしてない。ほんの少し愚痴を聞いただけで、自分のことが分かるわけないのだから。全てを知ったように、軽々しく口にして欲しくなかった。
だが澄音は怒りも悲しみも見せず、柔らかい笑みをこちらに向けてきた。

「わかるよ。だって私は和夢の小説を読んだんだから。二つの小説は確かに文体も内容も違ってた。だけど、和夢の文章に一生懸命な姿や想いを感じ取ることが出来たよ。本当に文章が嫌いないなら。復讐心で書いてるなら。こんな文章を書けないよ。本当に文章が好きだから、和夢は今でも頑張ってられると思うな」
「俺が、文章が好きだって……」

純粋に、心の底から文章が好きだということ。それは果たしていつの頃まで思っていたことだろうか。少なくともゲームのシナリオを書いている時は、そうだったと思う。
でも小説を書き始めてからは、誰にも文句を言うことなく、誰も信用することなくただひたすらに書き続けていた。

そんな状態を決して楽しいとは思っていなかった。どうして自分は小説を書いているのか。あの二人のようにいい加減に現実を見たほうがいいのではと、そればかり考えていた。
でもそんな疑問を抱えても、それでも自分は書き続けていたのだ。それはどうしてだ。言われた通りじゃないか。

はっ、ははは と渇いた笑い出てくる。

「そうか。そうだよな。俺は、文章を書くことが好きだったんだよな。どうして、こんな単純なことを忘れてたんだろう……」

確かに一番楽しんで書いたのはゲームのシナリオだ。しかしそれだけが楽しかったわけではない。今まで四冊分の小説を書いてきたが、それを書き終えた後はやっぱり嬉しかった。一つの作品が完成するのは、本当に楽しかったんだ。

心のどこかでわかっていたはずだ。だからこそ、澄音が自分の小説の感想を口にした時に、素直に『嬉しかった』と口にしたのだ。

自分は今まで大切なことを忘れていたのかもしれない。今の自分に呆れながら手のひらを額に当てる。澄音は一度酒を口にすると、再び口を開いていく。

「さっきも言ったように、どんな形であれ自分のしたいことが定まってるのは本当に羨ましいと思う。私も、自分のなかではしっかりとした夢を持っているつもりだった。でも、お父さんに機材を壊されて、それでどうしてこんなにうまくいかないんだって、ずっとそればかり思ってたの」
「機材って、澄音は何をしようとしてたんだ」

そう質問すると、澄音「えへへ」と照れ笑いをする。

「私ね。どんな形でもいいから、声のお仕事をしたいって思って、その第一歩として録音機材を部屋に置いてたの。私のうちって父子家庭のせいか、お父さんがちょっときつい人でね。幼いころからあまり外に出してもらえなかったの。あっ、でも虐待とか受けてるわけじゃないからね。そこは勘違いしないでね」

「あ、ああ」

「私ってあまり家から出してもらえなかったから、あんまり人と話す機会がなくてね。でもパソコンだけは家にあったから、そればっかり使ってて。でもある動画投稿サイトに行った時に、画面上で踊ったり歌を歌ったりしている人を見たの。そこで気付いたの。外に出られないことを言い訳にするんじゃなくて、外に出られないなら、内で出来ることを探そうって」

「それが声で何かするってことだったのか」

「その通り。私は楽器とか何もできないし、絵も書けない、それにゲームも持ってないから、それくらいしか表現方法がなかったのよね」

澄音は一度言葉を止めると、クスリと笑う。

「でも本気で声で何かしようって思ったら、本当に奥が深いんだなって思い知らされてね。ただ声を出すだけじゃダメ。みんな、しっかり努力をしてその投稿してるんだなって思い知ったの。録音用の機材は揃えたけど、そこからは練習の毎日。幸いお父さんはほとんど家にいるから、発声練習はし放題だったしね。でも独学だから、ネットに書かれてる発声練習をいろいろ探しまわったっけ。で、ようやく歌ってみたってことで、テストを兼ねて声をアップロードしようとしたの。そしたらタイミングを見計らったかのようにお父さ

んが入ってきてね。そんなことさせるために、物を買い与えてる訳じゃないって、録音機材をその場で壊されて。その次の日、私は家出してきたってわけなの」

「そうか、そんなことがあったのか……」

「うちのお父さん、古風で頭が固くてね。あんまりネットにいいイメージを持ってないのよね。で、ネット上も駄目じゃ私はどうしたらいいのよって怒りで頭がいっぱいになっちゃってね。……でもね、和夢と出会ってから、そして今の話しを聞いて怒ってるだけじゃいけないんだなって思ったの。和夢は悩みを抱えても、それでも自分の好きなことで前に進もうとしている。私みたいに現実逃避することなくね」

「だけど、それは俺にはその道しかないと思ってるから……」

「それだけじゃないって、和夢はもう分かってるんでしょう。就職活動だって、今から始めたって決して間に合わないわけじゃない。それでも文章と一緒に生きていく。どんな形であっても、そう決めたんだよね」

「……ああ、そうだな。確かに道筋としてはあまりいいものではなかったかもしれない。それでも、俺は本当に文章を書くことが好きだから。だから、この道を選んだんだ」

「だから私も頑張ってみようと思うの。ただ夢を夢としてみてるだけじゃなくて、それを叶えるために一生懸命になる。私はまだ声のお仕事について何も知らないし、苦しさもわからない。それでも発声練習をしたり、録音をした時は本当に楽しかったから。だから逃げないで頑張ってみようと思うの」

グッと手を握りこんでいくと、もう片方の手で酒を煽っていく。

「お、おい、そんなに一気に飲むとまたふらふらになるぞ」

「それでも今日話したことは絶対に忘れない。ふふっ、でもこれじゃあどっちが愚痴を話したかわからなくなるわね。私の悩みだったのは、夢を現実として見てなかったこと。そして和夢の悩みは夢を現実としてしか見れなかったこと。何だかうまい具合にガッチリ当てはまったみたいね」

「確かにそうだな。そう考えると、あの夜に俺たち二人が会ったのは、もしかしたら運命だったのかもしれないな」

「あっはっはっは、和夢がロマンチックなこと言ってる」

「あいにく俺は物書きでな。日常では起こらないようなロマンチックなことを書いて、人を楽しませるのが生業なんだ」

「んっ、そして私はその思いを声に乗せて、いろいろな人に伝えるのが仕事。何だ私、自分のしたいことしっかりわかってるじゃない」

澄音は自身に確認すると、その場に横になり笑い転げていく。それを見てすぐにピンとくる。あの兆候は澄音が酔い出した証拠だ。

和夢は机に置いてある缶を手に取ると、残り三分の一ほど入っている中身を飲み干していく。全部飲んでしまえばこれ以上彼女が酔っ払うことはない。

いや、そんなことをしなくてもきっと彼女は忘れないだろう。あの夜の日とは違う。自分だけでなく、今日は澄音自身も本音で話し決心することができたのだから。

「もおぉぉぉおおぉ！　何勝手に飲んでるのよ。そ、それに今の関節キスじゃないのよ」

バンバンと背中を叩いていく澄音。酒に酔っているからか、その頬には薄らと赤色に染まっている。

そんなすでに出来上がってしまった澄音を見ながら、和夢は自分

の缶を手に取っていく。

そしてあの晩とは違い、今日は自分もとことん酔っ払ってしまおうと中に入っている酒を一気に飲み干していくのだった。

第5章「伝えた本音と言えない事情」　Part1

／9

私は何をしてるのだろうか。
何だかちょっと前にもこんなことを思った気がする。でも今回はあまりにもレベルが違い過ぎていた。

「おかしい、明らかにおかしい」

昨日の会話はしっかりと覚えている。しかしどうして自分がベッドの中にいるかは覚えてない。

「……スゥスゥ」

隣には規則正しい寝息を立てる和夢。だがこれも考えようによっては同じことだ。一昨日一緒に寝ようと誘ったのは自分のほうなのだから。
しかしそれでも今の状況はわからない。どうして抱き枕よろしくに自分は和夢に抱きついているのだろうか。

額からだらだらと汗が流れていく。今年は秋がないと言われるほど寒かったのに、布団のなかは暑苦しいくらいだ。

叫ぶ、叫ぶべきなのか？　ここで「キャアァァァァァァッ」と黄色い悲鳴を上げれば、それで全てお流れになるのではないか？
しかしその可能性も五分五分である。何と言っても昨日の会話後

の記憶が曖昧なのだ。こちらが全面的に悪い可能性もある。

「ん、んん？」

ガッチリと体が固定されているからか、寝苦しそうにしている和夢。そしてその顔が真っ直ぐこちらに向けられる。

「ひっ、ひやあああぁあああぁぁぁ！？」

その顔が、その唇が、それこそくっついてしまいそうな距離になると、素っ頓狂な声をあげてしまう。

「ちょっと、和夢。起きて、さすがにそれはまずいって」

「……」

しかし依然として逆方向に向き直ろうとはしない。いったいどうしたらいいんだと気が動転する澄音。

すると和夢の瞼はゆっくりと上がっていく。

「……お、おはよう」

「……おはよう」

何とも言えない沈黙が流れる。だが和夢は自分よりも慌てていないようで、首に絡みついている手を一本ずつ外していく。

そこまでされてようやく自分から手を離せばよかったのだと気付かされる。しかしこの余裕、これが大学生というものなのだろうか。

「……ねえ、こんなふうに言うのは変かもしれないけど、もう少し取り乱してくれてもいいんじゃない？」

前回一緒に寝たときもそうだが、どうにも和夢は草食系でありすぎる。いや、それとも自分のことなど女の子として見れないのだろうか。

そう結論付けると、何だかいらっとしてくる。しかしそれが顔に出ていたのか、和夢は困ったように頭を掻いていく。

「取り乱すも何もさ。お前昨日のこと覚えてるよな」

「き、昨日のこと？　えっと確か和夢の話を聞いて、私のことを話したわよね」

「……その後だよ、その後」

その後と言われても、全く記憶にない。むしろそこで会話は終了したものとばかり思っていた。

ということは、この状況も全て自分が引き起こしたことなのだろうか。何も思い出せないことに、冷や汗が流れる。

「なあ、昨日俺に何をしたか聞きたいか。……きっと後悔することになるだろうけどな」

「う、ううん。やめておきます」

「懸命だな。それじゃとりあえず布団から出てくれ、はじっこにいたんじゃ出られないからな」

「うん、わかった……」

一体自分は何をしてしまったのか。悟りを開いたような和夢の表情を見ると、なにも聞けず。すごすごとベッドから降りていくのだった。

11

死ぬ。いや、むしろ死なせてくれ。これは何の拷問だ？　我慢大会会場か？

澄音がベッドから出ていくと、和夢はしばらく毛布にくるまっていく。

今は出られてない。出たら何かが終わる。

いや、それでもすごいよ自分。普通耐えられないって、聖人君子でも発狂するシチュエーションだって。

正直昨日は何度むらむらしてきたかわからない。分からないからこそ、そのたびに澄音の酒を飲ませた。飲んでいる間は、彼女はいたって静かなのだ。

しかしそれが一時の回避にしか過ぎないことはよくわかっている。むしろ酔えば酔うほど、こいつは絡み酒になるのだ。

「ほら、和夢。早く朝ご飯食べよう」

「今日は澄音の番だろう。用意は任せたぞ」

「それはわかってるけど、人に朝ごはんの用意させて、二度寝する気じゃないでしょうね。ほら、早く布団から出なさいよ」

ぐいぐいと布団を引っ張っていく澄音。だがそうはさせないと、抑えつけていく。

「いや、いやいやいやいや、二度寝はしないからさ。ほら、早く朝

ごはんの準備頼むよ」
「むぅー、私だって寒いんだからね」
それはそうだと彼女の姿を見て思う。いつもなら下にジャージのズボンをはいている彼女が、今は自分が間違えて購入したＸＬサイズのパーカーを着ているだけなのだから。
自然と生足に目が行く。やはり女子高生という、若さだろうか。今の自分には、こんな薄着考えられなかった。
いや、そうじゃないだろう。とりあえず落ち着け。邪な気持ちは全て捨てていくんだ。
しばらくの間、最近習った漢詩についてひたすらに思い出していく。それからいろんな意味で落ち着いたのは、結局澄音が朝ごはんの用意を終えた頃であった。

第5章「伝えた本音と言えない事情」　Part2

／10

朝ご飯を食べ終えると、今日は二時間目から授業らしく和夢は学校へ向かっていった。

しかし家出中の澄音はもちろん学校に向かうことなく、出かけ際に渡された二つの小説を見比べている。

「量としてはどっちも同じくらいか。じゃあこっちから読んでいこうかな」

特に考えなしに、厚めの小説に手を伸ばす。そして数ページ読むと、その世界観が頭に叩き込まれる。

「現代ファンタジー、学園物、で次は純粋なファンタジー小説か。ほんといろんなものを書くのね」

でもそうなると余計にわからなくなる。和夢は本当はどういった小説を一番書きたがっているのだろうか。

確かにいろいろな種類を書けることは強みかもしれない。だけど、これではあまりにもジャンルがバラバラ過ぎな気がする。

「でもそうだとしても、和夢は文章が書くことが好きだってことには変わらない。それは昨日話してよくわかってる。でもこれらの小説を全部百パーセント楽しんで書いてるっていったら、そうとは言えないんだろうな」

百パーセント楽しんでいれば、まず恨みや憎しみで小説を書くと言う考えにいたらないだろう。

だが逆に言ってしまえば、それが趣味を仕事にするということなのだ。

「私はただ声を出して、人の歌っている歌を真似てそれで満足してるだけ。だから単純に大好きでいられるんだろうな……」

外面的に和夢の気持ちがわかっても、内面を百パーセント理解することはやはり出来ない。

ふと、自分の視線が三段目の引き出しに向かっていることに気づく。あのなかには、和夢の好きと言う気持ちを百パーセント詰め込んだ作品が入っている。

もしかしたら、あのシナリオを読めば和夢の気持ちがわかるかもしれない。カーペットから立ち上がると、そのまま机の前に向かう。

「……でも、それじゃ駄目よ」

昨日と違い、今日の帰りは五時過ぎになるとは言われている。だからここで昨日みたいに引き出しを開けても、見つかることはないはずだ。

それでも開けることが出来ないのは、それが自分と和夢の約束したことではないからだ。
和夢の気持ちを知りたいと言うのは、あくまで自分の感情。しかし和夢に頼まれたのは、投稿用の小説を読むことなのだ。

投稿用の小説の残りは、ここにある二冊分。まずは約束をしっかり守ろうと、座りこむと再びファンタジー小説に目をやる。

――――チャーララ、ラララララーララー。

その瞬間、携帯の着信音に集中力が消されていく。

「もう、タイミング悪いんだから」

口では文句を言いながらも、浮き浮きと携帯を開いていく。もしかしたら、和夢が早く帰ってこられるという連絡だと思ったからだ。
だがその送り主の名前を見ると、澄音の笑顔は凍りついていく。

「……はっ、はは。今更何だっていうの。お父さんは」

父親から送られてきたメール。その文面を見ると、渇いた笑いしか出てこない。

「何が、最近寝るのが早いよ。出かけるのが早いよ。今日で四日目だっていうのに、娘が家出したことにも気づいてないの！」

やりきれない思いとともに、携帯を壁に投げつけていく。ガンッと音を立てベッドの上に落ちる携帯。
あんな人のことなど気にする必要すらない。せいぜい私が夜遊び

をしている程度に思っていればいいのだ。

そうして再び小説に視線を落とす。だがその集中力は三分も持たない。

ベッドまで移動すると、そろそろと手を伸ばす。そしてディスプレイに少し傷の入った携帯を覗き込んでいく。

「私がお父さんのことを気にする必要はない。でも、お父さんには私のことで心配させてやる！」

勢いに任せて、メールの本文を作成していく。

「私はいま家出中よ。でもいい人の家に住まわしてもらってるから、今まで通り心配なんてしなくて大丈夫よ。と、あとは……」

最後に一文つけ足していくと、メールを送信していく。

「ふん、せいぜいおろおろしてればいいのよ」

ぽいと携帯をベッドに投げ捨てる。しかしすぐに着信メロディーが鳴り響く。

まさかもう返信が返ってきたのか。こんなにメールを打ち込むのが早かったかと、少し驚かされる。

だが本文を読むと、愕然としていく。

【本文：了解】

たった一言。心配の言葉も、怒りの言葉も書かれていない簡素なメールを見て、澄音の怒りは最高潮になる。

馬鹿にしていると、再び携帯を投げ付けると、今度こそ和夢の小説に集中していくのだった。

第5章「伝えた本音と言えない事情」　Part3

12

「いよっし、終わったなー」

五時間目の授業が終わると、和夢は体を伸ばしていく。

「さすがにほぼフルに授業があると、爽快感も違うな」

「何言ってるのよこの馬鹿は。五時間中半分の授業は寝てたらしいじゃない」

「いやー、あとでノートを写させてくれる仲間がいるとつい油断するぜ」

あっはっはっはと大笑いする国吉とそれを呆れながら見る冴子。そんな様子を和夢は薄らと笑顔になりながら見つめていく。

「さって、それじゃあそろそろ行くとするかな」

ノートとプリントを鞄にしまい始めると、国吉がこちらを向く。

「そろそろ行くって、また直帰なのか？　たまには俺たちと楽しい語らいをしてもいいんじゃないか。それとも外海ちゃんが夕飯でも作って待ってるって言うのか。それなら俺はここでお前を倒さなければならない」

「まあ澄音が家にいる以上待ってるってことには変わりないな。だ

けど俺もあいつも料理はからっきしでな。いろんな麺類を茹でる毎日だ」
「それでもいいじゃないか。家に帰ったら、ご飯にする、お風呂にする。それともあ・た・し、とかそういうプレイもしてるんだろう」
「するかそんなこと。それにそういうのはあいつのキャラじゃないんだよ」

勉強道具を全てしまうと、バッグを右肩にかけていく。すると今度は冴子が呼びとめていく。

「だけどそろそろ本気で旅行先も決めちゃわないととは思ってるんだけどね」
「あー、もし間に合いそうになかったら二人に任せるよ。もし次の話し合いに間に合うようなら、その時は俺も参加するさ」
「私達に任せるって。ちょっと人任せ過ぎると思うわよ」

少し気を悪くしたように、冴子は口にする。そんな彼女をみて、すまないと片手で謝っていく。

「いや、さっき国吉の言ったように、やっぱり家には澄音もいるしさ。それにあいつだっていつまでもうちにいないとは思うし。なっ、あいつが帰るまであと数日待ってくれよ」
「う、うん。そういうことなら、仕方ないけど」

和夢の軽く明るい様子に、冴子は毒気を抜かれていく。

「本当にごめんな。あっ、でも俺の第一候補は温泉だから、そこはよろしくな」

それじゃあなと手を振っていく和夢。まるで帰宅先になにか大き

な楽しみがあるように、その足取りは軽いものである。
そんな明るい様子の和夢を見た二人は、キョトンと目を合わせていく。

「なあ冴子。何だか和夢のやつ随分とご機嫌じゃなかったか」
「偶然だね。私もそう思ってたところよ」
「あいつってあんなふうに明るいキャラだったか？　ここ最近はずっと冷静だったと言うか、落ち着いてたと言うか」
「そうね。ここ最近は確かにそうだったかもね。私達のこともどこか避けているようだったし」

二人は席から立ち上がることなく、脱力したように座ったまま会話を続ける。

「あのな、正直な話をしていいか」
「止めてもしたいんでしょう。していいわよ」
「じゃあするぞ。今の和夢って、まるでゲーム作りをし始めたときの――――」
「ストップ、それはやめて」
「ここまで言って止めさせるなよ。冴子だって気づいてるんだろう。なんせ和夢のことで言えば、俺よりも付き合いが長いんだからな」
「それは……」

国吉は自分の両指を絡ませると、天井を向いた頭を支えていく。
それとは逆に冴子はどんどんと俯いていった。

「なあ、冴子」
「駄目よ」
「まだ何も言ってないだろ」
「それでも駄目よ」

「駄目駄目言ってたら、本当の意味で俺たち駄目になっちまうぞ。まあ駄目になるほうが、今の状態より楽かもしれないけどな」
「それはどういう意味で言ってるのよ」
「言わなくたってわかるだろう。今の和夢は俺たちのことをただの友達にしか見てない。あんな爽やかに誘いを断られるなら。……まあ怒られたほうがましだ」
「……」
「なあ冴子、あのことを――――」
「ストップ！　それ以上喋らないで。私だってずっと考えてた。だからもう少し待って……」
「……わかったよ」

二人は意気消沈しながら勉強道具を鞄に閉まっていく。そして今日も二人かと、寄り道コースを考えていくのだった。

第5章「伝えた本音と言えない事情」　ｐａｒｔ４（前書き）

どうも、ここのところ仕事があまりにも忙しく、さらに新しく覚えることが多すぎて、更新が滞ってしまいました。

少し喉が痛いですが、何とか体調的に余裕ができましたので、更新を再開したいと思います。

そして前の文章を上げていた時も、すでに忙しい最中だったからか、／を書いてなかったり書いてあったりと、混乱させてすみませんでした。

※この前書きは、二日後に消します。

第5章「伝えた本音と言えない事情」　Ｐａｒｔ４

１３

そんな二人の気持など露知らず。いや、今となっては知ろうともせずに、和夢は真っ直ぐアパートに向かっていた。

今はとにかく小説が書きたかった。それに澄音から感想も聞きたい。

「あいつ、しっかりと紙にまとめて感想くれるから。ほんとありがたいかぎりだな」

今日は五時間目まで授業もあったし、どのくらい読み進めてくれただろうか。そう思いながら、玄関の鍵を開けていく。

「いま帰ったぞー」

自然と声が弾んでしまう。だが澄音の出迎えの声は聞こえない。

「おーい、どっか出かけてるのか？」

そう思うが、出かけるならメールの一通もあっていいものだ。疑問に思いながら部屋に入っていくと、彼女の姿を見て理解していく。

「読んだまま寝ちまったのか。てか、布団もかけないで寝てたら風邪ひくだろうに」

国吉の言っていた新婚さんごっこからは程遠いこの状況が、何とも澄音らしかった。

起こさないようにと布団を肩にかけてやると、机の上に置かれた紙を手に取る。

「おっ、もう一作読んでくれたのか。ん、あれ？」

指を擦っていくと、その後ろにもう一枚紙があることに気づく。何だろうかとそれ見ると、驚きのあまり目が丸くなる。

「これって、ミステリーのほうの感想じゃないか。てことは、今日一日で全部読んでくれたってことか」

だからといって手抜きしたような様子は一切ない。それは一作につき、紙の両面にびっしり書かれた感想を見れば言わずもがなだ。

さらにパソコン机の上にもう一枚の紙があることに気がつくと、それを手に取っていく。

「これは……、和夢の小説まとめ？」

よくわからないタイトル。だが下のほうに視線を向けると、四冊それぞれの小説のいいところと、悪いところが、比較して書かれていた。

キャラクター性の強さ。物語のアップダウン。設定の細かさ。読みやすさなど、澄音なりの意見がびっしりと書かれている。

和夢は最後の一行にある【あくまでこれは、私的意見。和夢が一

番書きたいものを書いたほうがいいよ】という文字を見て、嬉しさのあまり涙が出そうになる。

確かにバイトとして澄音にはこれを読んでもらっている。だが投稿のためと、国吉と冴子のこともあり、感想を貰ったことのない小説をしっかりと読んでもらえるのはやはりありがたいことだ。

「ほんと、新婚さんごっこよりもこっちのほうが全然ありがたいよな」

その紙をパソコン机のほうに移動すると、ジャケットを脱いでいく。そして今日は少し豪勢な食事にしてやろうと、昨日買っておいた三日分の食料に目をつけていった。

第5章「伝えた本音と言えない事情」　Ｐａｒｔ５

／１１

何か、いい匂いがする。でもどうしてそんな匂いがするのだろうか。

今日の夕食当番は、自分の役目だ。だったら寝ているのにいい匂いがするはずがないのだ。

「……はっ、ガス漏れ！？」

お昼にカップラーメンを食べたとき、ガスはしっかり止めていたはずだ。だが絶対ということはないのだ。

これはまずいと起き上がると、すぐに台所に向かっていく。するとその背中を見て、盛大にため息をついていった。

「なっ、なんだ、和夢帰ってたんだ」

「ああ、一時間ぐらい前にはもうついてたかな」

「だったらおこしてくれてよかったのに。それに今日の夕飯作りは私でしょう」

「いいんだよ。澄音は今日充分に働いてくれたんだからな。ほら、見てみろよ。今日は豪勢に鍋料理だぞ」

和夢は蓋を開くと、湯気が出るとともにぐつぐつと煮えた白菜や

しらたき、シイタケや鶏肉などが姿を見せる。

「えっ、そんな豪勢でいいの。昨日買い物したものが、ほとんど入ってるような」

「家主が作ってるんだから心配するな。それにインスタント食品ばかりだと、体調的にもよくないしな。今日は野菜も取って暖も取ることにしたんだ」

「う、うん。それはそうと、随分と機嫌がいいように見えるけど、どうしたの？」

澄音は心底不思議そうな顔をする。しかし和夢は特に答えをいうことなく、顔をほころばしていった。

まあ機嫌がいいなら特に追求することもないだろうと、澄音は彼の隣に立つ。

「今更だけど何か手伝うことないかな」

「そうだな。そしたら取り皿を二つと、箸を頼む。それとポン酢も持っていってくれ」

「うっ、ポン酢ってあの酸っぱいやつのことよね」

「そりゃお酢なんだからすっぱいことに変わりはないけど。でもあれで食べるとうまいんだぞ」

「私はパス。あんなに酸っぱいものつけるくらいなら、お出汁のとれたスープのほうが断然おすすめよ」

「まあそれはそれでおいしんだけどな。でもあんまりスープを飲みすぎるなよ」

和夢は電源の切られている電子ジャーを開けると、その中のご飯を見せていく。

「最後は雑炊にするかならな。て、自分で言っててすごく楽しみに

なってきたな」

本当に何があったかは知らないが、和夢は心の底からご機嫌のようだ。

そんな彼を見て、澄音は頭の中のそろばんを叩いていく。

今の和夢だったら、もしかしたら私のお願いを聞いてくれるかもしれない。いや、例え機嫌が悪くても言わなくちゃいけないんだ。と澄音は心の中で覚悟を決める。

でも断れた時は、きっと場の空気が悪くなる。だからせめて夕飯を食べ終えるまで言わないでおこうと、取り皿と箸を手に取りテーブルへと運んでいくのだった。

14

何だか先ほどから澄音の様子がおかしい。

違和感が確信に変わったのは、夕飯を食べ終えた頃だ。出しの取れた汁にご飯を入れ、煮たったところで卵を入れる。そしてその卵

をむらしているときに、なぜかこちらを何度も見ていた。

「あ、あの和夢。その、えっと、何でもない」

こんな感じに言葉を濁したのは、数えただけでも五回目、いや今のを含めたら六回目である。

正直こちらから聞いたほうがいいのかとも思う。だが言い淀んでいると言うことは、それだけ言いずらいことなのだろう。こちらから無理に聞き出すよりも、考えが頭の中でまとまるのを待つことにした。

食事を終え、鍋のこびりを取るために、中身を水でいっぱいにしていく。これでその後の洗いものが段違いに楽になる。

「あ、あの、あのね。その、ちょ、ちょっと話があるの」

「おっ、今そっち行くから待っててくれ」

ようやく決心がついたようだ。和夢はお茶を入れたコップを二つ持つと、台所から戻っていく。

「ほら、とりあえず食後の一杯だ」

「あ、ありがとう。熱いっ！」

「そりゃ直に持ってば熱いだろうが。ほら、どこにも行かないから落ち着いて話せ」

カーペットの上に座っていくと、澄音は再び口ごもっていく。だが先ほどとは違い、澄音は話す覚悟があるからこそ、呼び止めたのだ。

だからこそ、その言葉の橋渡しをしてやった。

「別に滅多なことじゃ怒らないぞ。さすがに金貸せとか、ブランド物の洋服買ってとか言ったらどん引きするけどな」
「そ、そんなことじゃないの。あっ、でも少しお金がかかるかも」
「……大金なのか」
「ううん、そうじゃないけど。……お金以上もしかしたら和夢の時間を割いちゃうかもしれない」

卒業までに時間がないという自分に、何かをお願いするのが心苦しいのだろう。そこまで言って、再び黙ってしまう。と、思われたが、澄音はグッと手を握りこんでいくと、決心を固めたようだ。

「あっ、あのね。私……オリジナルの歌を歌いたいのっ！」
「……お、おお？」

突然の宣言に、いったいどういうことだと疑念が浮かぶ。だが澄音の言葉はまだ終わっていなかった。

「今日ね、和夢が学校に行ってる間にお父さんからメールが着たの。それでついカッとなって、私がどれだけ自分の夢に本気か必ず証明して見せるって送り返しちゃったのよ」

相当しゃくに障るメールだったのだろう。先ほどまでおどおどしていた態度とは打って変わり、怒りを露わにしている。
そんな姿を見て、和夢は顎に手を添える。そしてそういうことかと頷いていく。

「それでそのための録音機材が欲しいって言うのか。でもさすがにそんなに高いものは買ってやれないぞ」
「えっと、録音機材は別に何でもいいの。ＩＣレコーダーでも、カセットテープでも、それこそパソコンにマイク一本繋げるだけでも

構わない。音質じゃなくて、私の意気込みを伝えたいだけだから」
「まあそれくらいなら構わないがな。マイクだって音質に拘らなければ、そんなしないだろうし。それに期限は短いけどそれっぽい機材は学校のパソコン準備室で借りられた気がしたな」

ＩＣレコーダーはあったかわからない。だが型は相当古いが、デジカメやビデオカメラはあったはずだから、それで動画は取れるはずだ。まあそれこそ音が取りたいのなら、マイクの一本くらい買ってやっても問題ないだろう。

澄音は今日一日自分のために頑張ってくれたのだ。それくらいしても罰は当たらないだろう。

「よし、いいぞ。マイクぐらいなら俺が買ってやるよ」
「い、いいの！？」
「ああ、構わないぞ。それで澄音の満足いく結果を出せるなら、喜んで協力するさ」

澄音の顔に笑顔がこぼれ出す。だが次の瞬間、彼女はさらに申し訳なさそうな顔をしていく。

「え、えっとね。それともう一つお願いがあるの」
「まだ何か機材が欲しいのか？」
「そうじゃなくて。これはさっき話してた、お金じゃなくて、和夢の時間を割いちゃうっていうことになるんだけど」
「とりあえず言ってみろ」

そう促していくと、澄音は大きく深呼吸をしていく。そして再びグッと手を握りこんでいった。

「そのね、わ、私の歌う曲の歌詞を書いて欲しいの」
「そうか、歌詞をねー。……はぁ？」

今彼女は何と言ったのだろうか。

「すまない、もう一度言ってみてくれ」
「だから、親に聞かせるための曲の歌詞を作って欲しいって言ってるの！」

聞き間違いが許されないほどの大音量に、思わず耳をふさぎたくなる。しかし彼女の一大決心をそうないがしろにも出来なかった。

「俺が澄音の歌の歌詞を作るっていうのか……」
「だからそう言ってるでしょう」
「でも歌詞なんてどう作っていいやら見当もつかないぞ」
「えっ、でもゲーム制作の企画書に主題歌っぽい歌詞が挟まってたじゃない」
「ぐおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ、あれの話しはやめてくれ！。ゲーム制作関係なく、あの頃は調子乗ってたっていう、黒歴史だと思ってるんだあぁぁぁぁぁぁっ！！」

それはちょうどシナリオの一章を書きあげた頃。やっぱりゲームには主題歌だよなと、自分のイメージの元テンポやリズムなど気にすることなく、歌詞を書いてしまったのだ。
まだ創作意欲に燃えていた二人でさえ、いきなり持ってきた主題歌に苦笑いをしてしまったのは今となっては赤面ものの思い出である。

「そんなに変だったかな？　私はとってもいい詩だと思ったけど」
「う、うーん。確かに褒められるのは嬉しいんだけど。やっぱり恥

ずかしさのほうが強いな」
「だったら尚のこと歌詞を書いてみてよ。和夢のいう恥ずかしい思い出が払拭されるくらいの、いい歌詞を。ねっ、お願い！　このままじゃ私家に帰れないの！！」

澄音は拝むように両手を合わせると、額が机につくほどに頭を下げていく。
しかし拝まれている当の本人は、どうしたものかと頬を掻いた。

確かに澄音には小説の感想を書いてもらっている。だがその対価として家に住まわせているし、食費も払っている。それに服だって買ってあげた。
そのうえ時間までも取られるのかと、少しばかり憂鬱になっていく。卒業までにあまり時間がない。それにようやく小説を書く面白さを思い出したのだから、今はそちらに集中したかった。

「……でもま、仕方ないか」

物を書く楽しさを思い出したのは、澄音のおかげだ。彼女が愚痴を聞いてくれ、助言をしてくれたからこそ、今現在の自分は存在するのだ。

本当はもっと遠回りになってかもしれない道のりだ。近道できた分、少しの寄り道はしてもいいであろう。

「わかった、わかった。でも歌詞を書くことに関しては、本当に初心者クラスだからな。そんなに期待するなよ」
「えっ、いいの？　本当にいいの！」
「だからやるって言ってるだろう。何度も言わせるな、ておいっ！」

気恥かしくなり視線を逸らそうとする。だが視線の先に回り込んだ澄音は、勢いのまま抱きついてくるのだった。

「ありがと、ほんとありがとうね和夢」
「わ、わかったからそんなにくっ付くな」
「本当に嬉しいんだから、それくらい許しなさいよ！」
「だからどうして嬉しいと抱きついてくるんだあああぁぁああ！」

そんなふうに叫んでは見るが、澄音は決して離れようとはしない。これは無理矢理にでも離さないと、そう思った瞬間、和夢は流れているそれに目が行く。

何で、泣いてるんだ？

こんなに喜んでいるのだから嬉し泣きなのだろうか。確かに夢を馬鹿にしてきた父親に対抗できる手段ができたのは感激することかもしれない。

だが何かがおかしい。おかしいと思いながらも、その答えに辿り着くことは出来なかった。

ただ受け持ったからには中途半端で終わらせるつもりはない。澄音の父親を黙らせるくらいのいい歌詞を書いてやると、覚悟を決めていくのだった。

第６章「空に消えた声と紙に書かれた言葉」ｐａｒｔ１

１４

「あー、どうしたらいいもんか」

自然に声が出てしまうと、急いで口を押さえていく。特に周りの生徒の反感は受けていないようなので、ホッと一息つく。

澄音の歌う曲の歌詞を作ると言って、はや数日。和夢は未だに歌詞作りに頭を悩ませていた。

しかし悩むと言っても、自分にはインを踏んだり、テンポなどを考えて歌詞作りなどできない。いや、できるだけ意識したほうがいいのだろうけど、特に今は気にしなかった。

ここ数日でノートに書いた歌詞は数知れず。しかしそのどれもがピンとこなかった。

これも駄目だと、次のページをめくる。すると授業終了のチャイムが校内に鳴り響いた。

先生が今日はここまでと教室を出ると、生徒はざわめきだしていく。だが和夢だけは、爽快な気分になれなかった。

「おーい、和夢。どうした、困ったような顔してるぜ」

相変わらず能天気な国吉がドンと背中を叩いてくる。その瞬間、頭の中で浮かべていた歌詞がぽろっと落ちていった気がした。

「おい、いきなり何するんだよ！」

「えっ、……わ、悪りぃ」

国吉は面食らったような顔をする。その姿を見て、ハッと正気に戻る。

「いや、こっちこそすまない。てか、そんなに驚かなくてもいいんじゃないか」

「そりゃ無理だ。そんな危機迫る顔してたら、誰だって謝っちまうぞ。それより最近見るたびに悩んでるみたいだけど、何かあったのか？」

「まああったというか、現在進行形であるんだけどな」

「それってそのノートのことか？」

そっとノートを覗き込もうとする国吉。しかしそれを見られないように、勢いよく閉めていく。

「まあ気にするな。ちょっと澄音といろいろ約束しててな。それで忙しいだけなんだ」

「……そうか」

見てわかるほどの拒絶行動に、国吉の表情が固くなる。だがこれは見せるわけにはいかない。何も、歌詞を見られるのが恥ずかしいわけではない。こういった創作物を国吉と冴子には見せたくなかったのだ。

せっかくゲーム制作のことを振り切ることができた。また文章を

書いていることがバレ、二人と距離を作りたくはなかった。
だがそうやって自己完結できるのは、もちろん自分だけだ。国吉の疑うような視線は変わらず。ジッとノートを見続けている。
その視線から逃れるためにノートを鞄に仕舞っていく。
「そういえば今日冴子のやつはどうしたんだ。いつもは一緒にこの授業受けてるのに」
「あ、ああ。……ちょっと体調が悪いらしくてな」
「風邪か何かか？　昨日はそんな様子なかったけどな」
「今年は寒いからな。ちょっと大変なのかもな」
どこか歯切れの悪い言葉。和夢は「うん？」と疑問が沸くが、まあ休んでいるのだからそうなのだろうと割り切った。
「でも冴子のやつは授業もちゃんと出てるし、休みの一回や二回問題ないか」
そうやって話を終わらせようとする。だが国吉はさらに深刻そうな顔になっていく。
「……なあ、和夢。あのな」
国吉がこちらに詰め寄ろうとする。だがその瞬間に、携帯のバイブレーションが鞄のどこかから鳴り響く。
どちらの携帯だろうかと、互いにポケットに手を入れる。すると、鳴っていたのは国吉の携帯であった。
「ちっ、何だよこんな時に」

折りたたみ携帯を開くと、その文章に目を通していく。そして全文読み終わったのだろう。何とも言えない複雑な顔になると、勢いよく携帯を閉じていく。

「どうした国吉？」
「いや、気にしなくていいぜ」
「そうか？　そういえばさっき何か言おうとしてなかったか？」
「それも今の時点で言えなくなった。――ったく、あいつは俺のことなら何でもお見通しか」

国吉は深いため息をつくと、筆記用具を仕舞い始める。そして考えあぐねるように頭を掻きながら、こちらを見つめる。

「そういえば今日はどうする。和夢はまた直帰か？」
「そうだな。澄音が家にいるうちは、出来るだけ早く帰ってやりたいからな」
「……外海ちゃんのこと、随分と気に入ってるみたいだな」
「まあ一応同居人だからな。それにもうすぐそんな生活も終わるだろうしな」
「そうか。……まあ今日は俺もそのまま帰りたい気分だったから、ちょうどいいんだけどな。それじゃあ駅までは一緒に行くか」
「ああ、そうだな」

バッグを持つと、国吉と肩を並べ歩きだす。しかし学校から駅につく間、国吉の口数はいつもの半分以下であった。

電車の中で別れると、最寄りの駅に降りていく。このまま真っ直ぐ家に帰れば、時間にして十分ほどで到着する。

だが何となくそのまま家に帰れなく、わざと遠回りして家に向かっていった。

「そうだよな。この生活ももうお終いなんだよな」

雲ひとつない快晴の空を見上げると、当たり前のことを口にする。

この数日間の生活で、何だか澄音が隣にいることが当たり前になってしまっていた。しかし澄音は家出中であり、通うべき学校も帰るべき家も存在しているのだ。

むしろ今の状況がおかしいのだ。だがおかしいとわかっていながら心地よくも思っている。

そんなふうに自分の心に問い続けていると、そういうことなのかと渇いた笑い声を浮かべる。

「こんな気持ちで歌詞なんて書けるわけないよな。そうか、俺は澄音に出ていって欲しくないんだな」

きっと曲が完成すれば、澄音はそれを持って家に帰ってしまうだろう。もちろん彼女の将来を考えたら、出来るだけ早くそうするのが正しい。

だが生半可な歌では、澄音の父親は納得してくれない気がする。と、そんな理由を勝手に付け加え、いいものを作るために頑張ろうと時間を引き延ばし続けているのだ。

「いつの間にか、随分と大きな存在になっちまったな」

もう誰かと共に作品作りなどしないと思っていた。だがその自分が一年も経たないうちに、再び誰かと作品を作ろうとしている。
やはり自分は依存しやすい性格だ。そして誰かと作品を作るということは、やはり面白いことだった。

和夢の心は完全に上の空だった。そんなふうにボーっと空を見上げていると、ドンと誰かの肩がぶつかった。

「す、すみません」
「いやいや、こっちこそ辺りを見回したからおあいこだ」

少しくたびれた灰色のスーツを着た男は五十台後半くらいであろう。線のような細目がやけに印象的である。
男は一歩後ろに下がると、被っている帽子を取り頭を下げる。その姿を見て、和夢も頭を下げていく。そしてワンテンポ遅れて頭を上げていく。

「ふむ。君はここら辺に住んでる人かな」
「はい、そうですけど。……それがどうかしましたか」

男の目踏みするような視線に気づくと、途端に居心地が悪くなる。だが男も自分が不機嫌になっていくのに、気がついたのだろう。帽子をかぶると、その視線を止めていく。

「いや、すまない。どうも職業柄、観察する癖がついていてな。それはそうと、ちょっと聞きたいことがあるんだがいいか？」
「……いえ、ちょっと急いでますんで」
「まあまあ、年寄りをそう邪険に扱うもんじゃないぞ。ちょっといま人探しをしていてな。このあたりでこんな子見かけなかったかな

？」

スッと取り出されたのは、一枚の写真。そこに映っているのは、ショートカットの小学生くらいの女の子だった。

迷子探しだろうか。と言うことは、この女の子は、この男の娘だろうか。

そう。そんな見当外れな答えが初めに浮かんだからこそ、驚きを最小限に抑えることができたのだ。

この男にはあまり関わりたくない。少し写真を見てさっさと行こう思ってなければ、きっと顔に出てしまったはずだ。

写真に映っている女の子は、髪型も歳も違う。だがところどころに澄音の面影を残していた。

「どうだ、この女の子に見覚えはないか？」

「……特にないですけど。貴方の娘さんですか」

「おや、どうしてそんなことを聞くんだ？」

細目が薄らと開くと、再び観察するような視線をこちらに送る。今の質問は失敗だった。質問などせずにさっさと離れればよかったのだ。

「いや、あんたの子供にしては随分と幼いと思っただけだ」

「確かにそうだな。まあ半分当たりの、半分外れといいうか。この写真の子は俺の子供ではない。そして実際の彼女はいま高校生だ。この写真もどこまで当てになるかはわからない」

「そんなので人探しか。大変だな」

「これも仕事だからな。それでもう一度聞きくけど」

男は一度言葉を止める。そして薄らと開いた細目を、今度はこちらの視線にぶつけてきた。

「この写真の女の子、どっかで見なかったか？」

一瞬、背筋が凍りつく様な感覚に見舞われる。この男の正体は何者だかはわからない。だが直感が奴は危険だと訴え続けていた。

表情に出すんじゃない。いつも通り落ち着いた様子を見せるんだと頭に命令し続ける。

手を握りこむと、緊張のあまり手汗がすごいことに気づく。しかしそれを尾首にも出さないように、ゆっくりと声をあげていく。

「いや、ここら辺では見たことありません」

「……本当に見覚えないんだな？」

「まあ普段は大学に行ってますし、いつも駅から家には直帰してますから」

「なるほどな。それじゃあ引きとめてわるかったな」

男は再び帽子を取ると、軽く会釈をしていく。しかし今度は頭を下げ返すことなく、すぐに背を向けていった。

早歩きで進んでいき、男の姿が見えなくなるとホッと安堵の息をつく。

だが同時に、それはそうだよなと額に手を当てていった。

「澄音が家出をしてもう一週間以上が経つんだ。親御さんだって心配しないはずがないよな」

あの男は探偵か何かであろう。どこか薄気味悪い男だったが、世間一般的にいえば薄気味悪いのは自分のほうであろう。

悪いことと分かっていながら、高校生を家に泊め続けているのだ。いや、自分の場合悪いと思っていなく、むしろ心地よく感じているのだから余計に達が悪い。

本当は洗いざらい、あの男に話したほうがいいのだろ。だが今はまだそうするべきではないと、勝手に結論付けていく。

そしてまだこの辺でうろうろしているであろう男に注意しながら、さらに遠回りをして家に向かっていくのだった。

第６章「空に消えた声と紙に書かれた言葉」ｐａｒｔ２

１５

「澄音、今帰ったぞ」

いつもより十五分以上時間をかけて家に到着する。しかし彼女の出迎えの声はなかった。

また疲れて寝ているのか。そう思い、部屋に入ると、ベッドの上でうずくまっている姿が目に映る。

しかもその顔には、薄らと涙を浮かべていた。

「す、澄音。どうしたんだ澄音！」

まさかあの男がここまでやってきたのか。それとも父親から何かしらの連絡があったのかと、すぐに駆け寄っていく。

「あっ、和夢……」

「なに泣いてるんだよ。どうした体調が悪いのか。それとも連絡が――――」

「すごくよかった」

涙を流しながらも、ニコッと微笑みかけてくる澄音。だが何がよ

かったのか、見当もつかない。

「何がよかったんだ？　もう読んでもらう小説はなかったはずだが」

「うん、小説はなかったけどね。でも、もう一つ、大きな一冊があったでしょう」

「大きな一冊って、もしかして」

ハッとしながらテーブルの上を見ると、そこには無骨なクリップで止められている紙の束、ゲーム企画のシナリオが置かれていた。

「これを、読んだのか……」

「この数日ずっとね。あっ、でも安心して。自分なりに発声練習とかはしてたから」

「いや、そうじゃなくて。どうしてだ。別に無理にこの話を読む必要はなかったのに」

「無理に読んだわけじゃない。それにバイト代とか考えて読んだわけでも、歌詞を作ってもらうお礼に読んだわけでもない。私が読みたかったから、断りもいれずに読んだだけ。だから勝手に読んで本当にごめんね」

そう許しを乞う澄音。その反応にどうしていいか、和夢はわからなくなる。

「別に読んだのは怒ってないさ。でも聞きたいことは、その、あの……」

「なに？」

澄音は顔を上げると頭に疑問符を浮かべる。和夢は困ったように視線をさまよわせた。

「そ、それはな。あの、えっと、その、シナリオ。ど、どうだったかなって？」
「どうだったって？」
「い、いや、ゲームのシナリオだからちゃんと読めたかなって」
本心を口にできずに、思わず違うことを言葉にする。すると澄音は思いもよらないことを口にする。
「正直言うとね、途中で何度も読むのをやめようと思ったんだ」
ぐさりと衝撃が体を貫く。自分の全てを投げ打った作品が、読めたものではない。そう言われれば当たり前だ。
「す、すまないな。あんまり面白くなくて」
「えっ、なに言ってるの？　誰も面白くなかったなんて言ってないでしょう。というか、初めにすごくよかったって言ったよね」
キョトンとする澄音を見て、確かにそうだったと思い出す。いろいろと衝撃的なことが多く、少し頭が回ってなかったようだ。
「それじゃあ何で読むのをやめようと思ったんだ」
「うーん、やっぱりこの作品はゲーム用に書かれたわけよね。もちろんシナリオ単体でも面白いけど、このシナリオがしっかりと活かせるステージなら、もっと、もっと、もっと、もおおおっとよくなると思ったら、読むのをやめたほうがいいと思ったの」
「そ、そうか」
その説明に、ホッと安堵の息をつく。だがそれと同時に、少しばかり寂しい気分になる。

「いや、この状態で読んでもらって正解だ。澄音には全部話したが、これがゲームになることはもうないんだからな。むしろ一人にでも読んでもらっただけで、このシナリオには十分すぎるくらいだ」

無骨なクリップを外すと、その紙の最後の数ページを手に取る。三部構成の話しが全て繋がり、そして全てのキャラクターがそれぞれの道を歩くラストシーン。

これを書いた日の感動は今でも忘れない。そしてそれを人に伝えることができたのだ。それでもう満足だ。

再び最後のページを戻そうとする。すると澄音はその手をガシッと掴んでいく。

「何言ってるのよ。和夢もそのシナリオもまだまだこれからじゃない」

「そっちこそ何を言ってるんだ。このシナリオはもう――――」

「同人ゲームでは作れないって言うんでしょう。だったら本物のゲームにすればいいのよ。それならもっと多くの人に見てもらえる」

「……どういうことだ？」

「だ、か、ら。将来的にそのシナリオでゲームを作ってやればいいのよ。確かに今は小説家を目指してるかもしれない。でも小説家で成功したからって、そのあと小説しか書いちゃいけないなんて決まりはないでしょう。だったら和夢の文章が認められた時に、改めてその企画をだしてやればいいのよ。そしたらその作品は日の目を浴びることが出来る。ねっ、いい考えじゃない？」

どうよ、どうよと、自信満々の顔をする澄音。そんな彼女の顔を見ると、再び視線を最終ページに合わせていく。

「これが、また日の目を浴びることができる……」

それはどんなにいいことだろうか。それはどれだけ自分が望んでいることだろうか。そんなこと考えるまでもない。確かにこのシナリオは拙い頃に書いた、自分の書きたいことだけを全てぶち込んだ作品だ。

だからそれが世に受けるかはもちろんわからない。でもだからこそ、本当に伝えたい自分の好きだという思いの塊なのだ。

「あ、あれ……」

今度はこちらが涙を流す番だった。きっと自分でもずっと知らずに張りつめていた糸があったのだろう。全ては澄音に愚痴を話した瞬間に終わっていたと思った。だけど涙があふれ出し止まらないほど、このシナリオを大切に思っていたのだ。

ああ、そうだ。ずっと作品を机の中に閉まうことをよしと思う物書きなどいない。自分の好きだと言う思いを人と共有したいからこそ。人は創作し世に発表していくのだ。

「はい、和夢」

目頭を抑える和夢に、澄音はハンドタオルを渡す。こんなところでも資源の無駄使いを省くのかと、別にちり紙でもよかったと思いつつも、それを目に当てていく。

「本当に、澄音にはいろいろなことを思い出させてもらってばかりだな」

「だからそれはお互いさまだって。和夢はいろいろなことを私から思い出すかもしれない。でも私は和夢の姿と、文章を見て、しっか

りと前を見据えようって気持ちになってるだから」
「そうか、そういえばそうだったな」
だがそうだとしたら本当に澄音とは相性がいいのだろう。まるで互いを支え合うように、二人の足りない部分を補っているのだから。
「……そうだ」
タオルを顔から離すと、ふとあるフレーズが頭をよぎる。そして気付いたのだ。全ての創作は想いがあってこそなのだと。
「わかった。わかったぞ！」
「ど、どうしたの和夢。何がわかったの」
「歌詞だよ、歌詞。ああ、そうだよ。どうしてそんな簡単なことを今まで忘れてたんだかな」
和夢はタオルを投げ捨てると、バッグの中からノートとシャーペンを取り出していく。
そして今まで書いた歌詞を見て、何てお粗末なことを書いていたのかと、半笑いしていく。
いままではとにかくいい歌詞を、心に響くフレーズをと考えていた。だがそれではいいものはできても、想いのこもったものは出来ないのだ。
このゲームシナリオのように拙くてもいい。それでも彼女に伝えたいことをこの詩に乗せようと思った。
「和夢？　……うん、頑張ってね」

きっとこの心境変化を澄音は理解していない。それでも自分の行動を見て納得してくれたのだろう。発声練習をするためにベランダに移動する。

文章の技術力は向上したが、想いを無くしていた中野和夢。声の技術は拙いが、楽しい想いに溢れている外海澄音。

自分が歌詞を書き、彼女が歌うとしたら、そのテーマは一つしかない。

和夢はそのフレーズを頭に何度も思い浮かばせ続けると、無我夢中に歌詞を書き続けていくのだった。

第６章「空に消えた声と紙に書かれた言葉」ｐａｒｔ３

／１２

一心不乱、無我夢中、全身全霊を傾る。きっとそれらの言葉は、いまの和夢を露わすために存在しているのだろう。

「あー、あー」

暖房設備の中で渇いた喉をしばし慣らしながら、ベランダ越しに彼の横顔を覗いていく。

そのひたむきに真っ直ぐな顔を見れば、いい歌詞が完成することは疑うまでもない。だがそれに見合う声を自分は出すことが出来るだろうか。

ただ声を出すのが楽しいと。そんなことしか思っていなかった自分に。

「スゥー、ハァー」

深呼吸をしながら、肩や背中や胸の余分な力を抜いていく。重心の取り方や、顎を引くことなど何度も繰り返してきた姿勢を取ると、「あー」と先ほどよりも長く声を出す。

耳に手を添えながら、自身の声を聞くことに集中。そして何度も、

何度も発声練習をしていく。
何度も繰り返し、ある程度声を出すことには慣れている。だが慣れたからこそ、よくわかった。
多分自分は和夢の力量にはついていけないと。
自分で歌詞作りをお願いしたにも関わらず、気の弱い話だ。だが和夢が夢を現実に見定め努力をし、その結果を形にしているからこそわかる。
あれだけの文章を書くことは並大抵の想いでは出来ない。それを小説の時点で感じていたのに、さらにゲームのシナリオを見てはなおのことである。
しかし追いつけないと認めることと、全力を出さないことは違う。自分は全力で和夢の歌詞を歌ってみせる。そしてその本気を父親に見せるのだ。
「あ・え・い・う・え・お・あ・お。か・け・き・く・け・こ・か・こ――――」
だからといって、その本気が父親に認められるかはわからない。いや、機材を全て壊したことを考えてみれば、余計に怒らせるだけかもしれない。
でもそれでも構わない。例えそれで認められなくても、認められるまで何度も挑戦すればいいのだ。たとえどんな形であっても、自分は声を出すことが好きなのだから。
「あめんぼ赤いなあいうえお――――」
それにいまは純粋に楽しい気分だ。和夢と何かを一緒に作り上げ

ることが出来ると言うこと。
これは自分にとっての夢の一歩。そして和夢が忘れてしまった一緒に何かを作り上げると言うことへの懸け橋にしていきたかった。

「ん、んん。フゥー」

一通りの発声練習を終えると、呼吸を整えていく。そして胸のあたりに手を置いていくと、あの歌を歌い出す。

「今　私の願いごとが――――」

自然と口から出た歌は、学校で習ったありきたりなものだった。動画サイトなどで、最近の歌や人気のある歌はいつくも聞いたはずなのに、やはり自分はこの歌が一番好きなようだ。

「翼が欲しい　この背中に　鳥のように」

きっとこの歌に自分を重ねていたのだろう。ずっと家に閉じ込められ、やりたいこともやれない。だからこそ大空に羽ばたける翼が欲しかった。

「この大空に　翼をひろげ　飛んで行きたいよ――――」

だけどその考えは間違いだったのだ。翼がないから、飛べないと諦めるんじゃない。誰かから翼を与えられることを待っていてはいけないのだ。

それに初めは地べたを這いずりまわるくらいがいいのだ。いきなり高見を目指すのではない。しっかりと歩く道を見据えなければ、大空に辿りつくなど夢のまた夢なのだから。

「翼はためかせ　行きたい」

だからこそ和夢が作った歌詞を歌にしたら、ここから離れよう。元から期限のない同居生活だったが、それももう終わりにするのだ。

そして次に会うときは、しっかりと自分の夢を現実に見据えた状態で会う。それが出来なければいまの和夢とは、向かい合えないから。

「ふふっ、おかしいな。私は別に和夢のために声のお仕事したいわけじゃないんだけどな」

窓を挟んでいるので、この声が聞こえることはない。だからこそ、正直な想いを口にできた。

「あーあ、やっぱり私。和夢のこと好きになっちゃったみたい」

言った瞬間に、再び横目で和夢を覗き込む。だが自分の声など全く届いていないようで、ひたむきに歌詞を書き続けていた。

生まれて初めての告白は、相手に届くことなく快晴の空の中に溶け込んでいく。だがそれでいいのだ。きっと告白をすれば和夢を困らせることになる。

それがいい答えでも、悪い答えでもだ。だけど今の和夢はやり遂げるべき現実と、叶えたい夢を追っている途中なのだ。

「それに和夢は私の家のことについて何も知らからね。それを知ったらきっと――――。ううん、今はそんなことどうだっていいか。さっ、頑張って練習しよう」

再び胸に右手を添えると、夕暮れの空に目を向けていく。
そして少しでも和夢に追いつこうと、声をあげていくのだった。

第６章「空に消えた声と紙に書かれた言葉」ｐａｒｔ４

１６

「いよっし、終わったぞおおぉぉぉおおおおっ！！」

ノートに書きあげた歌詞を見ると、和夢はまるで優勝ベルトを掲げたボクサーのように手を挙げていく。

らしくないテンションだと言うことは、自分自身も理解してる。だが今は湧き上がる感情のほうが大きかった。

「お疲れ様。牛乳でも温めて一息つく？」

「いや、それは大丈夫だ。とにかく今はこれを見てくれよ。ほら、ほら」

ノートにこれでもかと言うほど折り目をつける。

「和夢、嬉しいのはわかるけどもう少し静かにしたほうがいいよ」

「静かにしろって、やっと完成したんだぞ。これが喜べずにいれるか」

「で、でも、時間も時間だし」

澄音は少し苦笑いをしながら、時計を指さしていく。

「時間って、まだあれから。……えっ、何でもう十一時なんだ？」

時間の進みが明らかにおかしい。ついさっきまで、夕方だった気がしたんだが。

まだ信じられないと、携帯を開くがディスプレイに表示される数字は、二十三時。つまり夜の十一時だ。

「和夢すごい集中してたからね。ノートに文字を書いては次のページに捲って、また書いては捲って、見てて感心しちゃった」

「そ、そんなにすごかったのか」

「それはもう。何なら、ノートをパラパラと捲ってみればいいんじゃない」

そう言わると、和夢はノートを手に取る。そしてページを捲るなか、書き殴ったような字がズラズラと続く姿を見て、確かにと苦笑いをする。

しかし夜だとわかっても一向にテンションが落ちる気配がない。これは俗に言うナチュラルハイと言うものだろう。

「まあとにかく完成したんだ。ほら、早くこっちに来て見てくれよ」

「うん、それじゃあ見させてもらうね」

澄音は和夢の隣によいしょと座ると、ノートに書かれている文章に視線を送る。

「あっ、左側にあるのは汚いから、清書した右のページ見てくれな」

「さすがにこの字じゃ読めないしね」

視線を右に定めると、澄音は黙ってしまう。
人に作品を読まれている。この時のドキドキはいつになっても慣れないものだ。
特に文字媒体は、一目見ただけでは感想をだせない。これもまた物書きの宿命であろう。

うわ、すげえ緊張してきた。

もしこの歌詞を読んで、全く駄目だと言われたらどうしようか。正直この歌詞には自分の想いを全て込めたつもりだ。書き直しは考えたくなかった。
だが書き直しだったとしたら、どこが悪かったか。どうしたらよくなるかと二人で話し合えばいい。

そんな後ろ向きのような、前向きのようなことを考える。すると澄音はスッと目を閉じていく。

まさか見るに堪えないほどだったのか。緊張のあまり心臓の鼓動が早くなる。

「……ねえ和夢」
「ど、どうした？」
「……ありがとうね」

ニコッと微笑みかける澄音。だがその意味がわからない。

「何だよありがとうって」
「この歌詞、ところどころ私と和夢のことを思って書いてくれたんでしょう」
「よ、よくわかったな」

「それはわかるよ。ニ番からはそうでもないけど、一番のことがまんま私達のことだし」

澄音が指さした歌詞には、『あの夜　二人は出会った』と書かれている。そしてさらにサビの部分の、『互いにないものを補おう』という文字を指さす。

「一番の歌詞は何だか、自分のことだから少し恥ずかしい気分になったけどね。でも、嬉しかった。でもさらにすごいのはニ番からの歌詞ね。出会った二人の恋心とか、これからもずっと一緒にいたいとか、何かギューっと締め付けられる気持ちになる。そしてそれがあるからこそ、三番のサビの部分がさらに盛り上がる。このまま物語にしてもいいくらい、よく考えられた歌詞だと思うよ」

本当にすごいと、立て続けに褒める澄音。だがそれは違うと、口を開く。

「いや、一番だけじゃなくてそれも俺の本心だ」

「えっ、でもそれはあくまで一番だけで……」

「何言ってるんだ。これは澄音のことを想って書いた歌詞なんだ。だったら全部澄音のことを書くに決まってるだろう」

何を当たり前のことを聞いてるんだ。そう続けようとした瞬間に、ふと疑問符が頭に浮かぶ。

今何て言った。一番だけでなく、恋心が鮮明なニ番も澄音のことを想って書いただって？　それじゃあ歌詞じゃなくて、むしろラブレターじゃ――――。

和夢がそう思考するより一歩先。言葉の意味を理解した澄音は、その頬を徐々に紅く染めていく。

「えっ、えええっと、あ、あぅ」

頭のてっぺんまで真っ赤になると、恥ずかしさのあまり澄音は俯いていく。

それとは逆に和夢に羞恥心は現れなかった。その代わりに、頭の中は大混乱状態である。

一体自分は何を言っているんだ。澄音のことが好きだと。そんなこと今初めて知ったぞ。

改めて考えてみると、いつ、何があって、どうして彼女のことが好きになったのかと必死に思い出していく。

だけどその答えは一向に見つからない。なら、どうして自分の本心だと言ってしまったんだ。

「――――あっ、そうか」

ノートの文面に目をやるとようやく気付かされる。するとああだこうだ考えても見つかるわけがないんだとわかる。

「か、和夢。あの、私を驚かせようとしてるだけだよね」

「いや、どうやらそうでもないみたいだ。というか、俺、本当に澄音のことが好きみたいだ」

「ひゃ、ひゃう」

好きという言葉を聞いて澄音は飛び上がっていく。だが対照的にこちらの頭のなかは随分とスッキリしていた。

「俺さ、初めは感動できる歌詞、かっこいい歌詞ってずっと考えて

たんだ。でもいくら書いてもどうにも上っ面だけになってるようで。そしたらゲームのシナリオの話しを通して思ったんだ。澄音の歌う歌詞を、澄音のことを想って書こうって。そしたらさ、すごいスラスラ書けたんだ。もちろん歌詞にするのは大変だったけど、それでも伝えたい想いはいくらだってあった。――書き終わった今だからわかる。考える間もなく、感じ取ることもなく、俺は自然と澄音のことが好きになってたんだって。改めて歌詞を見直さなくても分かる。書いてある通り、俺は澄音と出会って、恋心を抱いて、そしてずっと一緒にいたいと思ったんだ」

「あ、あの、わ、私は、その――――」

「あっ、だからっていって身構えなくても大丈夫だぞ。あくまで俺の気持ちがそうだってだけで、初めに約束した通り、手を出したりは絶対にしないから。というか、澄音に嫌われるようなことはしたくないんだ」

つい感情的になってしまったと頭を掻く。だがそんな自分を見て、澄音の表情が一瞬固まる。そしてすぐにむすっとした顔に変わっていく。

「……嫌われるようなことしてるじゃないのよ」

「た、確かにいきなりこんなこと言われて困るのはわかる。だけど人の告白を嫌われる行為っていうのはあまりにもきついんじゃないか」

「だ・か・ら。そういう草食系なところが嫌だって言ってるのよ！」

澄音はグイッとこちらに近づく。そして瞳に映る景色が、彼女一色に染まっていく。

そしてそっと、本当に軽く触れる程度に唇が重ねられると、あっという間に二人の距離は離されていく。

「……あっ、えっと」
「も、もう。どうしていつも私がリードしなくちゃいけないのよ。年下で女の子だっていうのに」
「今、その……」
「べ、別に約束を破ったわけじゃないわよ。和夢から手を出さないって言ったけど、私から出しちゃ駄目なんて約束してないからね。あーもう、どうしてこんな積極性のない人好きになっちゃったんだろう」

もう視線すら合わせらないと、澄音はそっぽ向いてしまう。
だがそんな澄音を見て、和夢の欲求はさらに高まっていった。

「な、なあ、今一瞬でわからなかったから、も、もう一度キスしないか」
「何よ、私には手を出さないんじゃないの」
「て、手は出さないからさ。だからその変わり口を出すと言うか……」
「なに小学生みたいな屁理屈こねてるのよ。……こういうときはいちいち聞いたりしないで。はっ、恥ずかしいんだから」

んっ、と目を閉じ唇をこちらに向ける。澄音の肩を抱きしめると、今度は自分から唇を奪っていった。
ぶつかり合った唇から彼女の体温を感じる。抱きしめている体は覚悟を決めても恥ずかしいのだろう。付かず離れずといった距離だった。

いったい何秒そうしていただろうか。そっと唇を離していくと、お互いに視線を逸らせずにはいられなかった。

――――ぐぅ〜〜。

その瞬間、ステレオ音声で聞こえる聞き覚えのある音。いったい何だと考えるが、すでに夜の十一時なら、考えるまでもないだろう。

「……何ともまあ、カッコがつかないな」

「でも閉まらないところが私達らしいかもね」

二人して「あはははは」渇いた笑いを浮かべる。

「とりあえず夕飯にするか。今日は俺の当番だしな」

「あっ、待って和夢」

立ち上がった自分の手を澄音が握る。

「どうした？」

「えっとね。私も台所に行こうかなって思って」

「台所って、暖房ないから寒いぞ」

「それでもいいの。……今は少しでも和夢と一緒にいたいから。和夢はそうじゃないの」

頬を膨らましながら訴える澄音。そんな彼女の愛らしい姿を見ると、握られた手に指を絡ませていく。

「もちろんそうだ。でも俺の当番で澄音が寒い思いをするのも嫌だな」

「……大丈夫よ。こうやって手を握っててくれたら寒くないから」

恋人繋ぎをした手を澄音は強く握りこんでいく。そんな彼女に答えるように自分も力を込めていった。

「それじゃあ一緒に寒い思いして。それで温かいものでも作るか」

「うんっ！」

部屋の暖房を切ると、扉を開け台所に向かっていく。

繋いだ手を離すことなく。調理中ちょっと不便ではあったが、それでも離れることはなく。

お互いの体温を感じながら、幸せに包まれていくのだった。

第7章「残した物と残された者」Part1

／13

ピピピピピピピッ！

ここ最近ですっかり聞きなれたアラーム音が部屋中に鳴り響く。

「ふぁー、もう朝か。今日は私が朝ごはんの当番だったっけ」

眠たい頭で考えてみるが、昨日の夕飯を和夢が作ったのだから間違いないだろう。その前にこのうるさい目覚ましを止めようと思う。だがなぜかベッドから出ることができなかった。

「あれ？　あっ、そうか」

ベッドの中に目を向けると、寝ている間もずっと繋がれていた二人の手を見る。まるで自分を逃がさないようにがっしり握られた手を見て、幸せな気分がこみ上げる。

「もう、これじゃあ出られないじゃない。ねえ、起きて。起きないと学校遅刻しちゃうよ」

空いているほうの手で彼の体を揺すっていく。

「う、うん？」

自分と同様目覚めたばかりだからか、頭が回らないようだ。そして瞼を擦ろうとしたのだろう。握っている手が離れようとすると、そうはさせないと握りこんでいく。

「ん、あれ。……おはよう澄音」

「おはよう、和夢。ほら、早く起きて朝ご飯にしよう」

「ああ、そうだな。……ははっ、何だか気恥かしいなこういうの」

握られた手を見ると、和夢は照れ笑いをする。それにつられ澄音も笑顔を浮かべた。

今までに感じたことないくらい、本当に幸せな時間。自分と和夢の想いが通じ合ったからこそ、得ることのできたこの時間。

だが和夢の想いがこもった歌詞が出来た瞬間に、二人の別れは決まってしまったのだ。

きっと家に帰れば今までのようには会えなくなる。ずっと一緒にいたいと思った矢先なのにだ。

だが会える回数は激減するが、それでも全く会えないわけではない。学校の帰りになど少しお茶をしても問題ないし、休日にどこかにでかけたりしても面白い。

どうせ父親はろくに家に帰らないのだ。それくらい黙っていればバレないだろう。

ピピピピピピピピッ！

鳴り響く携帯がさすがにやかましく感じてくと、二人はベッドか

ら起き上がり、携帯を止める。
だがその間も手を離すことはなく。バカップルと言うのも悪くないものだと、今まで偏見の目を向けていたカップル方に謝罪していくのだった。

朝ご飯はいつもどおりパンとスクランブルエッグだ。少し前にたまには目玉焼きにしないかと言ったが、和夢は固まった黄身が苦手らしい。
そんなふうに彼の好き嫌いもようやくわかってきたのになと、澄音は懐かしささえ覚え始めていく。
和夢はご飯を食べ終え、いま学校へ行く準備をし終えたところだ。

「それじゃあ今日は二時間目までだから、一時前後には帰ってこれると思うから」
「うん、その間に和夢の歌詞に音程つけておくね」
「……それだけど、よく考えたら音楽もなしに歌ってのも変な話なんだよな。なあ澄音、もしあれだったら音楽をなんとか出来るまで――――」

もう少しここにいないか。きっとそう訴えようとしたのだろう。
「大丈夫だよ。私もう決めたから。これが終わったら、その時には……」
「そうか、そうだよな。いつまでも避けて通れる道じゃないしな。それじゃあ録音が終わったら今日はおいしいものでも食べに行くか」
「お金大丈夫なの？　録音用のマイクも買ってもらったばかりなのに。それに今着てる服だって和夢に買ってもらったものだし」
服屋で買ってもらった服の裾をチョンとつまんでいく。すると和

夢はわしゃわしゃと頭を撫でてきた。

「心配するなよ。確かに家での食費は普段よりついたけど、その分外食が減ったからむしろ節約になったくらいだ。それに澄音はしっかりと俺の文章を読んでくれた。バイト代って考えたら少ないくらいだ」

「……うん、ありがとうね」

普段なら子供扱いされるのは嫌だが、今は和夢の体温を感じていたくて、されるがままでいる。

だが時間というものは、一定に流れるもの。特に今は自分と長くいるために、ギリギリまでここにいてくれたのだ。もうあまり時間はなかった。

「それじゃあもうそろそろ行くな。あんまり練習しすぎて喉壊すなよ」

「うん、わかった。行ってらっしゃい、和夢」

んっ、と目を閉じると唇を押し出していく。目には映らないが、和夢が恥ずかしそうに頭を掻いている姿が目に浮かぶ。

五秒ほどして、唇に和夢の唇が押し当てられていくのを感じる。少し目を開くと、目の前に和夢の顔があり、恥ずかしくなって思わずまた目を閉じてしまった。

そして離れていく唇。恥ずかしさよりも心地よさが今は大きかった。

「じゃ、今度こそいってくるな」

「うん、いってらっしゃい」

玄関から出て見送ると、和夢の後ろ姿が見えなくなるまでその背

中を追い続ける。
そしてその背中が見えなくなると、家の中に戻っていった。
「……私も頑張らないとな」
グッと手を握りこむと、自分を奮い立たせていく。まずは歌詞をどのようなテンポで歌うか、いくつかの案を上げてみようと思う。
――ピンポーン。
気合いを入れた瞬間に、出鼻をくじかれていく。
「何か忘れ物でもしたのかな。まったくこのままじゃ遅刻確定ね」
やれやれと思いながら、玄関に向かっていく。そして扉を開ける途中、何かがおかしいことに気づく。
和夢は帰宅時に、チャイムを鳴らしたことがあっただろうか？
何か嫌な予感がする。この扉は開けてはいけない。
頭がそう訴えてくるが、もう遅い。鍵を開けた瞬間に、ドアノブは力強く引っ張られていく。
そして目の前にいる人物を見て、思わず息をのんでしまうのだった。

第7章「残した物と残された者」ｐａｒｔ２

１７

校内に鳴り響く授業終了のチャイム。時刻は十二時十分。和夢にとっての今日最後の授業が終了するのだった。

「よし、それじゃあ帰るか！」

誰よりも意気揚々と教室から飛び出していく。とにかく今は少しでも早く家に帰りたかった。

「そういえばお昼はどうするかな。何か買っていくか？」

夕飯は外食と決めているが、すっかりお昼のことは忘れていた。確かまだ家にインスタント類はあったはずだが、こんな大切な日にレトルトもどうかと思う。

まあその分夕食を豪華にしてもいいのだが。悩みどころだ。

とりあえず学食を通り過ぎると、校門を抜けていく。するとその瞬間、ポケットの中で携帯が震えだす。

電話のコールマークが表示されると、澄音もお昼の心配のことで連絡したのかとウキウキしてしまう。

しかし浮ついた感情が一瞬で冷めていく。そこに表示されたのは『大場冴子』という文字だった。

「そういえば、今日も冴子のやつ学校に来てなかったな。……でも何の用だ」

今日は澄音と過ごせる最後の日かもしれないので、あまり邪魔は入って欲しくない。

授業が長引いたことにして、無視すればそのうち切れるだろう。そう思うが一向に着信は途切れることはない。

それでも何度か留守電になったのか、そのたびにバイブレーションは止まる。だがすぐにまた着信が入る。

「……何で今日なんだよ。――ったく！」

携帯を開くと通話ボタンを押す。

「……もしもし」

『もしもし、和夢。よかった繋がって』

「それでどうしたんだ。これからちょっと忙しいだが」

『あ、あのね。これから話したいことがあるのよ。携帯越しじゃなくて、直接』

「今の話し聞いてたか？　今日は忙しいんだ。旅行のことなら、明日以降にしてくれ」

『そうじゃないのよ！』

悲鳴のような声が受話器越しに聞こえてくる。

「冴子？」
『旅行の話じゃないの。お願い、ほんの少しでいいから話をさせて。……外海さんと話せて、ようやく覚悟を決められたの』
「外海さんって、何で冴子が澄音と……」
『それもその時に話すわ。お願い、外海さんにも今日の朝に了承はもらってるから。だからお願いよ！』

そんなお願いをされても本当は断りたかった。たとえ澄音の了承を得ていようと、少しでも彼女と長くいたかったから。
だが電話越しに聞こえる冴子の声は、悲鳴を上げてるようにも、泣き叫んでいるようにも聞こえるほど、切実なものである。

それに澄音と話しているのでは、下手な言い訳だって通じない。和夢は聞こえるように舌打ちしていく。

「分かった。そしたらどこに行けばいいんだ」
『――ありがとうね和夢』

それじゃあと場所に説明をされると、携帯を閉じていく。
いったい今更何の話があると言うのか。ようやく自分は過去を振り払い前に進めると思っていたのに。

「ちっ、仕方ないな。さっさと行って話を聞くか」

こうしている間にも時間は過ぎていくと、和夢は歩く速度を速めると、指定された公園に向かっていった。

その公園には覚えがある。当たり前だ、ここは澄音と二回目に出会った思い出の場所なのだから。

「あまり人には聞かれたくないってことか」

確かに裏通りの公園なら、内緒話をするにはもってこいだ。

中に進んでいくと、中央のベンチに冴子は座っていた。彼女はこちらの姿を見つけると、すぐに駆け寄ってくる。

「来てくれてありがとうね」

「要件は早く頼むぞ。本当に今日は忙しいんだ」

「うん、わかってるわ。外海さんももう時間がないって言ってたし。だからもう言い淀むこともしない」

冴子はギュッと下唇を噛むと、力いっぱい頭を下げていく。

「今まで本当にごめん。いくら謝ってもすまないと思ってるけど、まずはこれだけは言わせて！」

何の脈絡もなく下げられる頭に、思わず後ずさってしまう。

「ど、どうしたんだよいきなり。何があったんだ」

「それは和夢が一番よくわかってるでしょう。私はゲーム制作のことについて、謝罪しに来たのよ」

下げられた頭がゆっくりとあげられる。冴子は目を潤ませながらも、真っ直ぐにこちらを見つめた。

「謝ったからって許してもらえるとはもちろん思ってない。でも私には謝ることしかできないから。だから私は――――」
「そのことなら気にするなよ。俺はもう気にしないことにしたんだ」
「……和夢」

激情的な冴子と違い、和夢は落ち着いた様子である。
だが和夢とすれば、全ての過去を振り切った直後の謝罪である。ずっと何かしらのアクションを求めていた過去と違い、本当に今更なことだと白けていく。
「大丈夫だって。もうゲームのことは心の中で決着がついたんだ。話すことがそれだけなら、もう帰るぞ」

そして早く澄音に会いたい。それだけを思い背を向けようとする。だがその手はすぐに掴まれていく。

「それが一番嫌なのよ。和夢のなかで解決しちゃって。それでこのまま別ればなれになったら、本当に後悔しちゃうから」
「このまま別れるって、まだあと一年もあるだろう。それに卒業前旅行だってあるし――――」
「その旅行で終わりなのよっ！」

涙を流しながら訴えかける冴子を見て、和夢の表情が変わる。冴子は涙を拭うことなく、さらに叫び続けた。

「私、今学期が終わったら大学をやめることになってるの。だからこの旅行が本当に最後なのよ」
「だ、大学をやめるって。どうしてだ、そんなこと一度も……」
「和夢には話せなかったから。だからこのまま何も打ち明けずに最

後に思い出を作るだけでいいと思った。だけど、やっぱり耐えられなかった。何より、和夢に謝らずに離れられなかったのよ」
「どういうことだよ。いったい、何があったっていうんだ！」

全く要点が掴めずに、焦りだす和夢。冴子はちょっと待ってと、一度涙を拭くと話を続ける。

「うちのお母さんね。ここ一年ずっと入院してるの。それにここ最近寒くて、余計に体調が悪化して。もしかしたらもう長くはないかもって……」
「一年前って、それじゃあ俺たちが長編ゲームを作り出したあたりに」
「でもその時はまだそこまで体調が悪いってわけじゃなかったのよ。でもお母さんが入院するのなんて生まれて初めてのことで、家事とか着替えを持っていったりとか、やることがたくさんあって。……それで絵を描くことができなくて。でも当時は今は出来なくても、お母さんの体調がよくなれば、また今までどおりの生活が送れると思ってたの。その時に一生懸命挽回すればいいって。そればっかり思ってて」
「どうしてそれを言ってくれなかったんだよ！　わかってればゲーム制作のことなんて――――」
「そう思われるのが嫌だったのよ！　私達はいくつかのゲームを作ってきて、それの達成感も辛さも知ってる。だから私のことを気にして、ゲーム制作なんてって言葉にする和夢の姿を見たくなかったの。……でも結果として和夢を裏切り続けちゃって」
「国吉は、国吉は知ってたのか！」
「……うん。私が着替えを病院に運んでるのを何度か見てたらしくて。ほら、あいつと私って幼馴染だからさ。何か違うってすぐに気付いたみたいなの」
「そう、なのか……」

冴子の話を聞いて、どうして国吉があれほどまで旅行の話しを勧めようとしていたことをようやく理解していく。
国吉は冴子の最後の学園生活を一番の思い出にしようとしていたんだ。

なのに自分一人だけ何も知らずに、ゲームが完成しないことに腹を立て続けていた。
相手のことを気遣ってやれない幼稚な考えに、嫌気がさしてくる。

「和夢、そんな顔しないでよ。私が言いだせなかったから、こんなことになっただけなの。和夢が悪いことなんて一つもないのよ。ただ私が臆病だっただけなの。和夢がゲームのシナリオを書きあげて、それを楽しく話している姿を見たら、とてももうゲームに出来ないなんて言えなくて。そのことが切っ掛けで、私達の仲が壊れるのが本当に怖かったの」
「俺たちの仲が壊れる……」
「ええ、そうよ。何度も、何度も口にしようとした。でも残りわずかな学園生活が壊れるかもしれないと思うと、どうしても口にできなかった。全部私が悪いのに、私、私が……」

冴子は俯くと同時に、再び涙をこぼし始める。だがその間も「ごめんなさい、ごめんなさい」と、謝り続けていた。

だが謝らなければいけないのは、冴子だけではない。それは自分が一番よくわかっていた。
和夢はポケットからハンカチを取り出すと、冴子の手に握らせる。

「和夢……？」
「そんなことといったら、俺だって冴子を苦しませ続けたから謝らな

くちゃいけないさ」
「でも和夢は何も悪くないわ」
「いや、俺だって悪いさ。自分のことばっかり考えて、二人のゲームに対する情熱が消えたと勘違いして、ただ恨み続けてた。二人の本当の気持ちなんて理解しようともしないでだ」
「それは違うわ。だって私は話さなかったから――――」
「それでも気付くべきだったんだよ。だってさ」

一度言葉を止める。そして心の中のもやもやが全て消えていくと、にっこりと笑顔を作っていく。

「だってさ、俺たち仲間じゃないか。ただの友達じゃこういかなくてもさ。やっぱり仲間が苦しんでたら、気づくべきだったんだよ」

仲間と言う言葉。その一年越しに口にした言葉を聞いて、冴子は口元を押さえていく。

「和夢、私のこと、仲間って……」
「だってそうだろう。俺たちは友達や親友じゃない。例えゲームを作らなくなったとしても、俺たちは同じものを志した仲間ってことに変わりないんだよ」

和夢がそう言い終えると、澄音の頬に再び涙が流れていく。だがそれは先ほどでの悲しみとは逆に、嬉し涙であった。

「和夢。……ありがとう、ありがとうね。こんな、私を、ゆる、許して、くれて」
「俺のほうこそずっと苦しませてすまなかったな。ほら、とりあえず涙拭いてくれよ。これじゃ俺が泣かせたみたい、いや俺が泣かせたのか」

あっはっは、これは困ったとわざとらしく笑う。そんな和夢の顔を見て、冴子もまた涙を流しながら笑顔を作っていくのだった。

「よかった。決心して話すことができて。これも外海さんに後を押してもらったからかな。きっと和夢なら許してくれるし、それを望んでるってハッキリ言ってくれたから」

「あっ、そういえばいつの間に澄音と会ったんだ。俺が出かけた後か？」

「ううん。和夢が万が一授業をサボってたらって思ったら、家に直接行く勇気がなくてね。喫茶店で電話番号を交換したから、それで電話をしたの」

「ああ、そうか。ようやく納得がいった」

「でも朝に電話した時、深刻そうな声で時間がないから。だから会ってくださいって言ってたけど、あれは何だったんだろう？」

「多分自分がいるうちに、決着を見届けたかったんじゃないか。まったく何て言うか、本当に澄音には世話になりっぱなしだな」

だからこそ今日の録音はしっかりと納得のいくまでやろう。そしてそれがうまくいったら豪華な夕飯を食べて、明日の朝盛大に見送ってやるんだ。

それに澄音にはまだ言いたいことがたくさんある。いくら言葉にしても足りないくらいだけど。それでも時間がある限り彼女に伝えてやりたかった。

そう、その時までは全てがうまくいったと和夢は思っていた。

だからこそ、家の中にもう誰もいないなどと、思うはずもなかったのだ。

第7章「残した物と残された者」Part3

18

「澄音、ただいま。今日の録音さ、冴子のやつも一緒に。……澄音？」

玄関を開け呼びかけてみるが、返事がない。まあそんなことは今までも何回かあったので、気にせず家の中に入っていく。

「おーい、澄音。寝てるのかー」

扉を開け部屋に入るが、そこには誰もいない。だったらトイレにでも行っているのだろうか。再び部屋を出ようとすると、ガチャリと玄関が開かれる。

「なんだ、買い物に行ってたの、えっ？　なんで国吉が？」

そこに立っているのは国吉である。だがどうしたのだろう。いつもの明るい様子がひとかけらも感じられない。

「どうしたんだ国吉。あっ、そうだ。澄音のこと知らないか」

「……すまない。和夢が悲しむのがわかっててもそれでも止めら

れなかった」
「国吉？　どうしたんだ、いったい何を言ってるんだ」
「冴子と仲直りして、それで全部うまくいくと思ったのに、これじゃあ……」

悔しそうに歯を食いしばると、手すりを殴りつけていく。もちろん何が起こったかはわからない。しかしそんな国吉を見れば何かが起こってしまったことだけは理解できてしまう。

「お、おい。澄音に何かあったのか。教えてくれ国吉！」

彼に詰め寄ろうと玄関を飛び出していく。するとこちらから死角になるような位置に、もう一人の人間がいることに気づく。
そのくたびれた灰色のスーツと、細い目つき。自分の記憶の中で、それに当てはまる人間は一人しかいなかった。

「よお兄さんまたあったな。初めっから疑ってたけど、やっぱりあんたが彼女を匿ってたのか」
「あんたは、あの時の……」
「おっ、そうだ。名前をまだ言ってなかったな。俺は金子っていうんだ。しがない興信所の人間、まあ探偵みたいなもんだと思ってくれ」

スッと差し出される名刺。それを握り潰すと、和夢は刺すような視線を放つ。

「澄音をどこにやったんだ！」
「そりゃ親元に帰したに決まってるさ。良心のある人間ならそうするのが普通だろう」
「何が良心だ。仕事でやってるだけだろうが！」

「おっ、こりゃ手厳しいね。でもま、確かに言われてみればそうだな」

金子は和夢の怒る様子を、ニヤニヤと嫌らしい笑みで見つめる。

「いやー、それにしても探すのに苦労したぜ。何て言っても、目撃者があまりにも少なくてね。ようやく女子高生二人を捕まえて、この地区に絞り込んだわけだ」

きっとその女子高生とは、ハンバーガショップの二人であろう。自分だって、彼女たちの証言で澄音を救うことができたのだ。

そう頭では冷静な思考をしながら、和夢は金子の胸倉を掴んでいく。

「おい、澄音の家を教えろ。知ってるんだろう！」

「ああ、もちろん知ってるさ。身元が分からないような人間の仕事なんて受けられないからな。おっ、そうだ。あんたに渡さなくちゃいけないものがあったんだ。ほれ」

金子はスーツからやたら分厚い封筒を取り出す。

「何だこれは……」

「あちらの親御さんいわく、社会科見学代らしいな。中に百万入ってるはずだから確かめといてくれ。ちょろまかしたと思われると、信用問題なんでな」

「――ふっ、ふざけるなっ！」

和夢は空いている手で封筒を叩き落とそうとする。だが金子は胸倉をつかんでいる和夢の手を外していくと、先ほどとは逆に和夢の胸倉を握りこんでいく。

「あんたも大学生なんだろう。いい加減大人になろうぜ。それに少しはメリットがあるってわかってたんだろう」
「何だよメリットって、金のこと言ってるのか。いいか、俺は金欲しさに澄音を匿ってたわけじゃない。むしろ彼女は無一文で困ってたぐらいだぞ。それに澄音は金なんてなくても、安物の服でも笑顔になるような庶民的な奴なんだよ！」
「……はぁ？　ああ、うん？」

金子は何を言いたいのか、困惑するような表情をする。

「するっていうと、兄さん。あんたは普通の女を、ただ善意で泊めたって言うのか」
「だからそうだって言ってるだろうが！」

それ以外に何の理由がある。そう続けようとした時、金子の笑い声にそれがかき消される。

「は、はっはっは。あっはっはっはっはっは、そうか、そうか。いや、これはすごいな。そうだよな。若い頃ってのは損得勘定意外でも動けるんだな。あー、こんな青い時代俺にもあったんだろうな」

大笑いしながら、掴まれていた胸倉が離される。金子は持っている封筒を玄関の中に投げ捨てると、無理矢理笑いを止め呼吸を整えていく。

「でもだったら余計にだ。あのお嬢さんのことを思うんなら、その金は受け取っておくんだな」
「何で、どうして澄音のために金を受け取らなくちゃいけないんだ！　そんなことよりも――――」

「ストップ、ストップ。それじゃあ永遠に話しが進まなくなる。まずは俺の仕事の説明を聞いてくれ。それから判断すればいい。きっと、そっちの学生君のように納得してくれるはずだからな」

クイッと指を向けると、国吉のばつ悪そうな表情が見える。もしこの男が澄音を連れていくところを国吉が見ていたのなら、必然的に見逃したと言うことになる。

それはどうしてなのか。確かに聞かないことには話しが進まないのかもしれない。

「……わかった。さっさと説明してくれ」

「その前に中に入っていいか。さすがに外は寒い」

「……好きにしろ」

和夢は金子に背を向けると、そのまま部屋に入っていく。そして歩きながらも、金子は話しを始める。

「人間こうやって地面を歩くだろう。空を飛べないんだから、それが普通だ。でも時として人には避けなければいけない道がある。だがそれは警察や暴力団なんかじゃない」

「……何が言いたいんだ」

「俺が話しに来たのは一つだけだ。なら、わかるだろう」

和夢がカーペットに座ると、金子はその対面に座る。国吉と冴子は邪魔にならないようにと、ベッドに腰を落ち着けていく。

話す準備は整った。それがわかると、金子はニッと頬をゆがめていく。

「つまり外海澄音の親は。父親である外海礼二には誰しもが道を譲

らなくちゃいけないんだ。それが表であろうと裏であろうと、絶対に逆らっちゃいけない人間なんだからな」

第7章「残した物と残された者」Part4

／14

「はい、もしもし。――――わかりました」

澄音は部屋に備え付けてある電話を置く。父親からの要件はただ一つ、リビングにこいということである。

それくらい電話などせずに、直接声をかければいいのに。きっと普通ならそんなことを思うのだろう。

しかしこの広い家では、億劫になるのも頷ける。

「……きっと怒られるんだろうな」

だがそれは覚悟の上だ。それでも成し遂げたいことがあったからこそ、家出をしたのだから。

部屋のドアを開けると、長い廊下を歩いていく。自分の住んでいる家は何も豪邸といった、馬鹿みたいに大きな家ではない。

だがそれでも二人で住むには、この家は明らかに広過ぎた。

「……あと一日だったんだけどな。でも、帰るしかなかったんだよね」

長い廊下を歩き、階段を下るなか、今朝起きたことを思い出していく。

和夢が出かけた後にすぐに現れた興信所の男。

その途中にかかってきて大場さんからの電話。

そして僅かにもらえた、最後の時間。

「でも私がいると思ってるうちに大場さんと仲直りできそうでよかった。あの三人が仲違いをしたままなんて、あまりにも不幸だしね」

大場さんの家庭事情は電話で全て聞いた。年下の、しかも一度しか会ったことない人間に普通はそんな重大なことは話さないだろう。

だけど、大場さんは本気で和夢と仲直りしたかったのだ。だからこそ、自分は助言をした。

「まあ助言っていっても。和夢なら理由を話せばちゃんと許してくれるって言っただけだけどね」

そして和夢は優しい人だから。きっと大場さんの身の上の話を聞いて、許してあげたのだろう。これで三人は大学生活最後の思い出を作れるはずだ。

「あーあ、思い出と言えば今日は楽しい夜になるはずだったんだけどなー」

お昼を食べる前に歌の録音をして。それで仲直りした最上さんと大場さんを含めてお昼を食べて。皆で楽しく騒いで。それで和夢と

最後の夜を過ごす計画はパアである。

「でも帰らないわけに行かないわよね。あんな条件、ううん、脅しをかけられたら。これ以上……和夢に迷惑はかけられないし」

澄音はリビングの扉の前に立つと、ドアをノックしていく。

「入ってこい」

短くそして低い声がドア越しに聞こえると、扉を開く。そしてそこには白髪頭をオールバックにした人相の悪い男。外海澄音の父親が両手を組んで顔を強張らせていた。

「……」

「何を立ってる。座れ」

「……はい」

言われるがままに対面のソファーに座ると、体重に合わせ沈んでいく感触がいやに懐かしい。

和夢の家はベッドも固かったな。そんなことを思い出していくと、心に少し余裕ができる。

「親元を離れての社会科見学はどうだった」

「……最高だった。あの場所には、私の背中を夢に向かって押してくれる人がいたから」

「突き落とすの間違いじゃないのか。他人の娘の人生をなんだと思ってたのだかな」

「それでも有無言わさず壊していく人よりマシだと思うけどね」

「それは私のことか？」

「それ以外に誰がいると思う」

挑発するような声をあげると、わざとらしくため息をついて見せる。すると礼二は、「確かにな」と声を漏らす。

「私は少し厳しくしすぎたのかもしれないな。最近お前がコソコソ何かをしていると思ったら、ネットワークに何かをあげようとしていた。私の娘が低俗な場に顔を晒そうとしていたかと思うと、居ても立ってもいられなくてな」

「で、でも私が上げようとしてたのはあくまで声だけ。それ以外は上げようとしてなかった。なのに、お父さんは何を言っても聞いてくれないから……」

「すまなかったな。私は頭の固い人間でな。それでいてネットワークの恐ろしさをよく知ってもいるからこそ、滅多なことはさせたくなったんだ。だがお前がいくつかの約束を守るのなら、それも許そうと思う」

「えっ！？　ど、どうして……」

それは予想外の言葉である。あれほど自分の言葉に耳を傾けず、関心の欠片すら示さなかった父親がネットへのアップロードのことを許すと言うのだ。驚くなと言うほうが無理である。

だが耳を疑っている澄音とは違い、礼二は淡々と言葉を続ける。

「正直にいえば私は仕事がある都合上、お前に構ってやることができない。だが束縛しすぎて今回のようなことがあると困るからな」

「……それは世間体のため？」

「そうだな。……ふふっ、お前にそう思われてしまうほど、私は嫌われているようだな。だがお前がどう思おうと構わない。私が出す条件は二つだ」

礼二は指を一本立てる。

「パソコンの中のウイルスソフトはこちらが指定するものを使え。絶対に個人情報が割れないような、特注を用意してやる」
「……うん」

コクンと頷く澄音。だが問題はここからだろう。こんなに簡単な条件がニ回も続くわけがないと思う澄音。
礼二はもう一本指を立てていく。

「そしてもう一つの条件は、絶対に声以外のものをネットワークに乗せないこと。お前の顔、体、住所や部屋など一切だ。それを守れるか」
「えっ。……う、うん。守る、必ず守る」
「ならいいだろう。壊したパソコンの替えはもう用意してある。今度からはそれを使えばいい」
「……うんっ！」

何と言うことだろうか。まさか父親がこんなにもあっさり自分の趣味を許してくれるとは思っていなかった。

きっと自分が家出をしたことが相当堪えたのだろう。新しくできた環境、これだけでも十分なほどの成果である。

ありがとうお父さん。そう感謝の気持ちを込めながら、抱きつこうと立ち上がろうとする澄音。
だが礼二はそんな澄音を冷たい視線で睨みつける。

「さて、ここからが本題だな。――これからはお前が絶対に行くのを嫌がっていた、所謂金持ち揃いの学校に通ってもらう。送り迎えをつけ、何時になろうと絶対に乗って帰ってきてもらうぞ」

「えっ、でも今の学校は……」
「もちろん転校だ。まあ時期としてはちょうどいいし、問題はないだろう」
「問題ないってどういうことよ。まだ学期途中もいいところじゃない！」
「だがどの学校に入ろうと、中途半端なのは変わらないだろう」

澄音の言葉と礼二の言葉がどうにも噛みあわない。そんな状況に澄音は頭を抱えると、礼二は納得したような顔になる。

「ああ、そうか。澄音には話してなかったが、次の仕事のために北海道に住むことになったんだ。だからどちらにしても転校ということだ」
「な、なによ！　そんな話し今まで一度だって」
「話そうとはした。だがそんな大事な時期に家出をしてたのはお前だ」
「そ、それはそうだけど」

それでもあまりにも突然すぎる。そして何よりそんな遠くに行ってしまったら、もう和夢と会えなくなってしまう。
そんなの絶対に嫌だ。まだちゃんとお別れだってしていないのに。

「だったら、私だけこっちに残る」
「それを許すと思うか。お前は私と一緒に来るんだ。これはさっきのような条件ではない。絶対的な命令だ」
「それだったら私は――――」
「また家出をするというのか。それこそ許すはずがない。それに興信所の男から聞いているはずだろう。これ以上お前が何かをするなら、その時は警察沙汰にするつもりだ。なに、警視庁の上の連中には顔が聞くから、いくらでも動いてくれるさ」

「……でも」
「でもじゃない。お前はまだ学生で未成年なんだ。そんなお前を誘拐し、長期に渡り監禁していたとあっては、その男もただではすまないぞ」
「――かっ、和夢はそんなことしてない！」
「ああ、脅されたあまりにそう言うことしかできなかった。という筋立てだって作ることは出来る。お前が何と言おうと、あの男がお前を泊めていたと言う証言や証拠は揃っているんだ。それがわかっているからこそ、我儘を言うことなく真っ直ぐ帰ってきたのだろう」
「……そうよ。私は、和夢に迷惑をかけたくないから。だから」
「それがわかってるなら、余計な駄々をこねるな。だがその男も運がいいものだ。もし興信所の男が見つけるのがあと一日遅かったら、警察に全国捜査させるつもりだったからな。まあ私とてしても穏便にすんでよかったよ」
「何よ、さっきは世間体なんて気にしないっていってたくせに！」
「私は、お前がどう思おうと構わないと言っただけだ。いや、どう思われようと構わないと言ったほうが正しかったか。とにかく最大の譲歩として、創作なんてくだらない趣味は認めてやったんだからありがたく思え」
「そ、創作はくだらないことなんかじゃない！　お父さんに創作の何がわかるっていうのよ」
「何も分からないな。それに分かりたくもない。同居していた男のように、いい加減な夢ばかり見ていると、現実に置いていかれるぞ」
「――――っ。それ以上、それ以上和夢のことを悪く言わないで！」

立ち上がると、そのまま平手を父親に放つ。だがその手はあっさりと受け止められると、パシンと渇いた音が部屋に響く。
逆に頬を叩かれた澄音は、赤く腫れるそれを抑えながら床に崩れていった。

「あまり手間をかけさせるな。だが話すべきことは、もうこれだけだ。あとは黙って私の言うことを聞けばいい」
「……」
「また家出をしようと思うな。どんな理由であれ、この家からいなくなったと分かれば、次は警察に連絡する。そしてこの十数日の家出騒動を話す必要になるからな」

家出騒動を話す。それは警察に一番に和夢を疑わせると言うことだ。そんなことをさせるわけにはいかない。和夢はこれからの一年が勝負なのだから、必要のない負担などかけたくなかった。
澄音は未だに痛む頬を抑えながら、懇願するような声を上げる。
「……わかりました。お父さんの言うことを聞きます。だから和夢にはもう関わらないで」
「そう、それでいいんだ。――私は仕事があるから会社に戻るぞ。いいか、絶対に馬鹿な真似は考えるな」
「……はい」

消えそうなほど弱々しい声で返事をする澄音。そんな彼女を見て、礼二は満足そうな顔をしてリビングから出ていく。
バタンと扉が閉められると、部屋は静寂に支配されていく。

そしてその直後、リビングは彼女のすすり泣く声だけが聞こえ続けていくのだった。

第7章「残した物と残された者」Part5

19

「まあこれが俺に話せる大体のことだ」
「えっ、おい。ちょっと待てよ。何だよ、それ。澄音の家が金持ちで、いやそれはどうでもいい。明後日には引っ越しするだと……」
「そうだな。まあ金持ちの話しは逆に知らなかったってのが俺の気持ちだ。しかし後者はお嬢ちゃんだって知らないことだ。驚いてもいいぞ」

全ての真実を聞いて、とても平静を保っていられない和夢と違い、あくまで仕事である金子は落ち着いた様子である。

「そんなの子供の意思を無視しすぎてるじゃないか！」
「話しをする前にお嬢ちゃんが家出をしたんだ。しかもすぐに泣いて帰ってくると思ったら、ニ週間以上もだ。そして俺が雇われたのが一週間前だ」
「明日には、澄音は帰るつもりだったんだよ……」
「だからそれもお嬢ちゃんのことを話す時に言ったはずだ。俺が見つけるのがあと一日遅かったら、警察が動いてた。人目につけたくないと興信所に依頼した礼二さんが警察を動かす時は、確実に相手を有罪に持ち込む時だけだ。おっと、お嬢ちゃんが事情を説明すれ

ばとは思うなよ。そういう話しが通じる男じゃないんだ、あの人は」
「だったら、だったら澄音のいる場所を教えろ！」
先ほどのように金子の胸倉を掴んでいく。するとその落ち着いた顔は、冷やかなものになっていく。
「さっきも言ったはずだ。いい加減大人になれってな。もしお前が礼二さんの家に行ったら、それこそ訴える手段はいくらでもあるんだぞ。それにあの人の家には監視カメラがやたらめったら設置されてる」
「だ、だが俺は……」
「兄さんみたいな真っ直ぐな奴を見るのは嫌いじゃない。だがあんたが捕まったら、きっとお嬢ちゃんは悲しむぞ。私と関わってしまったせいだってな」
全てが金子の言うとおりだった。女子高生を二週間以上家に泊まらせていたことは訴えるには充分である。それでも礼二は興信所を雇い、澄音を探し出したのだ。だが警察を動かす気だったことを考えれば、これ以上何かをするなら容赦はしないであろう。
自分の身が危ないのはもちろん恐ろしいことだ。だが子供みたいに駄々をこねて、澄音を困らすことを出来るはずもなかった。
嫌な部分だけ大人な考えになってしまった。そう嫌悪していく。
胸倉を掴んだ手が弱まったことで理解したのだろう。金子はしわになったワイシャツを直しながら、立ち上がっていく。
「それじゃあ俺の仕事はここまでだ。俺はしっかりと話しを伝えたからな。変な気は起こすんじゃねえぞ」

もう用はないとばかりに玄関に向かっていくと、金子は何も言わずに家の中から出ていく。
だが何も言わなかった金子に対し、和夢はもう何も言いたくなかった。
家出をしていた澄音が家に帰る。これはわかることだ。
あと一日待ってくれればというときに、興信所の人間に見つかる。これも運が悪いとは思うが、それでも理解できる。
そして、遠くに引っ越してしまう澄音にもう会うことはできない。それは。それは……。
「……納得、出来るわけねえだろうが」
せっかく二人が分かりあえたのに。二人ともこれからって時に、それを阻まれて納得など出来る筈がない。
とにかく、まだ手はあるはずだと頭を掻いていく。
「おっ、おい、どうした和夢」
「黙ってろ。いま一生懸命考えてるんだ！」
「す、すまない」
自分のことを心配して話しかけてくれたのはわかる。だが時間がないのもわかってほしい。
しかし家の場所も分からなければ、引っ越し先も分からない。なら、自分には何ができる？
「――――そうだっ！」
和夢はポケットから携帯を取り出すと、すぐに電話帳を開く。

「そうだよ。俺とあいつは携帯の番号を交換してた。それに電話すれば……」
「お、おい和夢！！」
「だから黙ってろって言ってるだろう！！」

こんな大事な時になぜ邪魔をするのか。二人の存在が鬱陶しくなると、イライラしながら台所に向かう。
早く、一秒でも早く澄音の声が聞きたかった。和夢は澄音の携帯に電話をかけていく。

――チャーララ、チャーラーラーラーラーラララー。

それと同時に、聞きなれた着信音が部屋に響き渡る。そんなはずはない。どうしてだと部屋に戻ると、見せられたものに愕然とする。

「どうして。どうして国吉が澄音の携帯を持ってるんだよ」
「……金子の奴に渡されたんだ。……もともと俺は、和夢と冴子が仲直り出来ると信じて家に先回りしたんだ。二人の話し合いを見てたら、口を突っ込んじまうと思ってな。そしたら家の前に見慣れない男が立ってて、誰だって聞いたんだ。そしたら外海ちゃんの事情を話されて。それで携帯があると連絡されるからって、データを全て消したこれを和夢に渡してほしいって……」

そう言い終えた瞬間に、国吉は頭を下げていく。

「すまない。俺が無理やりにでも外海ちゃんを連れて逃げてれば、こんなことには」
「――あんたのせいじゃないわよ！」

冴子は国吉を庇うように前に立つと、彼同様に頭を下げていく。
「私が、私が和夢と仲直りしたいって、呼び出さなければ。そしたら、少しでも……」
「違う、それは俺が――――」
「どっちも違う！　二人は、二人は何も悪くない……」
二人の肩を掴むと、頭を上げさせる。だがその顔はこの瞬間も、負い目を感じている。それを見た自分は、さらに申し訳ない気分になっていく。
だがどうあっても二人は悪くないのだ。それは考えなくてもわかる。
「まず第一に国吉は澄音の事情を聞いたんだよな。それなら連れて逃げれるはずがない。家の位置が割れて、さらに警察が動き出すかもしれないんだ。俺のことを考えて、動けなかったんだろう」
「それは、その……」
「何も言えないってことは、そういうことだよ。それに冴子。確か朝澄音の電話をしたって言ったよな。その時に澄音はもう時間がないって言ってたって、さっき話したよな」
「……うん」
「ということは、多分その時点で金子に見つかってたんだ。きっと自分が家に帰ると分かれば、俺が冴子と話し合わず帰ると分かってたんだ。だから、直接は言わなかったんだろう。だから二人ともいいんだ。いつかは、こうなるはずだったんだから……」
「和夢……」
「すまない。今は少し一人にしてくれ」
「で、でもよ」
「頼む……」

先ほどとは逆に頭を下げていく和夢。懇願しているはずなのに、名状し難い雰囲気に二人は何も言えなくなる。

「わかった。だけどよ、もし何か出来ることがあったら絶対に言ってくれよ！」

「私達に何ができるかわからないけど。それでも和夢の役に立ちたいから」

「ああ、ありがとうな二人共」

顔を上げ弱々しい笑顔を見せると、二人の動きが止まる。だが自分たちがいては、和夢に気を遣わせてしまうことは明らかだと、玄関に向かっていく。

その最中、二人は何度も和夢のほうに振り返る。だがベッドに座り俯いていく彼を見ると、無力を感じながらも家から出ていくのだった。

第7章「残した物と残された者」Part6

20

果たして、何時間こうしていただろうか。
ふと時計を見ると、時刻は夜七時。軽く五時間ほどは、この体勢だったようだ。

今の時間を頭が認識したからか、お腹が鳴りだす。

「こんな時にも人間ってのは空腹を感じるんだな。これじゃ感傷にも浸れない……」

だったらいっそのこと寝てしまうかと思った。だが全てを忘れ、夢の中に逃げてしまうのは後ろ暗く感じ、結局夕飯を用意することにした。

冷蔵庫の中を開けてみるが、中身は何もない。今日は夕飯を食べに行くはずだったことを思い出すと、カップうどんを取り出していく。

そこにある緑と赤のパッケージ。だが緑を好んで食べる女の子はもうここにはいない。

まるで彼女の存在を忘れてしまいたいかのように、和夢はあと一個しかない緑の蓋を開けていく。

お湯を入れて五分は、ボーっとしているうちにすぐにやってくる。後のせのてんぷらを汁に浸し口に持っていくと、サクッとした感触に驚く。

「なんだ、こっちも本当においしかったんだな」

結局は食わず嫌いだったのだと、今更になって気付く。これなら、お揚げとてんぷらを半々にしたらどっちの味も楽しめたのだろう。

「うちって、こんなに静かだったんだな」

この三年間。ずっと当たり前のように一人で過ごしてきたはずなのに。何の音も聞こえない室内が、苦痛でしょうがない。

テレビを見ようと思ったが、中途半端な時間だったためか、内容が理解できない。

いや、理解しようとしてないだろう。こんな真っ白な頭で、何かを考えようとするのが無理な話なのだ。

「だけど、そんな頭でも考えられることはある。逆にそれを考えているから、何も考えられないんだ」

いつか澄音がいなくなることはわかっていたはずだ。だからこの別れは必然である。

だったら、どうして自分はここまでショックを受けているのか。その答えも、数時間前には出ていた。

「結局俺は、自分自身のことしか見てなかったんだ。辛いからと言って愚痴を聞いてもらい、夢が叶わなかったと言って後押ししてもらい。物語を書くことの楽しさだって、思い出させてもらった」

結局は自分のことで手いっぱいだったのだ。きっと事情を詳しく聞けば彼女は話してくれたはずだ。

家のこと、学校のこと、そして今自分が置かれている立場のことを。なのに自分は目先のことばかりに気を取られ、結局何一つわかってあげようとしなかった。

「俺は、澄音に何を残してやれたんだ……」

きっと何も残してはやれなかったのだろう。本当は、今日彼女にその唯一を残してあげるはずだったのに。

結局マイクも無駄になってしまった。それに書いた歌詞も。

和夢はパソコン机に置かれている二つを見て、深いため息をつく。だがその時だ、彼がその光景を違和感を感じたのは。

「……何で、マイクのコードがパソコンについてるんだ？」

ふと、立ち上がって机の上を見ていく。すると、先ほど感じた違和感は、より明確なものに変わる。

「ノートが千切られてる。どうしてだ」

そんな疑問を自らにぶつけることがまず間違っている。このページを誰が欲しがる？　国吉か、冴子か、金子のやつか。そんなわけはない。

だったらこれを持って言ったのは、一人しかいない。そして、マイクのコードがついているということは。

ハッとある確信めいた可能性が頭をよぎる。和夢はすぐにパソコンの電源を入れると、デスクトップを表示させていく。

それはいつも通りの見慣れた画面である。だけど違うことがあるはずだ。左側に固まっているアイコンを順に見ていくと、その最後に見慣れないファイルがぽつんと置かれていた。

拡張子は『ＭＰ３』つまり音楽ファイルだ。だとしたら、もしかしたらこれは。

そのファイルを再生すると、そこからは聞きなれた声が、歌詞が流れ出していく。

「……そうか、澄音。だったら」

先ほどまで真っ白だった頭の中に、急に色が戻り始める。

和夢は彼女の残したそれを全て聞き終えると、すぐに携帯電話を取り出していく。

澄音に残された時間が明日までしかないと言うのなら、きっと出来ることは少ない。

それでも彼女に今ある胸の内を伝えたかった。だからこそ、力を借りなければいけない。

連絡を取るべきは三人。まずは信頼している二人の電話番号を表示すると、すぐに電話をかけていくのだった。

第8章「別れた道と歩きだした二人」part1

／15

「そんなこと言われるまでもない！」

澄音は礼二を睨みつけると、わざと足音を立てて部屋に向かっていく。ついでに扉を力いっぱい閉めると、ベッドに飛び込んでいった。

「あいつなんかが来るから、私は帰る羽目になったんだからね！」

先ほど澄音が伝えられたこと。それは仕事の最終経過を伝えに金子が家に来るので、しばらく部屋にいろと言うことである。

「言われるまでもない！」

苛立ちながらもう一度言葉にすると、あの憎たらしい顔が思い出される。

「あの人が来なかったらちゃんと和夢とお別れ出来てたのに。どうしてあと一日待てなかったのよ」

自分と和夢の間を引き裂いた男だ。いいイメージを持てるわけが

ない。だがそれでも和夢の恩人と言うことには変わりない。
彼が自分を発見するのがあと一日遅かったら、その時は警察沙汰になっていたのだからそれはそうだろう。

しかしこの怒りは理屈ではないのだ。ぶつけることの出来ない悔しさをどうしたらいいかと、ベッドを叩いていく。

――――ガタン。

部屋の中で何かが動く音が聞こえる。そちらに目を向けると、音を上げたのは廃棄予定のパソコンだった。

「……普通なら、こんな勿体ないことしたら罰が当たりそう」

どうせすることはないのだと、パソコンに近づく。そして先ほど落ちたマウスを拾うと、画面の前に座る。

「あの時は床に叩きつけられたショックで気付かなかったけど、まだまだ使えるのよね」

しかしこれはあくまで廃棄予定のパソコンだ。どうせまだ使えるからと言っても、みすぼらしいと一蹴されるのが関の山だろう。
父親は自分に厳しいと同時に、誰よりも自分に甘かった。だから欲しいものは何でも買ってくれたし、最終的にはクレジットカードを一枚渡される始末だ。

外には学校の行き帰り以外は出さしてくれない。だからその分買いたいものの制限はつけたくなかったのだろう。
そんな生活に嫌気がさして、母親は離婚してしまったのだ。ただお金目当てで強欲な人間なら楽だったのだろうが、やはり人間は愛

がなければ生きられないようである。

「愛がなくちゃ生きられないか……」

果たして自分はどうだろうか。いや、これからどう思っていくのだろうか。

せっかく和夢と結ばれることができ、これからと言う時にこの状況だ。本当は今すぐにでも飛び出していきたい。そしてそのまま二人でどこか遠くに逃げたかった。

だがそれが不可能なことくらいわかっている。結局逃げたとしても、父親が本気を出せば見つけることなど容易いだろう。それに和夢はこれからの一年、夢に向かって走り続けるのだ。その足枷になることだけは絶対にしたくない。

「私ったら勝手だな。和夢には夢を頑張るように言ったくせに、自分は何もしようとしないんだから。……ごめん和夢、でももうどうしたらいいかわからないの」

パソコンの前から立ち上がると、再びベッドに向かう。

「お夕飯もいいや。どうせお腹すいてないし」

再びベッドに体を沈めていく。

――――キンコーン。

タイミングを見計らったかのように、鳴りだすチャイム。きっと興信所の男が来たのだろう。

「ああ、やだやだ。もう寝よう」

目を閉じると、視界を遮っていく。すると見えない分聴覚が集中したのか、ガサガサと何かが動く音が聞こえる。男が敷地内に入ったのだろう。

砂利道をわざわざ踏み外していくなど、よほど地に足がついてないようだ。

――――ガサガサガサ。

さらに物音が大きくなる。煩い。あまりにも煩いと、文句の一つも言ってやりたくなる。

――――コツ、コツ。

終いには窓に小石か何かをぶつける始末だ。いったい何がしたいのか見当も。……見当も？

「……えっ！」

眠りを求めていた体が一気に覚醒する。そして考える、興信所にとってそれをする理由を。

だがそんな理由あるはずもない。父親と会うために、木を上りこの部屋からリビングに行く必要などないのだから。

澄音はすぐにベランダに向かって走る。

そこにいる人が興信所の男じゃないとしたら。こんなことをする理由がある人物だとしたら。それは自分が誰よりも会いたいと願っている人なのだから。

窓を開けると、すぐにベランダに飛び出す。肌寒さが体を包み込むが、それでも目の前の彼を見たら心の中は温かくなっていく。

「――何してるのよ和夢」

「ロミオとジュリエットごっこ。ってわけじゃないぞ」

ベランダに伸びる木の上には和夢がいた。思い詰めて幻覚を見ているのかとも初めは疑った。だが彼は右手を差し出すと、そっと頬に触れてくれる。そしてこれが現実だと実感する。

だが嬉しいと思う半面、どうしたらいいのかと焦りが生まれる。

「ど、どうしよう和夢。私の家にはたくさんの防犯カメラがあって、もしそれが見つかっちゃったら」

「あっ、それは大丈夫だ。まあどう大丈夫かは、説明してるのがもったいないから、とりあえずパスな。時間制限がやばくてな。だからさ――」

頬に触れていた手を離すと、彼は上着から平たいケースを取り出す。

「一応澄音に言いたいことや伝えたいことは、ここに全部入れたからさ。暇が出来た時に開いてみてくれ」

渡されたディスクケースにはCDが入っているようだ。これが何を意味するかは分からない。だがこのCDよりも、今は和夢と話をしたかった。

「か、和夢。私、その……」

話したいことなど山ほどある。もう一度会うことができたら。そ

う考えいろいろなことを考えたはずなのに、言葉に詰まってしまう。
だが何よりも伝えなければいけない言葉は口に出すことができた。
「和夢、これから私は遠くに引っ越しちゃうの。で、でも和夢の連絡先は分かってるし、また隙をついて遊びに行くね」
「……いや、その必要はない。澄音は俺に会いに来なくてもいい。そして俺からも澄音には会いに行かない」

グサリと言葉の刃が心に突き刺さる。どうしてこんなことを言うのか理解できなかった。

「そ、そうよね。私の家って、面倒事ばかりだし。付き合ったって言っても、たった一日の出来ごとだったし」
「――違う！　そういうことを言ってるんじゃないんだ！！　とっと」

大声を上げると、しまったと口を押さえていく。そして落ち着いてもう一度言葉にしていく。

「そういうことじゃないんだ。例え一日しか交際期間がなかったとしても、俺は澄音を愛してる。それは変わらない」
「でも、もう会いに行かないって」
「それは俺たち二人のことを思ってだ。きっと引っ越した後に無断で家を抜けだしたら、今度こそ問題になる。確かに俺が澄音の地元に行けば、少しは時間ができるかもしれない。でもそれはほんのわずかな時間でしかないと思うんだ。だから俺、これから一生懸命頑張ろうと思うんだ。今までよりも、ずっと、ずっと。澄音をしっかりと迎えに行けるように」
「だけど、それでも私は――――」

――ドンドンドンッ！

『澄音、少し話しがある。下に降りてきなさい！！』

扉が叩かれる音と礼二の声が部屋に響く。このままでは和夢のことがバレてしまう。

その瞬間、彼の手が再び頬に触れていく。

「もう時間みたいだな。それじゃあ最後にお約束を残していくぞ」

「――――えっ」

伸ばされた手に澄音は引き寄せられていく。和夢は片方の手で木をしっかり握りしめると、顔を近づけていく。

そして二人の目が互いだけを映し出すと、その瞬間唇を重ねていった。

それはキスをしたのかしないのか分からないほどの、ほんの一瞬の出来事。だが和夢は心の底から満足そうな顔をしていた。

「物語上、キスっていうのは大体呪いを解くものだ。だけど、俺はこのキスにより澄音に呪いをかけたつもりだ」

「和夢、何を……」

「もし俺のことをずっと好きでいてくれるなら、今の呪いは大変なものになる。目をそらすことも出来た様々な苦難に真正面から立ち向かわなくちゃならなくなる」

「和夢、和夢――――！」

「それじゃあまたな澄音。俺、頑張るから。だから澄音も――――」

『澄音、開けるぞ！！』

怒声と共に開かれる扉。礼二は目の前の光景を見ると、さらに叫び声を上げる。

「何をしてるんだ！」

こんな真冬に窓を全開にし、ベランダに出ている澄音は明らかに異常である。だが彼女は渇いた笑いを浮かべると、遠い目をして見せる。

「……ここから飛び出していけば、この家から逃げられるかなって思ってたの」

「何を馬鹿なことを。いいか、今度無断で抜けだしたら、真っ先にあの男を疑いにかかるからな。あと、何かよくわからないが興信所の男がお前のことを呼んでいるのでな。リビングに来てくれ」

「……はい」

澄音は一度木のほうを見ていく。だがあまりジロジロ見て、和夢が見つかってしまったら元も子もない。

結局またさよならの言葉が言えなかったな。

澄音はベランダのドアを閉めると、礼二に隠すようにディスクケースを背中に隠していく。

そして途中でトイレに行くと、彼の元から離れると、バレない様に部屋の布団の下にケースを隠していくのだった。

第8章「別れた道と歩きだした二人」part2

21

「はぁ、本当に時間ぴったりだったな」

先ほどまで緊張のあまり高鳴っていた心音を徐々に落ち着かせていく。そして思った以上に時間を費やしたのだろう。待ち合わせの人物がこちらにやってくる。

「おう、ちゃんとバックレずに待ってたみたいだな」

「家が割れてるのにそんな詐欺まがいなことするか。……でも、本当に助かった」

澄音にあのディスクを渡すことと、言葉を交わすことが出来て心の底からよかったと頭を下げる。

そんな和夢を見て、興信所の金子はスッと手を出すのだった。

「あくまで仕事だからな。礼を言われることはないさ」

「……それでも感謝はしたりないぐらいなんだよ」

和夢は内ポケットから分厚い封筒を取り出す。それは渡されたま

ま手つかずの百万である。
金子はバシッとそれを奪い取ると、中身を確認していく。
「全くたかが五分話すだけで百万とは、お前いつか破産するぞ」
「いいんだよ。俺には百万分の価値があったんだ。それに澄音の家は防犯カメラがすごくて、普通じゃ入れない。これはあんたがいなかったら、どうにもならなかったことだ」
「まあ確かに苦労はしたな。俺が最終経過を報告する時に、防犯カメラを切っておいてくれなんて。それらしい理由を考えるのも、話すのも冷や汗ものだったぜ」
「だけど終わってから言うのもあれだが、よく俺の仕事を受けてくれたな。澄音の父親って敵に回すと怖いんだろう」
「そりゃおっかねえさ。おっかなすぎて、初めは断る気満々だったぜ」
金子は内ポケットから煙草を取り出すと、それに火をつけていく。
「だけどどっかの馬鹿が馬鹿みたいに馬鹿らしいことを依頼してくるもんだからな。こういう青くさい人間を相手にするのも、カンフル剤になると思ったんだ」
「じゃあ俺は運がよかったんだな」
「ああ、兄さんは強運だよ。その強運ついでに、受け取れ」
ほれと、手に持っている封筒を投げていくと、反射的に受け取ってしまう。
「なっ、どうしてだ。これは仕事の代金として渡したはずだ」
「はっ、仕事の代金ならちゃんといただいてるさ」
金子はそう言って、指につまんだ一万円札を見せる。

「これだけあれば、安い店で安い酒をたらふく飲めるってもんだ」
「だけどそれじゃあ話が」
違うじゃないか。そう言葉にしようとしたが、それは金子の言葉に押し切られていく。
「いいか一つ言っておくぞ。俺は何もお前の仕事を受けたわけじゃない。何せ俺は礼二さんを敵に回したくないからな。だから今回のことに俺は何も関与してない。俺がたまたま経過報告に行って、その隙をついてお前が侵入しただけだ」
「でも、それで本当にいいのか？」
「良いも悪いもそれが全てだ。――それによ、兄さんが目指す道っていうのは一筋縄じゃいかないんだろう。だったらその金は大事にしておけ。金ってのはあって困るもんじゃないからな」
金子は煙草を口に銜えると、ハァァァとため息をつくように煙を吐いていく。
「あっ、それじゃああれだ。もし兄さんが目指す道で成功したら、何かレアな商品でもサイン入りで送ってくれや。オークションにかけて、せいぜい稼がせてもらうぜ」
まあいつになるかわからんがな。と皮肉めいた笑いを浮かべる。だがそんな金子を、和夢は真っ直ぐ見詰めていく。
「……必ず。必ず送らせてもらいます」
「ああ、期待してるぞ」
皮肉めいた笑い顔が、微笑に変わる。金子は再び煙草を銜えると、

空に向かい煙を吐いていく。

「もう俺に用なんてないだろう。早く行きな」

「だがあんたには相当世話になったし――」

「だから俺は俺のすることをしただけで、何もしちゃいねえよ。それに兄さんの帰りを待ってるお仲間がいるんだろう。早く成功報告でもしてやれ」

シッシと蚊でも追い払うかのように手を動かす。きっと金子は優しさと言うものを、こういう不器用な形でしか出せないのだろう。

和夢は感謝の意を込めて頭を下げる。

「本当にありがとうございました」

その言葉に彼は何も答えてはくれなかった。だが小さく手を振る姿を確認すると、そのまま背を向け和夢は走り出していくのだった。

和夢はすぐ近くのファミレスに向かうと、そのまま一つのテーブルに向かっていく。

そこには先客である国吉と冴子が待っていた。

「二人とも、本当にありがとうな。無事にうまくいった」

席に座ると、目の下に深い隈を作った二人に話しかける。

「ううん。むしろ私達に頼ってくれて嬉しかったわよ」
「そうだぜ。こっちのせいでゲームは出来なかったけど、それでも大学生活の締めくくりとして、三人で作品を作れたことだしな」

きっと二人は寝ようと思えば今すぐにでも眠れるのだろう。だがそれでも和夢の帰りを待ち、そして彼の成功を聞いて祝杯を上げようという気持ちのほうが強かったのだ。

そんな自分たちが作ったものだからこそ、絶対に澄音の心には届くはずだ。彼女がいつそのCDを見てくれるかは分からない。だが見てくれれば、またいつか澄音と会えるだろうと。

和夢は、その可能性を疑うことはしなかった。

第8章「別れた道と歩きだした二人」ｐａｒｔ3

一言、二言、金子と会話をすると、澄音はすぐに部屋に戻っていた。

今日はもう気分が悪いから寝ることにすると父親には言ってある。ようやく一人になると、彼女はすぐにパソコンの前に座る。

手には先ほど受け取ったＣＤが一枚。いったい和夢は何を持ってきたのだろうか。

画面は少しひび割れていたが、それでも起動に問題はないようで、見慣れたデスクトップが表示される。

「……和夢」

一度だけギュッとＣＤを握りしめると、それをドライブの中に入れる。

「あれ、これは何だろう」

ＣＤの中に入っているデータは、見たことのないものである。音楽データでもテキストデータでもない。

見慣れないフォルダが何種類かある。そして一番目を引いたのは、青色のアイコンである。

「これをクリックすればいいのかな？」

言葉にした通り、『これをクリック』と名前がつけられているアイコンをダブルクリックしていく。

すると画面が表示されるとともに、ＢＧＭが流れ出していく。

「これは、いったい……？」

動画のようなものかと画面をじっと見つめる。だが画面は一向に動くことはない。

「……もしかしてこれって」

画面をジッと見つめると、『スタート』と書かれた文字を見つける。それをクリックすると、再び画面が切り替わっていく。

映し出されたのは駅のホーム。もう夜なのか景色は暗かった。

『ちっ、何やってるんだかな』

ゲームの中の登場人物は、甘いコーヒーを買おうとして、間違えて微糖のコーヒーを買ってしまう。

そしてベンチを探すと、そこに座っている一人の女の子がいたようだ。

画面には背景しか表示されていないが、それでもベンチがアップになるとそこに移動したことがわかった。

『間違ってホットを二本買ったんだけど、飲むか？』

『……甘いやつなら飲む』

人から飲み物を貰っているのに、何て我儘をいうキャラクターだろうか。そしてこともあろうに、初対面の男の家についていってしまったではないか。

「でも、これって……」

澄音は気になるままにクリックをしていく。

『えっ？　そろそろいいかってどういうこと？？』
『どういうこともなにも、俺とお前はもう何も関係ない。そろそろ出かけるから、家を出る準備をしてくれ』
『だ、だって報酬は？』
『報酬は一宿一飯だけだろう。約束通り朝ご飯は用意したんだ。家から出ていってくれ』

用が終わるとすぐに追い出そうとする男。同情も情けもないことに、怒りだす女。
そしてこの話がこれからどうなるか澄音は知っている。それは彼女が。いや、彼女たちが一緒に歩んだ道なのだから。

物語はイベントを切り取ったように次々と進んでいく。不良に襲われ、二人の生活が始まり、そして男は女に再び愚痴を話し、そして女は歌を作ることをお願いする。

『な、なあ、今一瞬でわからなかったから、も、もう一度キスしないか』

『何よ、私には手を出さないんじゃないの』
『て、手は出さないからさ。だからその変わり口を出すと言うか……』
『なに小学生みたいな屁理屈こねてるのよ。……こういうときはいちいち聞いたりしないで。はっ、恥ずかしいんだから』

そして二人の想いが繋がると、互いに唇を求めていく。この時が二人にとって最高に幸せな瞬間であり、そして。
この十五分間。まるで急かされるようにクリックをしていた指が初めて止まる。それはこれから何が起こるかを澄音が一番よく知っているから。
あんな辛い決断を思い出したくなかったのだ。

「それでも、和夢はこのなかに伝えたいことを入れたって言った。だから私は……」
マウスを握る手に力がこもる。そして決死の思いでクリックをしていく。

『私のこと、仲間って……』
『だってそうだろう。俺たちは友達や親友じゃない。例えゲームを作らなくなったとしても、俺たちは同じものを志した仲間ってことに変わりないんだよ』

この様子を見る分には、二人はちゃんと仲直りができたのだろう。自分の中にあった心残りが、スッと解消されていく。

そして歌の録音をしようと、意気揚々と自宅に向かう男と女友達。だが玄関を開いたときに、何かの異変に気づく。

いくら女の名前を呼んでも彼女は答えてくれないのだ。だがそれは当たり前だ。この時点で、その女の子は――――。

『よっ、邪魔してるぜー』

すると陽気な声を上げ男友達が登場する。

『おかえり。ちょっと話しこんでて声が聞こえなかったの』

まるで何事もなかったかのように、現れる女。そこにいるはずのない彼女が、ここにはしっかりと存在していたのだ。

四人は部屋の中でぎゅうぎゅうになりながらも、楽しそうに会話を交わし、ある提案をする。

『そうだ。今日はこいつのお別れ会でひとつ作品を作ろうと思ってるんだ。悪いけど二人とも力を貸してくれ』

『悪いことないわよ。むしろ私達を頼ってくれて嬉しいわ』

『そうだぜ。こっちのせいでゲームは出来なかったけど、それでも大学生活の締めくくりとして、四人で作品を作れるんだしな』

親しげに打ち合わせをしていく四人。だがまずは録音をしようと、

女はマイクを握っていく。

「……ああ。本当は、こんな未来もあったのかな」

画面越しにいる自分は、何の後悔もなく、何の憂いもなく、好きな歌を一生懸命練習している。

きっとこれは和夢が望んだ現実であり、自分が望んだ未来でもあるのだろう。

「でも私は今ここにいる。親のいいなりになるだけで、私一人じゃ何もできなくて……」

カチリとマウスをクリックする。すると画面が暗転し、マウスの操作を受け付けなくなる。

そしてずっと聞いてきた聞き覚えがあまりない声が流れ始めていく。

『あの夜　二人は出会った』

「えっ、この声は私の……」

そこから流れる声は、確かに自分の声だった。きっと和夢のパソコンに残した歌を取りこんだのだろう。

だがもちろんそれだけではなかった。確かに現実の自分は、歌を残しただけだ。だが画面越しの自分が歩んだ未来は、違う道だったのだ。

暗転から画面が切り替わると、そこに映し出されたのは男と女の絵。寄り添いあう二人の顔は、言葉通り絵に描いたような幸せを表

していた。

「この温かい絵はどこかで。そうよ、確かゲームの企画書に描かれてた絵と感じが似てる。じゃあこの絵は大場さんが」

驚きながらも、次に動かそうとマウスをクリックする。だが未だにマウスは命令を聞かない。その代わりに、歌に合わせて、文章が流れていくのだった。

「それじゃあこのプログラムは最上さんが」

そしてこの二人を率いてゲームを作ったのは。自分の家出騒動を知っており、胸の内を知っている人間など一人しかいない。

この物語を作ったのはもちろん和夢だろう。

『二人寄り添って歩きたい　これから続く長い道のりを』

まさか四人の合作になるとは、きっと画面越しの自分以外思ってもみなかっただろう。

「ふっ、ふふ、ほんとリズムも何もない歌よね。これでお父さんを説得しようと思ってたなんてね」

冴子の綺麗な絵。国吉のスクリプト技術。そして和夢の文章力。

和夢が二人と和解した時間を考えると、きっとこの作品は一日ほどで作られたのだろう。

こんなに技術がある人とでも、何かしらの理由があればそれを諦めなければいけない。改めて思い知らされる自分の努力不足。そし

て生まれながら変えることの出来ない家庭環境。

きっとこんな自分が夢を目指すということは、本当におこがましいことなのだろう。それでも夢を目指した懸け橋として、一つの作品が出来たのだ。

「だったら、それでいいのかな……」

心の中につっかえていたものが、外れていく気がする。これでもう後悔など何もない。この作品を宝物に生きていこうと心を決めることすらできた。

だがこの作品は、まだ終わりを見せなかった。

『なあ、澄音。正直さ、お前に言いたいことはいくらでもあるんだ』

ゲームから流れる声は、自分の声よりも聞きなれた声である。文字も絵もそこから消えてしまったけど、それは静かに流れ続けていく。

『会いたいって思いも伝えたいし、好きだって思いもいくらだって伝えたい。何せ、ちゃんと別れも言えなかったからな。そう思うのが普通だろう』

「うん、そうだよね。ごめんね和夢……」

すでに録音された声だろうと関係ないとモニターに話しかけていく。だが和夢は澄音が何と言うかまるで分かっているかのように、

会話を続ける。

『でも俺はこんな別れでよかったと思うんだ。もやもやが残ったこんな別れでさ』

「どうして、そんなお別れでいいはずがないじゃない。何がよかったっていうの！」

『だってさ。もしこのゲームみたいに澄音の歌が完成してたらさ。きっとお前は夢を諦めて、この歌だけで満足すると思うんだ』

今の心境をズバリ言い当てられる。すると和夢は少し困ったように声を出す。

『きっと今の澄音はゲームが完成した時の俺なんだ。今現在自分の出来ることをすべて出し切って、それで夢に限りをつけようとする。でも俺が小説家を目指す理由を話した時に、どんな切っ掛けであろうと、夢に向かっていく姿が羨ましいって澄音は言ったよな。それを教えてくれた澄音に夢を諦めて欲しくないんだ。だからこそ俺は呪いを残していったんだ』

呪いと言われ、ベランダ越しにされたキスを思い出す。彼は自分のことを好きでいてくれるなら、きっとこれから辛い思いをすると言っていた。

『今の俺にはまだ澄音を養っていくことは出来ない。そして学生である澄音は親の加護からむやみやたらに出ることも出来ないはずだ。だから俺は一生懸命努力して、それで夢を掴もうと思う。もちろんそれで成功すれば、土下座してでも澄音に会いに行こうとは思うけどさ。――でもさ、俺はやっぱり澄音にも夢を叶えて欲しいんだ。たとえその道のりが辛くとも、それでも夢を諦めて欲しくないんだ』

「夢を、諦めない……」

『それに俺たち二人がまた会うんだったら、きっと互いの夢を叶えたほうが堂々と早く会えると思うんだ。まっ、それは理想論だけど、絶対に叶わない願いってわけでもないしな。だから、また近いうちに会おうぜ、澄音』

一方的な別れを告げられると、暗転した画面はゆっくりとタイトル画面に戻っていく。

澄音はしばらくその場から動くことができなかった。まずは何を考えるべきなのか。何をどうするべきなのかと、頭を抱えていく。

「全く、家庭事情もそんなに知らないはずなのに。勝手なこと言うわね」

だがその勝手な言葉は、何よりも力を与えてくれた。

「そうよ。私の夢はこの声で仕事をしていくこと。一つの作品を作ったからって、満足するような夢じゃない。それに――――」

澄音はパソコンの前から立ち上がると、弾かれるように部屋の外に出ていく。

「それに私だってまた和夢と会いたい。駆け落ちすることも、抜け出すこともなく。何の気がかりもなしに、二人で一緒にいたい」

だったらどうする。そこまで口にすると、やることなど一つしかなかった。

「お父さんっ！」

まるで蹴破るようにリビングのドアを開けると、礼二は目を三角

にしこちらを睨みつける。

「何だ騒々しい。何か用でもあるのか？」

そちらから聞いてくれるのなら、ちょうどいい。澄音はスゥーっと息を吸い込むと、出せる限りの叫び声をあげていく。

「私は趣味ではなく、本気で声のお仕事を目指していきますっ！！」

言ってやったと、ほくそ笑む澄音。

娘の突然の奇行を目の当たりにした礼二は、面食らったような表情をし、その場に固まってしまうのだった。

エピローグ

あの日から随分と時間が流れた気がする。

やはり世の中甘くはないもので、正直に言うと大学卒業までに成果を上げることは出来なかった。

そして就職も決まっておらず、両親とは随分ともめたものだ。

だがそれでも夢をあきらめることはなく。バイトをしながら、小説家を目指していった。

この時に役に立ったのは、ゲーム制作用に貯め込んだ金と、あの日金子に渡された九十九万だった。

そのおかげでバイトの時間も幾分か削ることも出来た。

そして俺が成功したのは大学を卒業して二年後のことである。時間がかかったようにも捉えられるが、正直最速のデビューであったと思える。

それからさらに三年。まだまだうだつの上がらない小説家であるが、そんな自分に嬉しい誘いがやってきた。

出版社の会議室。和夢は、今か今かとその時を待ち続ける。すると集合時間の三十分以上前、一人の女性が会議室に入ってくる。

和夢はその姿を見ると、席から立ち上がる。

「どうも、中野和夢です。今回の特別企画であるゲーム制作でシナリオを担当してます」

そう言って手を差し出していくが、彼女はそれを払いのけていく。

「今回ヒロイン役を任されました水野真美です。よろしくお願いします」

特にこれと言って感情を見せずに彼女は会釈をする。そのあまりの無愛想さに、頭を掻くがそんな彼を見て、彼女は頬を緩ませていく。

「でも芸名で挨拶なんて意味ないよね。水野真美、本名はって、自己紹介も今さらか」

「……ああ、本当に今さらだよな」

先ほどの様子から百八十度変わり、彼女は和夢の体に抱きついていく。そして満面の笑みで自己紹介をしていく。

「ヒロイン役に選ばれた外海澄音です。これからずーっと、ずーっとよろしくお願いします」

あとがき

はい、そんなわけでハイスピード更新（笑）な更新速度の白翼でした。

いや、読者の皆様には本当に申し訳ありませんでした。まさか仕事があそこまで忙しくなるとは思わなくて、気が付いたら二週間ほど期間が空いてしまったんですね。

そんな不定期な更新の中、このあとがきまで読んでいただいた読者様には本当に感謝してもしたりないほどです。

さて、今回の話しはいかがだったでしょうか。ビギナーズクリエイトを読んでくれた人は分かるかもしれませんが、今回の話しはある意味ビギナーズクリエイトでも起こりうる一つの道筋です。

創作が面白いものだと気づくビギナーズとは違い、ただ楽しいだけではない。そして自身が一生懸命になろうと、周りがそうであるとは限らないという夢のない話しです。

だけど始まりの自分は確かに創作を楽しんでいた。挫折を味わうことになろうとも、その道を続けているのは何も強迫観念からではない。

この話は創作の楽しさに気付くのではなく、楽しさを思い出すという作品でした。

そして作者的に一つの挑戦をした作品です。それは小説においてタブーとされる、視点をころころと切り替えていくことを技法としてもちいたことです。

正直にいえば読みずらいところもあったと思います。キャラクターに感情移入しきれず、さらに白翼の番号誤字もあり、混乱も招いてしまいました。

しかしそれでもある程度読めるものでしたら、こちらとしてはとてもありがたいことです。

そしていつも通り見苦しいながら、感想やお気に入り登録、レビューや文章評価などをしてもらえると、ほんとーに、ほんとーにありがたいです。

ほんと毎度毎度言っていてあれですけど、どうかよろしくお願いいたします。

さてさて、書きたいことはいくらでもあるのですが、正直体調のほうと喉のほうがあまり芳しくないので、小説をあげたら今日は眠りに付きたいと思います。

それでは本当にここまでのご愛読ありがとうございました！　新人賞のこととかも考えると、次はいつ更新になるかは明言できませんが、また機会があったらころっと帰ってきたいと思います。

今日はこんなところで。

ではは〜　ノシ

ＨＰ　　イノセントウイングス
ＵＲＬ　ｈｔｔｐ：／／ｓｋｙ．ｇｅｏｃｉｔｉｅｓ．ｊｐ／ｈａｋｕｙｏｋｕ１２３／

※　ビギナーズクリエイトの小説紹介のほうにも書きましたが、数日後にあの小説は誠に勝手ながら消去させてもらいます。といいますか、駄目もとでいろいろなところに投稿しようと思いまして、その規約のために消させていただきます。
　皆さまからもらいました感想などは全て保存させていただき、今後の糧にしていきたいと思います。どうぞ、ご理解のほどをよろしくお願いいたします。すみませんでした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2186p/

迷子な俺と家出をした私

2010年12月20日09時26分発行